

第2図 調査区設定図および地区割り図(S=1/1000)

北が高く南に向かって低くなっている。第1トレンチ南区の8A地区付近の標高が最も低く、この付近を中心として、河川氾濫に起因した洪水砂層の存在が認められた。したがって全体の土層堆積状況は第101層～第103層を除けば、北から南に向かって傾斜する基盤地形に沿った堆積状況が窺われる。遺構構築面である第138層オリーブ黒色粘土～極粗粒砂層上面では、北区で古墳時代前期の溝6条 (SD-1～SD-6)、南区で畦畔1条 (畦畔1)・水田1筆 (水田1) を検出している。主な遺物包含層は第112層・第113層・第119層・第135層・第137層である。

・第2トレンチ

上部は耕作地としての土地利用のため改変され、階段状に整備され水平堆積を示しているが、以下は緩傾斜面に沿った堆積状況が看取された。5C地区付近より東部は、遺構構築面である第273層黒色シルト～粗粒砂層上面から上部にわたって、細粒砂～大礫を含む河川氾濫に起因した洪水砂層の堆積が連続しており、5G地区より東で検出したNR-1に関連した土層堆積と推定される。遺構構築面である第273層黒色シルト～粗粒砂層上面の標高は東部でT.P.+11.4m、西部でT.P.+10.3mを測る。5D地区～5G地区にかけて、緩傾斜面を巧みに利用した古墳時代中期の水田6筆（水田2～水田7）、畦畔8条（畦畔2～畦畔9）が検出されている。遺物はNR-1およびNR-1の氾濫に伴う洪水砂層である第228層・第231層・第247層・第283層・第284層から、古墳時代中期から後期を中心とした土器類が多量に出土しているが、全て二次堆積によるものである。

・第3トレンチ

西部を除けば第2トレンチと同様、基盤地形に沿って東から西に向かって傾斜堆積が認められる。調査区内をNR-2が蛇行しているため、これらに関連した細粒砂～大礫を含む洪水砂層の堆積状況が看取された。遺構構築面である第348層黒色粘土～粗粒砂層上面の標高は東端でT.P.+12.6m、西端でT.P.+10.2mを測る。この土層上面で古墳時代前期の溝1条（SD-9）を検出している。遺物はNR-2内および第346層・第348層から縄文時代後期～古墳時代前期（布留式期新相）の土器類が出土している。

・第4トレンチ

第2トレンチ・第3トレンチと同様、上層を除けば東から西に向かって傾斜堆積が認められる。東部では検出した遺構に対応して、第439層を中心とした古墳時代前期の遺物包含層が形成されているが、その部分より西部および上部では河川氾濫に起因した洪水砂層の堆積が看取される。遺構構築面は一定しておらず、東から第473層暗緑灰色極細粒砂～中粒砂層、第474層黒色シルト～細粒砂層、第475層暗青灰色粘土～細粒砂層、第476層暗灰色粘土～極細粒砂層に区別され、標高は東端でT.P.+12.6m、西端でT.P.+10.4mを測る。遺構は東部の第474層黒色シルト～細粒砂層上面で古墳時代前期の土坑1基（SK-1）・溝2条（SD-10・SD-11）、西部の第476層暗灰色粘土～極細粒砂層上面で水田8・畦畔10が検出されている。

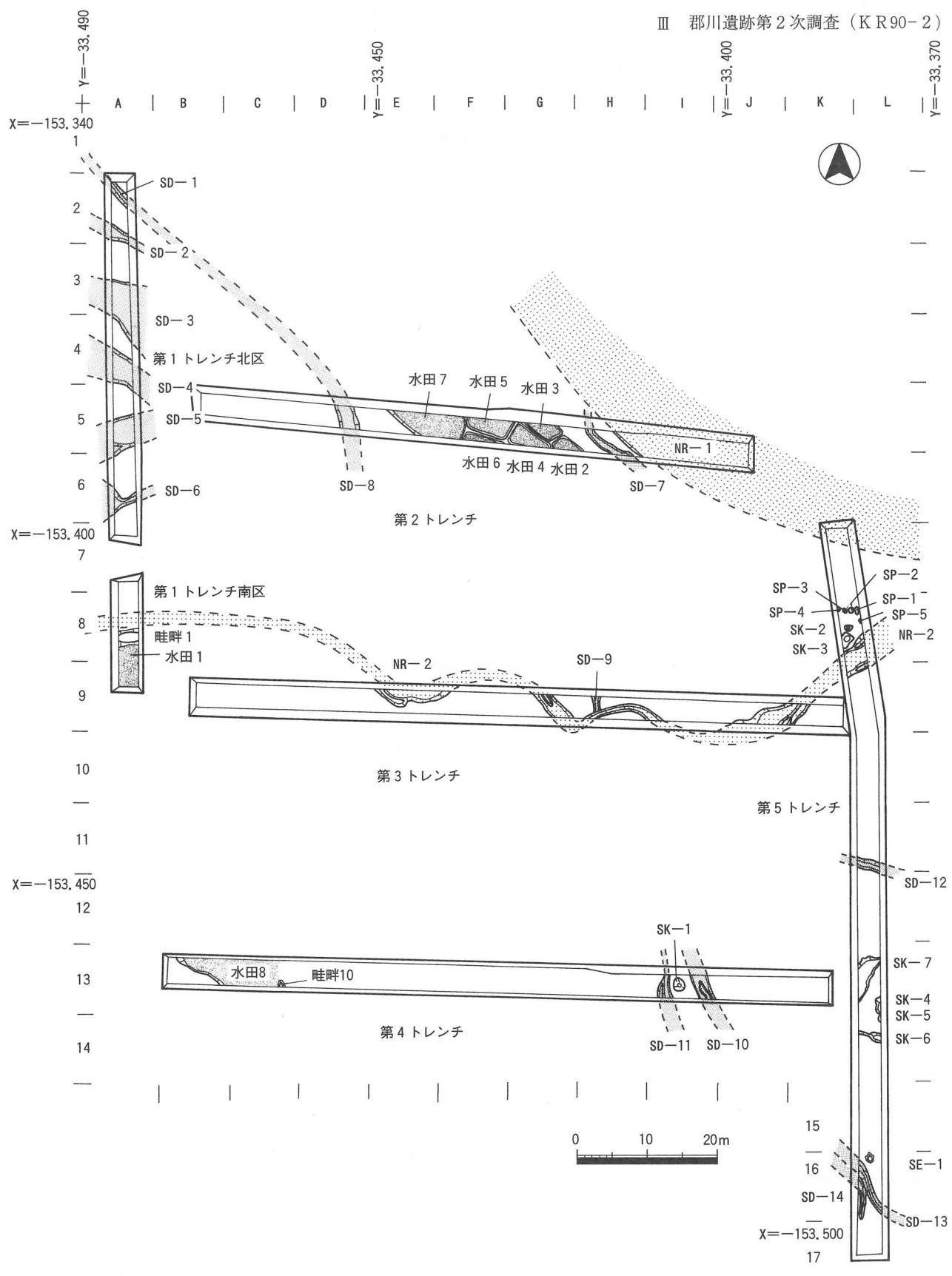
・第5トレンチ

南北方向に設定した調査区である。北端の7K・L地区～13L地区までは、北からNR-1・NR-2・SD-12に関連した細粒砂～大礫を中心とする洪水砂層により、複雑な堆積状況が看取された。2面（第1面・第2面）を調査対象とした。

第1面は北部では、第580層黒色シルト～中粒砂層、第571層黄褐色粗粒砂～中礫層、第560層暗緑灰色細粒砂層上面が構築面で古墳時代中期末～後期初頭の土坑2基（SK-2・SK-3）・小穴5個（SP-1～SP-5）が検出されている。南部では、第545層黒褐色シルト～中粒砂層上面で室町時代の井戸1基（SE-1）が検出されている。

第2面は第589層黒色粘土～粗粒砂層を構築面としており、弥生時代前期から古墳時代前期に至る土坑4基（SK-4～SK-7）、溝3条（SD-12～SD-14）が検出されている。

III 郡川遺跡第2次調査 (K R 90-2)



第3図 検出遺構平面図 ($S = 1/800$)

第3節 各調査区の検出遺構と出土遺物

1) 第1トレーニチ

・第1トレーニチ検出遺構

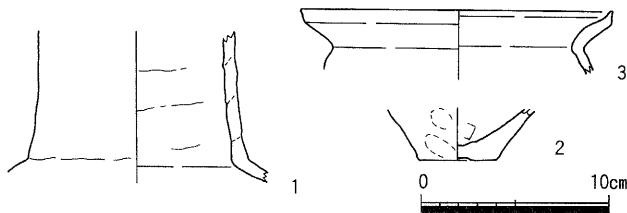
調査対象地北西部に設定した調査区で、調査前の現状は水田である。調査区は南北方向に長いもので、規模は東西幅5m、南北幅70mを測る。なお、調査予定地内の南部で東西方向に走る路が存在しており、この部分を調査対象外にしたため調査区が二分（北区・南区）される結果となった。

調査の結果、北区では現地表下1.3m前後（T.P.+9.7m）に存在する第138層オリーブ黒色粘土～極粗粒砂層上面で古墳時代前期（布留式期）に比定される溝6条（SD-1～SD-6）を検出した。南区では、現地表下1.2～1.4m（T.P.+9.9～9.7m）に存在する第138層オリーブ黒色粘土～極粗粒砂層を調査対象とした結果、調査区の中央から南部で古墳時代前期に比定される畦畔1条（畦畔1）と水田1筆（水田1）を検出した。

溝（SD）

SD-1

2A地区で検出した。北西～南東方向に伸びるもので、検出長3.7m、幅1.1m、深さ0.35mを測る。埋土は中粒砂～中礫を含む2層から成る。遺物は土器類の小片が少量出土したが、一部を除き大半がローリングを受けている。時期的には、弥生時代後期と古墳時代前期（布留式期古相）に区別されるが、弥生時代後期のものが大半で古墳時代前期（布留式期古相）のものは極少量出土した程度である。そのうち、図化し得たものは弥生土器が3点（1～3）で、いずれも、弥生時代後期に比定される。（1）が長頸壺。（2）がやや小型の壺底部。（3）は甕で口縁端部が上方に拡張され、端部が尖り気味で終わる。河内地域の弥生時代後期土器編年の後期後半に位置付けられる上六万寺式の甕と共に通した特徴を呈している。3点ともに生駒西麓産で、色調は（1・2）は褐灰色、（3）が赤褐色である。なお、本遺構の上部を切る第126層が、第2トレーニチで検出したSD-8に対応する可能性が高い。



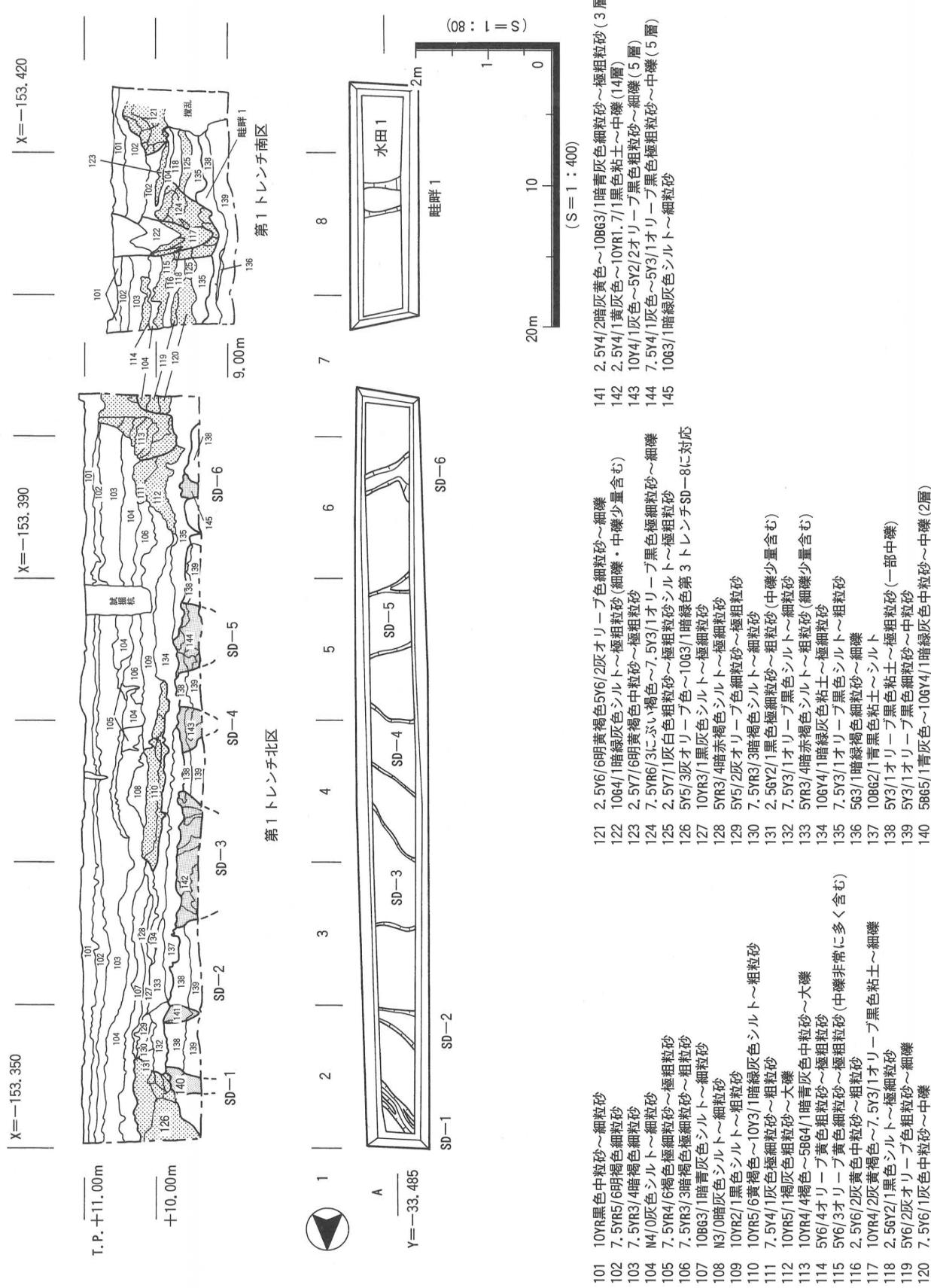
第4図 第1トレーニチ北区SD-1出土遺物実測図

SD-2

2A地区で検出した。東西方向に伸びるもので、検出部分では西部に行くにしたがって幅広になっている。検出長2.2m、幅0.8～2.5m、深さ0.2m前後を測る。埋土は半円状の断面形状に沿って細粒砂～極粗粒砂が優勢な3層がレンズ状に堆積している。遺物は古墳時代前期（布留式期古相）の高杯片が1点出土したが、小片のため図化していない。

SD-3

3・4A地区で検出した。ほぼ東西方向に伸びるもので、検出部分では西に行くにしたがって幅を減じている。検出長2.9m、幅5～8.5m、深さ0.3m前後を測る。埋土は粘土～中礫を含む水成層が不規則に堆積していた。遺物は弥生時代後期と古墳時代前期（布留式期古相）の土器類の小片が極少量出土したほか、流木等が出土している。図化できたものはない。



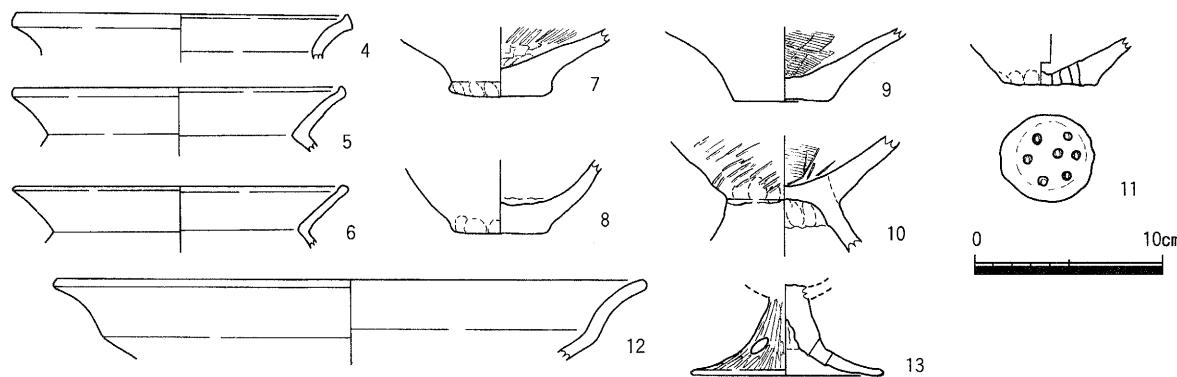
第5図 第1トレンチ平断面図

S D - 4

4・5 A 地区で検出した。北西-南東方向に伸びるもので、検出長2.1m、幅5.2m、深さ0.23mを測る。埋土は粗粒砂～中礫が優勢な4層から成る。遺物は出土していない。

S D - 5

5・6 A 地区で検出した。南西-北東方向に伸びるもので、検出長2.9m、幅4.4～5.4m、深さ0.37mを測る。埋土は極粗粒砂～中礫を含む水成層が不規則に堆積していた。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期（布留式期）に比定される土器類が少量出土しているが、大半が弥生時代後期のもので古墳時代前期（布留式期）のものは極少量である。そのうち、図化したものは10点（4～13）である。いずれも小片で、ローリングを受けたものが大半である。内訳は弥生土器-甕1点（4）・台付き甕1点（10）・壺3点（7～9）・有孔鉢1点（11）・高杯2点（12・13）、土師器甕2点（5・6）である。（4）は口縁端部が内傾して幅広の端面を有する甕である。（10）は台形状の台部が付く甕である。体部外面は右上がりのタタキが施されている。生駒西麓産である。（7～9）は壺底部で、やや突出した平底の（7・8）と突出しない（9）に区別される。3点ともに褐灰色を呈する生駒西麓産である。（11）は有孔鉢の底部で、突出しない平底の底部に径4mm前後の孔が7個焼成前に穿たれている。生駒西麓産である。（12）は高杯の杯部の小片で1/12程度が残存している。ローリングを受けており器壁面の調整は不明瞭である。（13）は裾径10.1cm、脚部高4.6cmを測る小型高杯の脚部である。（5・6）はとともに土師器甕の小片である。（5）が河内型庄内式甕。（6）が口縁端部の特徴から布留式傾向甕に分類される。ともに生駒西麓産である。



第6図 第1トレンチ北区 SD-5 出土遺物実測図

S D - 6

6 A 地区で検出した。南西-北東方向に伸びるもので、検出部分の西端で溝幅を増している。検出長3.0m、幅1.1～3.5m、深さ0.35mを測る。埋土は暗緑灰色シルト～細粒砂の単一層である。遺物は弥生時代後期から古墳時代前期（布留式期）に比定される、弥生土器・土師器の小片が少量出土しているが、そのうち大半が弥生土器で土師器類は極少量出土した程度である。図化したものは6点（14～19）である。その内訳は、弥生土器-複合口縁壺1点（14）・甕1点（15）・有孔鉢1点（17）・高杯1点（18）、土師器-甕1点（16）・小型器台1点（19）である。（14）は複合口縁壺の口頸部で1/12程度が残存している。口縁部下半に櫛描直線文、端部に刺突文が施文されている。甕（15）は口縁端部が上方に外反気味につまみ上げられている。有孔鉢

(17) は突出平底の中央部より少しすれた位置に径0.8cmを測る孔が焼成前に穿たれている。(18) は小型高杯の口縁部の小片である。復元口径16.0cmを測る。(14・15・17・18) はいずれも生駒西麓産で、色調は褐灰色系である。(16) は布留式甕で口縁端部がわずかに内側に肥厚している。淡褐色の色調で、胎土は精良で長石・黒雲母の小粒が僅かに含まれる程度である。(19) は小型器台の杯部である。杯部径は9.1cm、杯部高2.5cmを測る。生駒西麓産で、色調は褐灰色を呈する。

畦畔

畦畔1

第1トレンチ南区のほぼ中央で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長2.7m、上面幅0.8m、基底幅2.0m、高さ0.2mを測る大型の畦畔である。畦畔1は水田1を構成する第138層のオリーブ黒色粘土～極粗粒砂を盛り上げて構築されている。上面には河川氾濫に起因する第135層オリーブ黒色シルト～粗粒砂が堆積しており、この層中から出土した遺物から古墳時代前期（布留式期）のものであることが推定される。なお、畦畔1の北側には小河川の存在が確認できることから、畦畔1は水田を区画する畦畔と小河川の堤の役割を同時に果たしている。

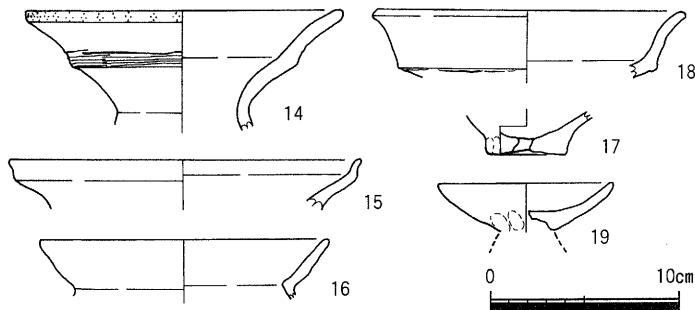
水田

水田1

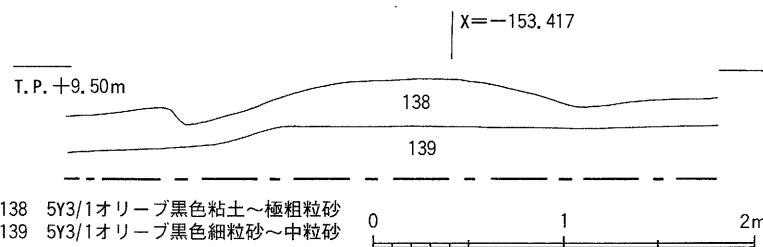
第1トレンチ南区中央部で検出した畦畔1の南部に広がっている。第138層のオリーブ黒色粘土～極粗粒砂層上面を構築面としている。規模は検出部分で東西幅2.5m、南北幅7m程度を測る。畦畔1と同様、上面には河川氾濫に起因する第135層オリーブ黒色シルト～粗粒砂が堆積している。時期は古墳時代前期（布留式期）と推定される。

- ・第1トレンチ遺物包含層出土遺物
- ・第112層出土遺物

第112層は第1トレンチ北区の南部の6A地区で検出された。褐灰色の色調で粗粒砂～大礫を含む洪水に伴う堆積土層である。弥生時代後半～古墳時代後半に比定される土器類の小片が少量出土しており、第3トレンチで検出したN R - 2に関連した土層の可能性が高い。土師器3点(20～22)を図化した。(20)は口縁端部が肥厚し内傾する面を持つ布留式甕である。布留式甕の中でも新相に比定される。(21)は古墳時代初頭（庄内式期新相）～古墳時代前期（布留式期古相）段階に盛行する布留式影響の庄内式甕と推定される。残存率は口縁部の約1/4程度である。口縁部は「く」の字状を呈するもので、口縁端部は内傾し、幅広の面を持っている。器面調整は



第7図 第1トレンチ北区 SD-6 出土遺物実測図



第8図 第1トレンチ南区 畦畔1 東壁断面図

口縁部外面がヨコナデ、内面が斜方向のハケメ調整の後ヨコナデ、体部外面は縦位のハケナデと一部横位のハケナデ、体部内面は屈曲部のやや下部までヘラケズリが施されている。(22) は加飾のある高杯で、杯部の約1/6程度が残存している。口縁部は大きく外反した後角度を水平方向に変え伸びるもので、端部は内傾気味に垂下し幅広の面を形成している。口縁端面および口縁部内面上半に波状文、杯部外面下半にキザミ目文が施文されている。中河内地域においては、検出例が乏しい形式のもので、時期的には古墳時代初頭（庄内式期）の所産と考えられる。

・第113層出土遺物

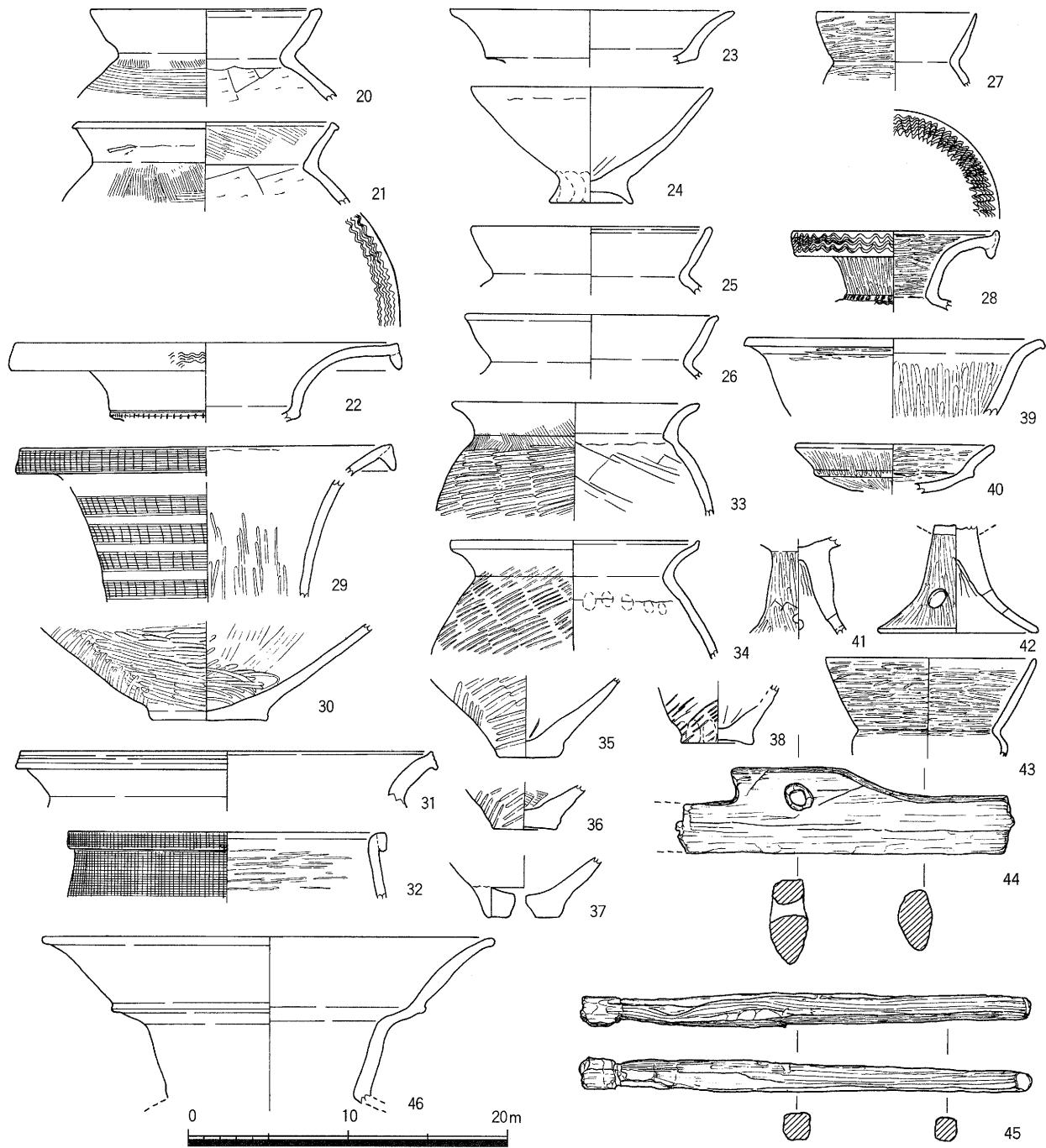
第1トレンチ北区の南端の6・7A地区で検出された。第112層を切って東西方向に伸びる自然流路（幅4m）の堆積土全体を第113層とした。褐色～暗青灰色の色調で、中粒砂～大礫を含んでいる。第3トレンチで検出したNR-2の古墳時代後期頃の流路を示すものと考えられる。遺物は弥生時代後半～古墳時代後期に比定される弥生土器・土師器・須恵器の小片が少量出土している。図化した遺物は5点（23～27）である。その内訳は弥生土器－高杯1点（23）・鉢1点（24）、土師器－布留式甕2点（25・26）・小型丸底壺1点（27）である。（23）は高杯の口縁部で残存率は1/12程度の小片である。生駒西麓産である。（24）は上げ底の底部に斜上方に直線的に伸びる体部が付く鉢である。非生駒西麓産である。（23・24）はともに弥生時代後期の所産である。布留式甕は口縁端部が小さく肥厚する（25）と肥厚幅が大きい（26）がある。前者が古墳時代前期の布留式期古相、後者が布留式期新相に比定される。（27）は小型丸底壺である。小片のため全容は不明であるが、おそらく口径と体部最大径が等しい形態が推定され、古墳時代前期の布留式期のなかでも古相に比定されるものである。

・第119層出土遺物

第1トレンチ北区南端から南区北端にかけて検出された。灰オリーブ色粗粒砂～細礫が優勢な層相で、第112層と同様、NR-2の氾濫にかかる堆積土層である。広口壺1点（28）を図化した。口頸部の大半が残存している。頸部が斜上方に伸びた後、大きく外反して角度を水平方向にえるもので、口縁端部は上下に肥厚し幅広の端面を形成している。加飾は口縁部内面から口縁端面と体部上半に波状文、口頸部と体部の境に刻み目文が施文されている。時期的には古墳時代初頭（庄内式期古相）に比定されよう。

・第135層出土遺物

遺構検出面である第138層上面に堆積する土層で、第1トレンチ北区南部から南区の北部での存在を認めた。弥生時代中期から古墳時代前期（布留式期古相）に比定される弥生土器・土師器・木製品の小片が少量出土している。17点（29～45）を図化した。その内訳は、弥生土器－広口壺1点（29）・壺底部1点（30）・甕1点（31）・鉢3点（32・38・39）・有孔鉢1点（37）・甕4点（33～36）・高杯3点（40～42）、土師器－小型丸底壺1点（43）、木製品2点（44・45）である。（29）は口縁端部を下方に拡張させ幅広の端面を形成する広口長頸壺である。口縁部外面および体部外面に簾状文が施文されている。寺沢・森井氏分類の河内IV-1様式に比定されよう。（30）は壺の底体部で底部は完存している。底径7.2cmを測る。体部外面のヘラミガキは分割を意識したもので、同一方向に密で丁寧な調整が施されている。（29・30）はともに生駒西麓産である。（31）は口縁端部を上下に肥厚させ、端面に擬凹線が巡る。生駒西麓産甕である。（32）は口縁部が段状に肥厚する生駒西麓産の鉢である。（31・32）とともに時期的には（29）



第9図 第1トレンチ北区 第112層(20~22)、第113層(23~27)、第119層(28)、第135層(29~45)、第137層(46)、出土遺物実測図

に対応するものと推定される。(33~36) は弥生時代後期の甕である。(33・34) はともに口縁部が「く」の字状に屈曲するもので、口縁端部が丸味を持つ(33) と上方につまみ上げられ外側に面を持つ(34) に区別される。(35・36) は甕底部で(35) が平底で突出しない底部、(36) はドーナツ底で突出しない底部である。ともに生駒西麓産である。(37) は突出しない平底のほぼ中央部に穿孔が穿たれている。弥生時代後期の有孔鉢である。穿孔は焼成前に底部側から内底面に向かって穿たれており、底部側が広く1.5cm、内面側が0.6cmを測る。鉢は2点図化(38・39)

した。ともに弥生時代後期に比定される。(38) は小型の鉢で、あげ底で突出する底部を有する。体部外面には右上がりのタタキ調整が施されている。(39) は斜上方に伸びる体部から口縁部が屈曲するもので、端部は内傾する面を有する。高杯は3点(40~42) 図化した。3点ともに生駒西麓産のやや小型品で、(40) が口縁部、(41・42) が脚部の資料である。3点ともに弥生時代後期に比定される。(43) は丸底の底部に大きく開く口頸部が付く小型丸底壺である。古墳時代前期の布留式期古相に比定される。木製品(44) は部材の一部と考えられるもので、検出長21.0cm、幅5.4cmを測る。1辺の一部を台形状に削り出し、その部分に径1.8cmを測る孔が穿たれている。(45) は検出長28.2cm、幅12.0cmを測る。棒状木製品で、先端が突起状に削り残されており紡織具の経巻具の可能性があるが判然としない。

・第137層出土遺物

第1トレーニング北区の2A地区~4A地区で検出された。第135層と同様、遺構構築面上層に堆積する土層である。弥生土器・土師器の小片が大半で量も少ない。土師器一複合口縁壺1点(46)を図化した。(46) は復元口径28.0cmを測る大型の複合口縁壺で口頸部の約1/4程度が残存している。古墳時代前期(布留式期新相)に比定されよう。

2) 第2トレーニング

・第2トレーニング検出遺構

調査対象地内の北部に東西方向に設定した調査区で東西幅80m、南北幅5mを測る。調査地点の地形は西に下がる緩斜面で、調査時点では4段に整備された区画が水田として利用されており、東西での比高差は約2.4mを測った。

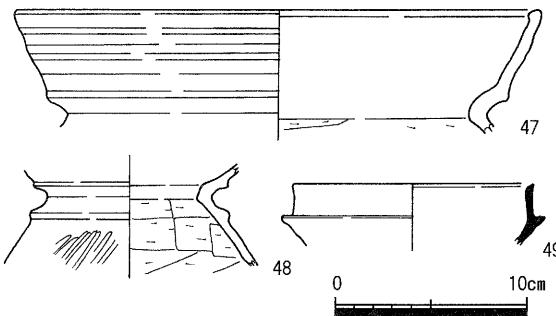
調査の結果、現地表下1.3~2.3m(T.P.+11.4~10.3m)に存在する第273層黒色シルト~粗粒砂層上面で、古墳時代中期に比定される溝2条(SD-7・SD-8)、水田6筆(水田2~水田7)、畦畔8条(畦畔2~畦畔9)で構成される生産域と東部で自然河川1条(NR-1)を検出した。

溝(SD)

SD-7

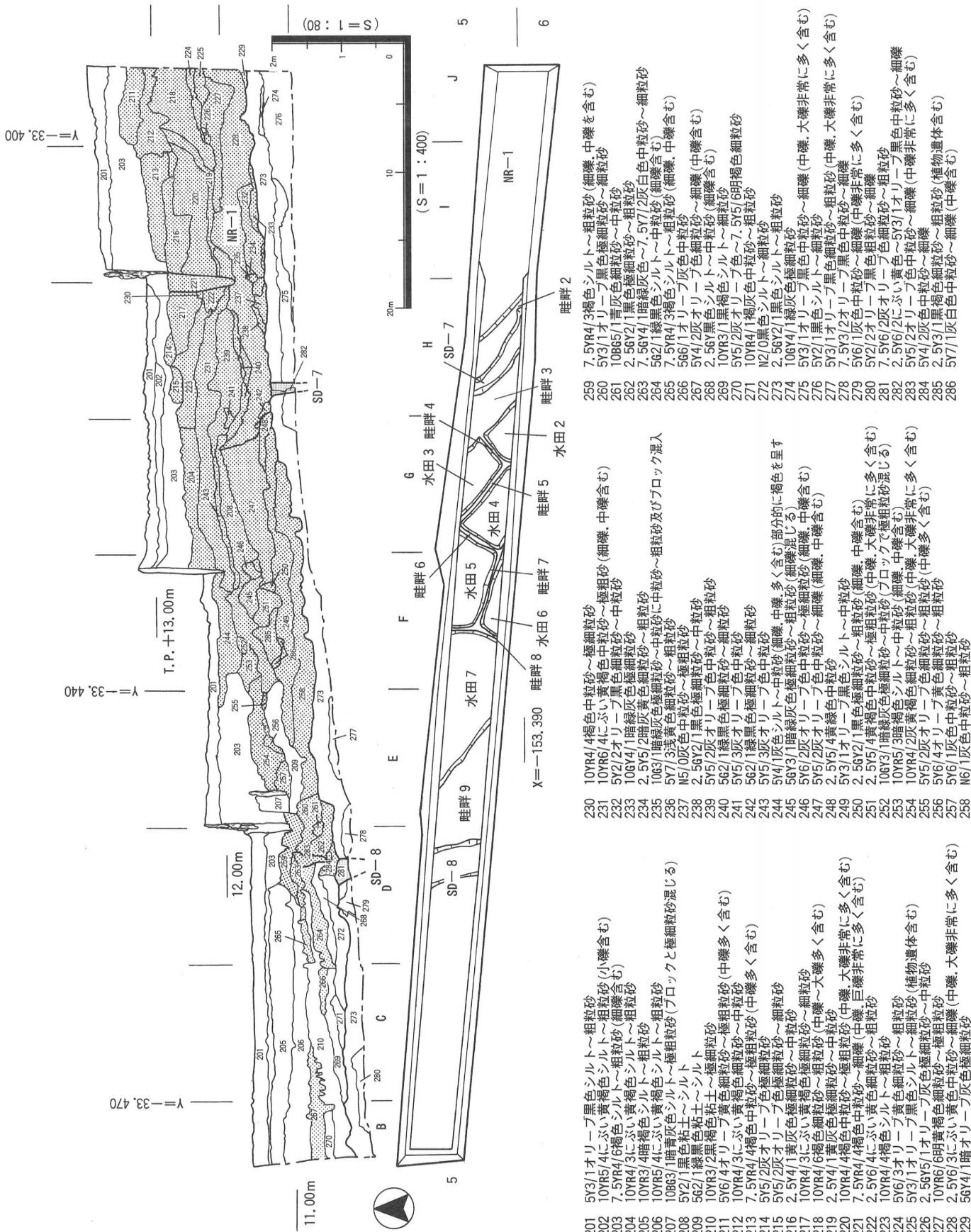
5H地区で検出した。北西~南東方向に伸びるもので、検出長約6m、幅1.2m、深さ0.72mを測る。埋土は中粒砂~細礫が優勢な4層から成る。遺物は弥生時代後期~古墳時代中期末に比定される土器類が少量出土しており、夾雜遺物を除けば古墳時代中期末の帰属時期が推定される。水田遺構の東部に付随しており、水田遺構の灌漑用水を確保する役割を果たした溝と推定される。図化した遺物は古墳時代前期(布留式期古相)

の土師器~鉢1点(47)、鼓形器台1点(48)と古墳時代中期の須恵器杯身1点(49)の3点である。(47) は口縁部が二段に屈曲する山陰系の大型鉢である。復元口径27cmを測る。(48) も山陰地方を中心に分布する鼓形器台である。(47) が灰黄色(48) が淡橙色の色調で、共に、山陰地方からの搬入品と推定される。(49) は



第10図 第2トレーニング SD-7 出土遺物実測図

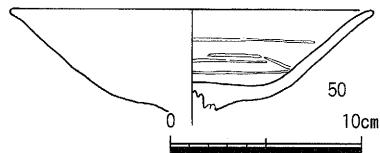
III 郡川遺跡第2次調査 (K R 90-2)



水平方向に短く伸びる受部から、立ち上がりが直上に伸びる形態で、田辺氏編年のT K47型式（5世紀末）に比定されよう。

S D - 8

5 D 地区で検出した。生産遺構の西端を画する溝で、第1トレンチの北端で検出した S D - 1 の上部を切る第126層が同一溝の可能性がある。検出長3.2m、幅約2.5m、深さ0.8mを測る。埋土は中粒砂～粗粒砂が優勢な2層から成る。遺物は弥生時代後期～古墳時代中期に比定される土器類が出土している。大半が弥生後期・庄内式期のもので、遺構存続時期を示す古墳時代中期のものは極少量含まれている程度である。図化した遺物は土師器一高杯1点(50)である。椀形を呈する杯部を持つもので、復元口径18.6cmを測る。形態からみて古墳時代前期(布留式期新相)に比定されよう。



第12図 第2トレンチ S D - 8 出土
遺物実測図

水田 (水田2～水田7)

水田を中心とする生産域は、東端の5 H地区の畦畔2から西端の5 D地区の S D - 8 に至る約42mの間で検出されている。検出部分からみて、畦畔2・3および S D - 7 の構築方向である北西～南東の方向に沿って放射状に広がるものと推定される。調査区が限定されており、1筆耕地および田積を知り得たものはないが、概ね長方形を基本とした水田区画が想定される。第273層上面が水田の構築面で畦畔は黒褐色シルト～極細粒砂層を盛上げて構築されている。生産域全体の灌漑水利では、 S D - 7 の東に存在した N R - 1 から S D - 7 へ導水した後、東部の水田から0.45mを測る比高差を利用して西部の水田に流し、最終的には S D - 8 に排水する水利関係が想定される。なお、水田上面に足跡が点在することや耕作土の下部層に鉄分・マンガンの集積層が形成されていないことから、半乾田であったと推定される。

水田2

北東側が畦畔3、北西側が畦畔4で区画されている。検出部分での規模は3.5×2.7mを測る。床面の標高はT.P. +11.22～11.15mである。

水田3

水田2の北側で検出した。北東側が畦畔3、南東側が畦畔4、南西側が畦畔5に区画されており、検出部分での規模は2.5×5.0mを測る。一筆を復元すれば短辺2.5m、長辺約5.3m、面積13m²程度の長方形の区画が推定される。床面の標高はT.P. +11.12～10.95mである。

水田4

水田3の南側で検出した。北東側が畦畔5、西側が畦畔6に区画されている。検出部分で3.2×5.5mを測る。一筆を復元すれば短辺3.3m、長辺6.0m、面積約20m²を測る。床面の標高はT.P. +11.08～10.96mを測る。

水田5

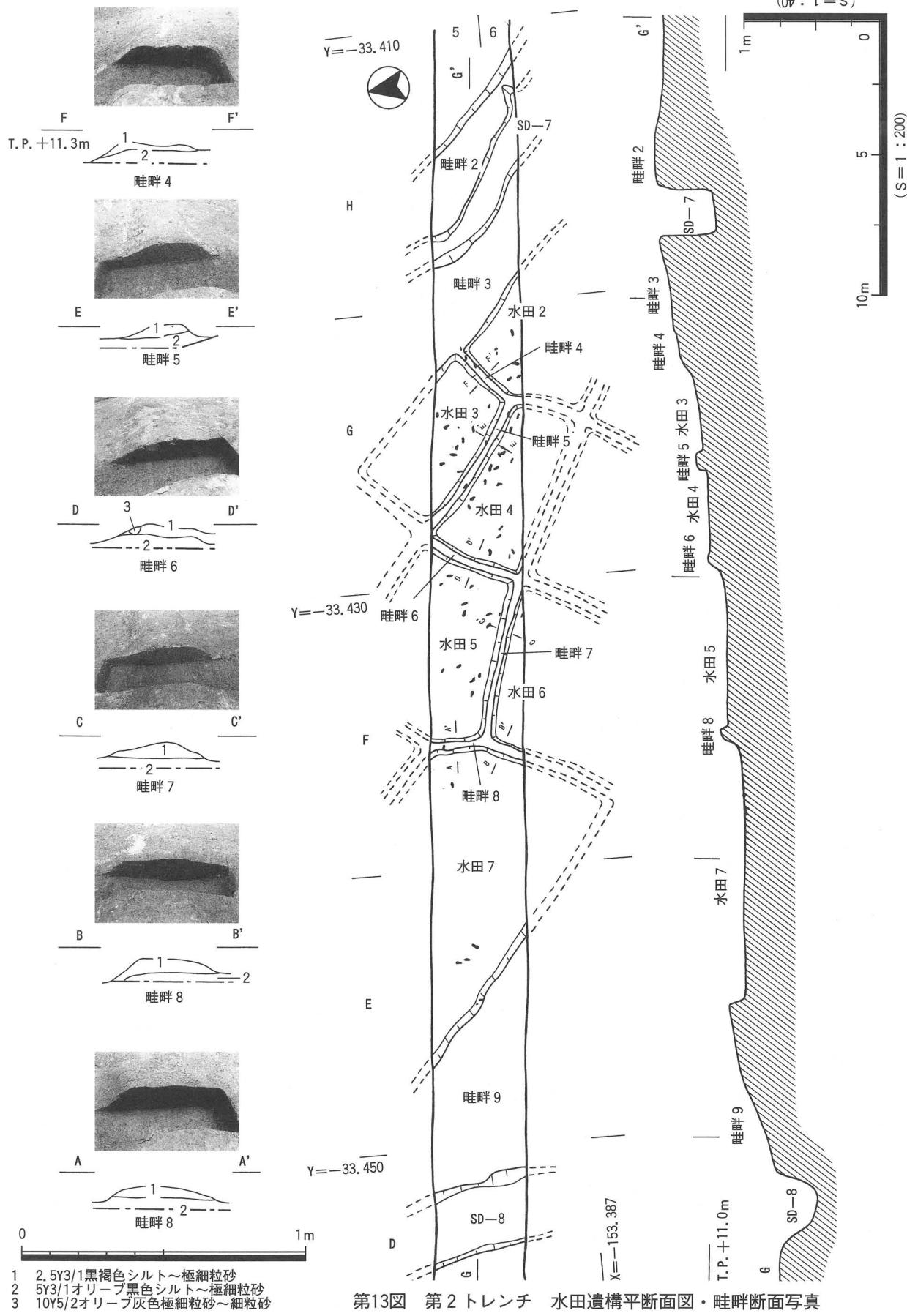
水田4の西側で検出した。東側が畦畔6、南側が畦畔7、西側が畦畔8に区画されている。検出部分での規模は3.0×5.5mを測る。床面の標高はT.P. +10.9～10.85mである。

水田6

水田5の南側で検出した。北側が畦畔7、西側が畦畔8に区画されている。検出部分で5.5×1.2mを測る。床面の標高はT.P. +10.91～10.89mである。

III 郡川遺跡第2次調査 (K R 90-2)

(S = 1 : 40)



第13図 第2トレチ 水田遺構平面図・畠畔断面写真

水田 7

畦畔 8 と畦畔 9 に区画された水田である。他に比してやや区画規模の大きい水田と推定され検出部分で東西幅5.5~10.1mを測る。床面の標高はT.P. +10.81~10.7mを測る。

畦畔（畦畔 2 ~ 畦畔 9）

畦畔 2

S D - 7 の東側に沿って設けられたもので、検出長4 m、幅1.8~2.7m、高さ0.05mを測る。

畦畔 3

S D - 7 の西側に沿って設けられた畔畦で、生産域の東部を区画する大畦畔の機能を果たしている。検出長3.6m、幅3.5~3.7m、高さ0.09~0.18mを測る。

畦畔 4

畦畔 3 に T 字形に接合している。水田 2 ~ 水田 4 を区画するもので、検出長2.9m、上面幅0.17~0.28m、基底幅0.5m、高さ0.05mを測る。

畦畔 5

北西 - 南東方向に伸びるもので、畦畔 4 ・ 畦畔 6 と接合し、水田 3 ・ 水田 4 を区画している。全長5.4m、上面幅0.15~0.3m、基底幅0.5m、高さ0.1mを測る。

畦畔 6

畦畔 5 ・ 畦畔 7 に T 字形に接合するもので、水田 4 ・ 水田 5 を区画している。検出長3.3m、上面幅0.2~0.3m、基底幅0.45~0.6m、高さ0.1mを測る。

畦畔 7

水田 5 ・ 水田 6 を区画するもので、東部で畔畦 6 、西部で畔畦 8 と接合している。全長6.15m、上面幅0.15~0.2m、基底幅0.45~0.5m、高さ0.1mを測る。

畦畔 8

検出部分で逆「く」の字を呈するもので、水田 5 ・ 水田 6 ・ 水田 7 を区画している。検出長3.3m、上面幅0.2~0.3m、基底幅0.5~0.6m、高さ0.1mを測る。

畦畔 9

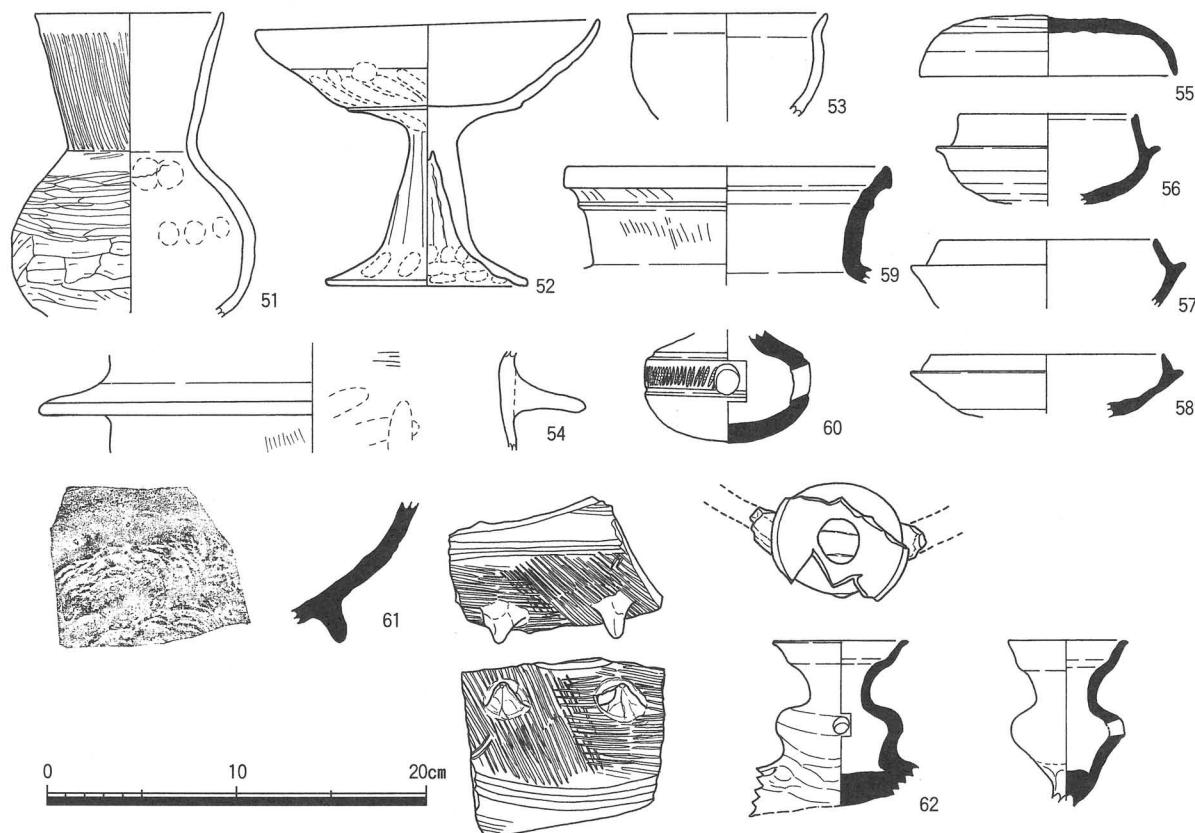
生産域西部を区画するもので、生産域東部端で検出した畦畔 3 と同様、大畦畔の機能を果たしている。検出長3.3m、幅4.4~8.1m、高さ0.07mを測る。

自然河川（N R）

N R - 1

畦畔 2 の東部に広がっている。検出部分で東西幅18.1m、深さ1.9mを測る。古墳時代後期に、この河川の氾濫により水田（水田 2 ~ 水田 7 ）が廃絶した後も度重なる氾濫により、約0.8m程度の細粒砂～中礫を主体とする堆積を繰り返した後、5 G 地区付近を新たに西肩とする流路が確定されたようで、その後もさらに上部に0.3~1.4mにわたって細粒砂～中礫を主体とする堆積がみられた。遺物は下層付近に堆積する第228層と上部に堆積する第231層から、古墳時代後期を中心とした土師器・須恵器がコンテナ 2 箱程度出土しており、東部に同時期の大規模な居住域の存在が示唆される。図化した遺物は12点（51~62）である。一部を除き6世紀後半代を中心とする遺物である。（51）は土師器長頸壺である。6世紀末に比定される。（52）は杯部下半に明瞭な稜を有する土師器高杯で一部を欠損するがほぼ全容を知る得る資料である。口径17.9cm、器高13.8

cm、裾径10.6cmを測る。(53)は楕形の底体部から上外方に短く伸びる口縁部が付く土師器鉢である。復元口径10.5cm前後を測る。(54)は土釜の鍔部分である。(55)はやや偏平な形態を呈する須恵器杯蓋である。内外面に赤色顔料が塗布されている。TK43型式(6世紀後葉)前後に比定されよう。須恵器杯身は3点(56~58)図化した。いずれも小片である。(56)は底体部がやや深目で、水平方向に伸びる受部から立ち上がりは内傾して伸びる。TK47型式(5世紀末)の所産と推定される。(57)は立ち上がりが内傾するものでTK10型式(6世紀中葉)、(58)は立ち上がりが短いものでTK43型式(6世紀末)に比定される。(59)は須恵器甕で口頸部の約1/4程度が残存している。ローリングを受けており器壁面の摩耗が顕著である。6世紀前半の所産と推定される。(60)は須恵器體で底体部は完存している。体部中位には2本の沈線間に列点文が施文されている。円孔は内側に傾斜する角度に穿たれており、径1.6cmを測る。自然釉が体部上半から体部下半にかけて認められる。TK10型式(6世紀中葉)に比定されよう。(61)は須恵器片で外面にタタキ調整、内面に青海波タタキが施されている。基部に2.8cm前後、高さ1.8cmを測る角状の突起2個が貼り付けられている。形態的には不明な点が多いが、外面に施文された沈線が円形に巡る可能性が高いことから、おそらく大型器台の杯部下半の破片と推定される。(62)は須恵器の装飾器台の口縁部を飾った小型の體である。口頸部の一部を欠く以外は完存しており、體部分の数値は口径7.2cm、器高7.0cm、体部最大径6.6cmを測る。遺物の性格から、おそらく古墳埋葬儀礼における供献土器に使用された装飾器台の一部と推定される。遺跡東方の生駒山西麓部に展開した高安古墳群に関連する遺物と考えられる。(52・56・59・60)が第231層でその他が第228層出土遺物である。



第14図 第2トレンチ NR-1出土遺物実測図

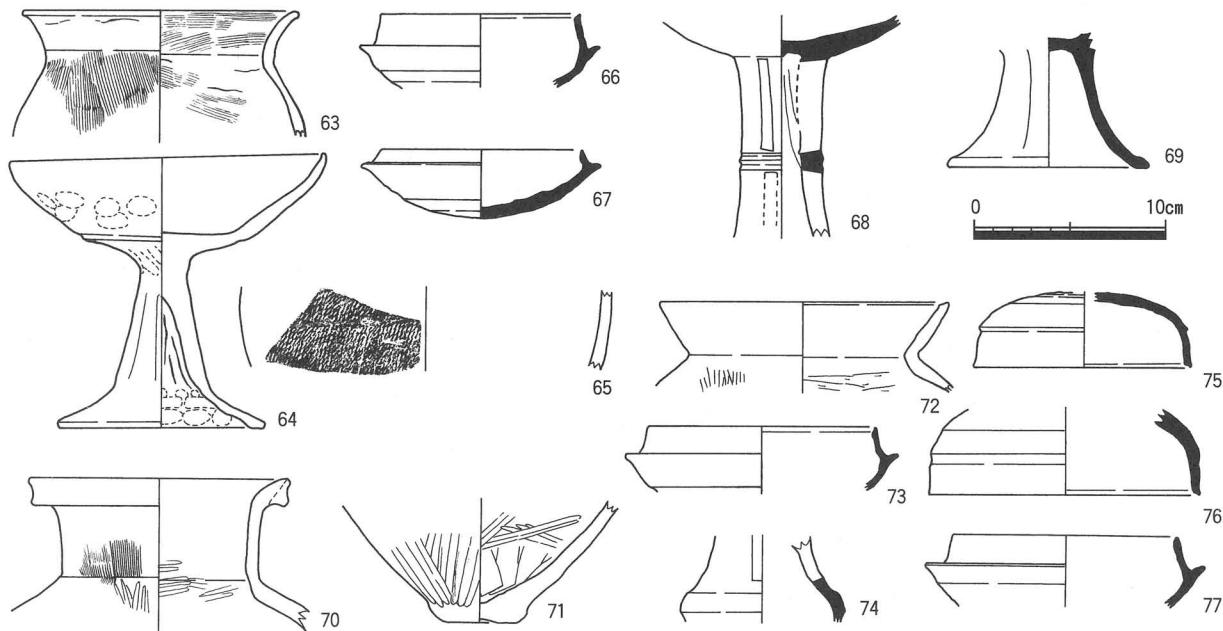
・第2トレンチ遺物包含層出土遺物

・第247層出土遺物

第247層はNR-1の西肩に切られた土層であるが、基本的にはNR-1内堆積土と同様中粒砂～細礫が優勢な層相であり、固定化する以前のNR-1に関連した堆積層の可能性が高い。なお、出土した遺物からも時期差は認めらず、本層とNR-1内の堆積時期が比較的近い時期であったことが推定される。弥生時代後期から古墳時代後期に至る土器類が多量に出土しているが、洪水に起因する堆積土層のため、土器類は大半がローリングを受けた小片で占められている。7点(63～69)を図化した。(63～65)は土師器、(66～69)は須恵器である。(63)は復元口径14.6cmを測る土師器甕である。(64)は土師器高杯で、口縁部の一部を欠く以外は完存している。(59)と同様、口縁部下半に明瞭な段を有するもので、口径16.8cm、器高14.2cm、裾径10.5cmを測る。(65)は体部外面に螺旋状沈線文と繩蓆文タタキを施文する韓式系土器で、器種は壺・鍋・甌等が推定される。5世紀中葉～後葉に比定されよう。(66・67)は須恵器杯身で型式的には(66)が古くMT15型式(6世紀前葉)、(67)がTK217型式(7世紀前葉)に比定される。(68)は長脚2段透し窓を有する高杯である。外面に灰かぶりが認められる。(69)は高杯の脚部である。脚部外面には縦方向に透し窓を表現した3本の沈線が存在している。

・第283層出土遺物

第2トレンチ西部の5D地区の現地表下1.0m(T.P.+11.0m)付近で検出した小河川内に堆積した土層である。灰オリーブの色調で中粒砂～細礫が優勢な洪水層である。弥生時代後期～6世紀初頭に比定される土器類が含まれている。5点(70～74)を図化した。(70・71)はともに弥生時代後期に比定される弥生土器で(70)は広口壺、(71)は壺底部である。広口壺(70)は口縁端部が下方に拡張され、幅広の端面を形成している。復元口径13.6cmを測る。(71)はやや突出したドーナツ底を呈する壺の底部である。(70・71)はともに生駒西麓産である。(72)は口縁端部が内傾肥厚する布留式甕の小片で、布留式甕のなかでも新相に比定されるものである。



第15図 第2トレンチ第247層(63～69)、第283層(70～74)、第284層(75～77)出土遺物実測図

(73) は須恵器杯身の小片である。6世紀前葉の所産である。(74) は短脚の須恵器有蓋高杯の脚部である。外面に灰かぶりが認められる。時期的には(73)と近い時期が想定される。

・第284層

第283層の下部に堆積する土層である。灰色粒砂～細礫が優勢な層相で洪水に起因する土層である。3点(75～77)を図化した。いずれも須恵器の小片である。

(75・76) は杯蓋で1/4～1/6程度の小片

である。形態の特徴では稜が退化した(76)が型式的には新しいTK10型式(6世紀中葉)に、(75)がMT15型式(6世紀前葉)に比定される。(77)は杯身でTK10型式(6世紀中葉)に比定される。

3) 第3トレンチ

第3トレンチ検出遺構

第2トレンチの南に設定した。東西方向のトレンチで東西幅95m、南北幅5mを測る。第2トレンチ設定地点と同様、西に向かって下がる傾斜面を持つもので、現状では階段状に3段に整備されており、東西の比高差は約2mを測る。調査の結果、現地表下1.2～1.7m(T.P.+12.6～10.2m)に存在する第348層黒色粘土～粗粒砂上面で古墳時代前期に比定される溝1条(SD-9)、自然河川1条(NR-2)を検出した。

溝(SD)

SD-9

9H地区で検出した。南北方向に伸びるもので、南端はNR-2に切られている。検出長1.9m、幅1.4～1.6m、深さ0.29mを測る。埋土は暗灰黄色細粒砂～粗粒砂である。遺物は出土していない。

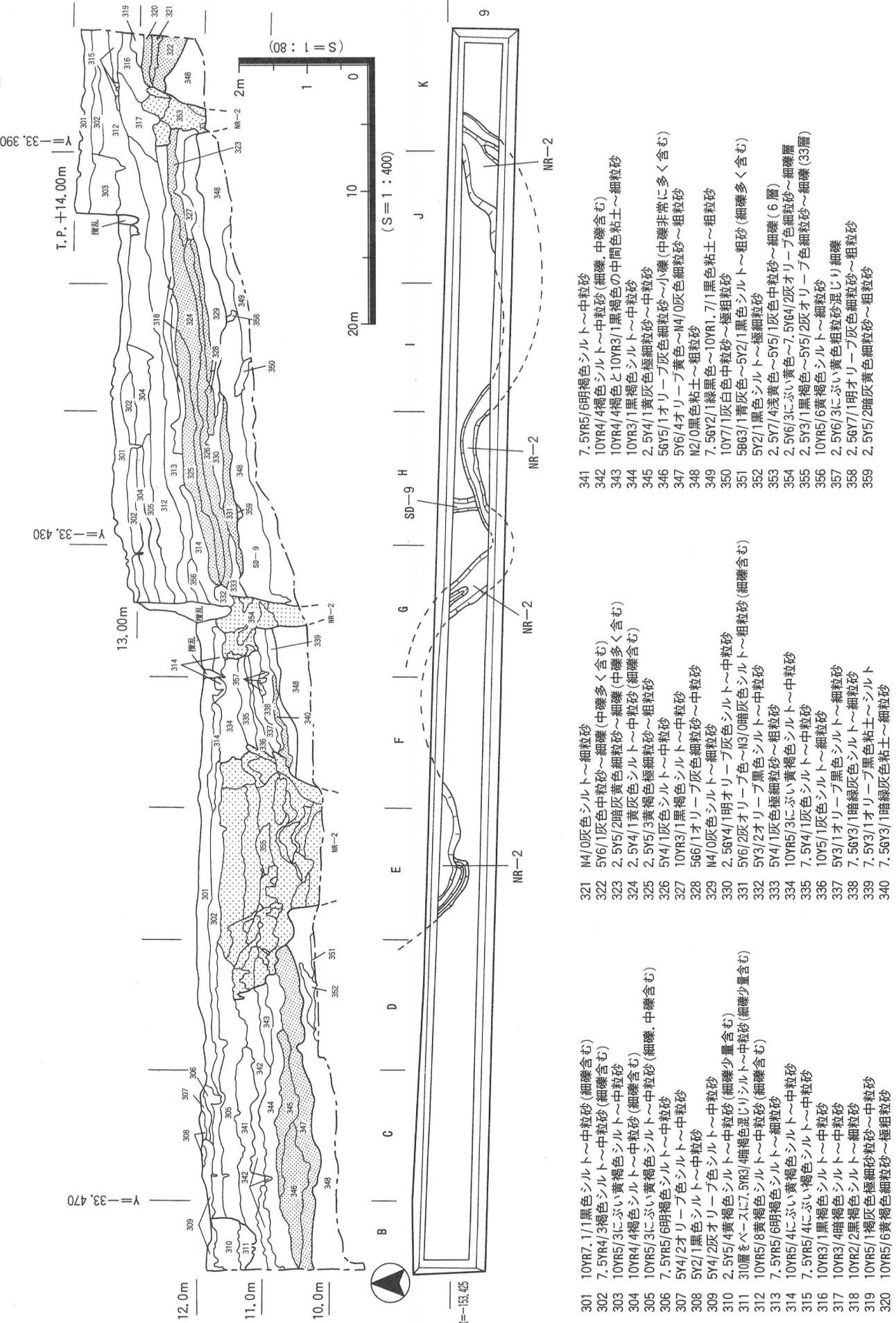
自然河川(NR)

NR-2

第5トレンチ北部の8K地区から第3トレンチの9E地区～9J地区で検出された。ただ、本来の構築面は東部で現地表下0.9m、西部で地表下0.3m付近であり、検出したSD-9と同時期に併存したものではない。検出部分で流路を推定すれば、第5トレンチ北部から第3調査区東部にかけて北東～南西方向に伸びた後、第3トレンチ内では蛇行を繰り返し9E地区付近から北西に流路を変えるもので、西部では、1トレンチ南区の畔畦1の北側付近に流路が続くものと推定される。幅2.4～3.2m、深さ1.0mを測る。埋土の大半が中粒砂～中礫を中心とする砂層で充填されており、大規模な出水に伴う度重なる堆積状況が想定される。遺物は縄文土器・弥生土器・土師器が出土しているが、比率的には古墳時代前期後半～中期初頭に比定されるものが大半を占めることから、古墳時代中期初頭までは河川としての機能を果たしたものと推定される。図化した遺物は19点(78～96)である。(78)が縄文土器、(79～82)が弥生土器、(83～96)が土師器

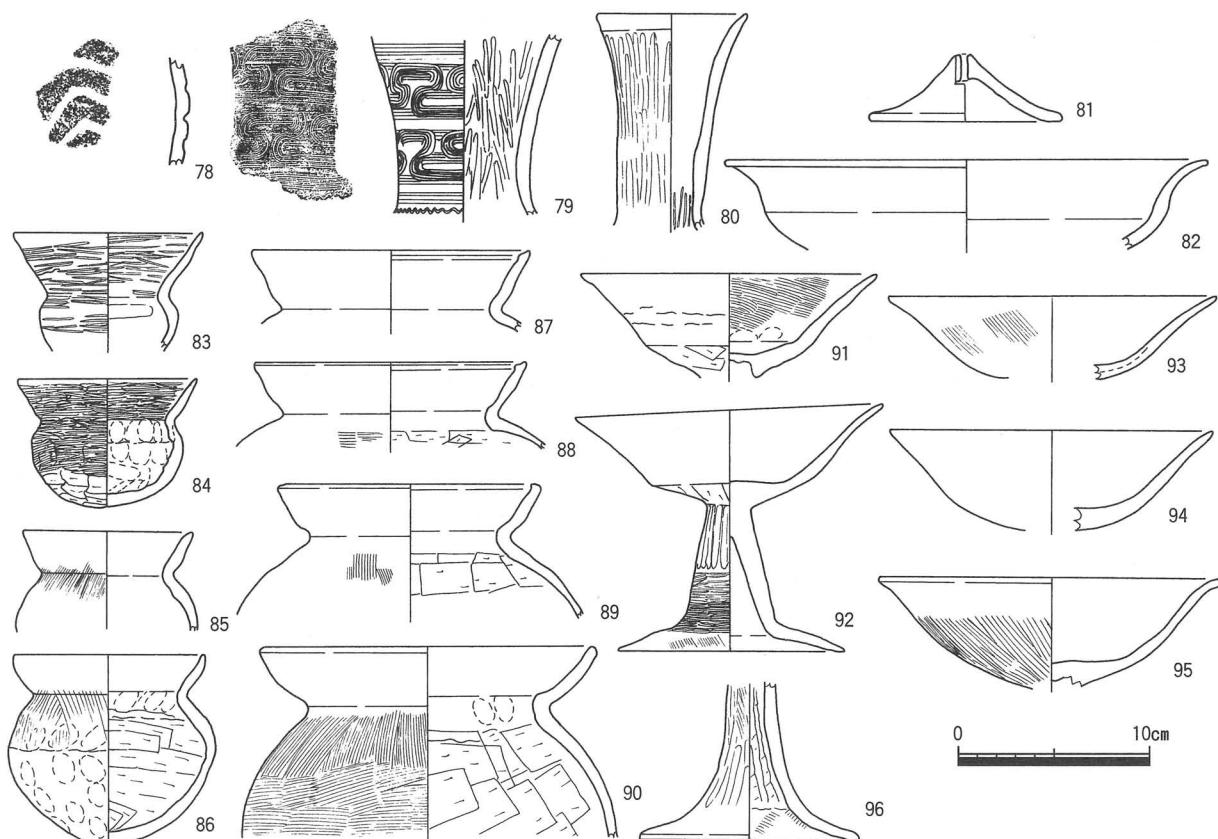


写真1 第2トレンチ調査風景(東から)



第16図 第3 レンチ断面図

である。(78) は深鉢の口縁部と推定される。口縁部外面に沈線文が施されている。1 mm前後の長石・石英・角閃石粒を多量に含むやや粗製の胎土が使用されている。後期後葉～晚期前葉のものか。(79) は畿内第Ⅲ様式に比定される細頸壺の頸部の小片である。残存部分の文様帶は、流水文と波状文で構成されている。生駒西麓産である。(80) はラッパ状に広がる口縁部を有する細頸壺である。口縁部は完存しており口径7.8cm、頸部高11.2cmを測る。畿内第V様式に比定される。生駒西麓産である。(81) は傘形を呈する蓋である。天井部分に径0.4cmを測る円孔が焼成前に内側から穿たれている。非生駒西麓産である。(82) は杯体部から口縁部が強く外反する弥生後期の高杯である。復元口径25.2cmを測る。生駒西麓産である。小型丸底壺は4点(83～86)図化した。(86) が完形品で、他は1/2～1/4程度が残存している。形態的には半球形の体部から口縁部が斜上方に大きく広がり、体部最大径に比して口径が大きく凌駕する(83)、半球形の体部から口縁部が斜上方に短く伸びる(84・85)、球形の体部から口縁部が斜上方に伸びるもので、体部最大径が口径を凌駕する(86) に区別される。(83・84) が布留式古相、(85・86) が布留式期新相に比定される。胎土は(83・84) が精良で、(85・86) はやや粗い。土師器壺は4点(87～90) を図化した。いずれも口縁部の残存率が1/2～1/8程度の小片である。(87・88) が布留式期新相に比定される布留式壺、(89・90) は一部布留式壺の属性を残すものの形骸化が顕著である。土師器高杯は6点(91～96) を図化した。全容を知り得るものは(92) のみであるが、杯部の形状から杯部屈曲部に明瞭な稜を持ち、杯体部がケズリによる調整が施されている(91・92) と杯部屈曲部が丸味を持ち、半球形を呈する(93～95) に区別される。前者が布留式期古相、後者



第17図 第3トレンチ NR-2出土遺物実測図

が布留式中相～新相に比定される。

- ・第3トレンチ遺物包含層出土遺物
- ・第346層出土遺物

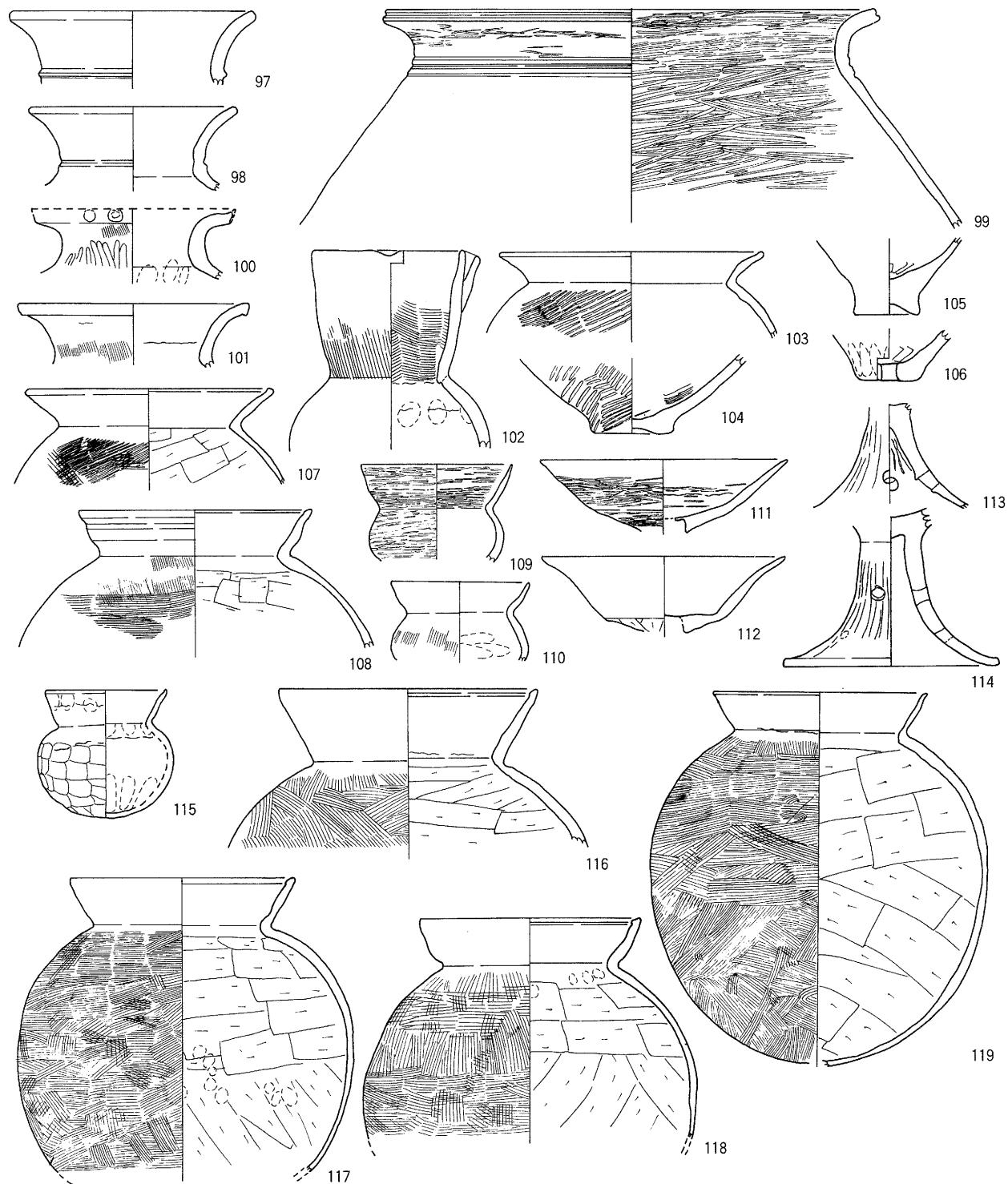
第3トレンチ西端部付近に堆積している。オリーブ灰色の色調で細粒砂～小礫が優勢な洪水中に伴う土層である。弥生時代前期～古墳時代後期に比定される土器類がコンテナ1箱程度出土している。18点(97～114)を図化した。

(97～99)は畿内第I様式の弥生土器広口壺で、口径13.2～15.8cmを測る(97・98)と口径32.2cmを測る大型の(99)がある。頸部上半に突帯が巡る(97)と沈線が巡る(98)がある。(99)は口縁端面に1条の沈線と頸部上半に2条の突帯が巡る。3点ともに非生駒西麓産である。(100～106・113・114)の弥生土器群はいずれも畿内第V様式に比定されるものである。(100・101)は広口壺で、頸部が直上に伸びた後、強く外反し幅広の端面を持つ(100)と頸部が上外方にゆるやかに外反し、端部付近で下方に拡張させ平坦な端面を持つ(101)がある。(100)は端面に竹管押圧文が施されている。(100)が生駒西麓産、(101)が非生駒西麓産である。(102)は口縁部に注ぎ口が付く長頸壺である。生駒西麓産である。(103・104)が体部外面に右上がりのタタキ調整を施す甕である。甕(104)の底部はドーナツ底で突出した底部を持つ。(103)が生駒西麓産、(104)が非生駒西麓産である。(105)はあげ底で突出した底部を有する鉢である。非生駒西麓産である。(106)は突出しない平底の底部を有する有孔鉢の底部である。穿孔はほぼ中央部に穿たれており、径0.8cmを測る。(107)は体部外面に右上がりの細筋タタキを施す庄内式甕で、時期的には庄内式期新相に比定される。(108)は布留式甕で時期的には布留式期古相に比定される。(109・110)は小型丸底壺で、横方向のヘラミガキを施す(109)が精製品で、外面体部に縦方向にハケ調整を施す(110)がやや粗製品である。時期的には2点ともに布留式期古相に比定されよう。高杯は4点(111～114)図化した。杯部が残存する(111・112)が布留式期古相、脚部のみ残存する(113・114)が弥生時代後期に比定される。(111・112)は杯体部から口縁部が斜上方に直線的に伸びる(111)と外反気味に伸びる(112)がある。

- ・第348層出土遺物

第348層は上面を調査対象面とした土層で、調査区全域で検出された。黒色の色調で西部が粘土で東部に行くにしたがって粗粒砂が優勢な層相である。古墳時代前期(布留式期新相)を中心とした土師器類が極少量出土している。5点(115～119)を図化した。

(115)は球形の体部に斜上方に直線的に伸びる口縁部が付くもので、時期的には布留式期新相に比定される。布留式甕は3点(116～118)図化した。(116)は普遍的に見られる布留式甕に比して口縁部がやや長く、体部径もやや大きいが、外面に煤が付着していることから布留式甕と捉えた。(117)は口縁部が直線的に伸び端部の肥厚が大きい。(118)は口縁部が内彎気味に立ち上がり端部が小さく肥厚している。(117・118)は形態的には(118)が古く布留式期古相～中相、(117)が布留式期新相に比定されよう。(119)は長胴気味の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付くもので、口縁端部は肥厚せず外反して尖り気味で終わる。布留式甕の後出形態である長胴甕の古段階の形態と理解される。



第18図 第3トレンチ第346層(97~114)、第348層(115~119)出土遺物実測図

4) 第4トレンチ

・第4トレンチ検出遺構

第3トレンチの南に設定した。東西方向のトレンチで東西方向102m、南北方向5mを測る。第2トレンチ・第3トレンチと同様、西に向かって下がる傾斜面を持つもので、階段状に4段に整備されており、東西の比高差は1.9mを測る。調査の結果、現地表下0.8~1.7m（標高12.5~10.4m）付近に存在する第473~476層上面で古墳時代初頭（庄内式期）～前期（布留式期）に比定される土坑1基（SK-1）、溝2条（SD-10・SD-11）、水田1筆（水田8）、畦畔1条（畦畔10）を検出した。

土坑（SK）

SK-1

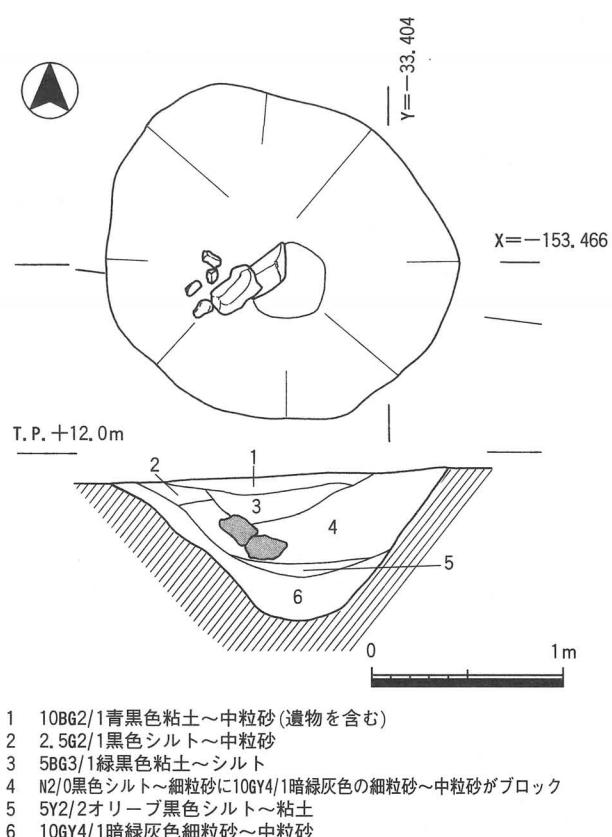
13I地区で検出した。円形状を呈するもので、断面形状は摺鉢状を呈する。東西径1.87m、南北径1.7m、底径0.45m、深さ0.77mを測る。埋土は断面形状に沿って6層が堆積している。遺物は第4層中に拳大から人頭大の石材が集積して出土したほか、最上層の第1層からは古墳時代初頭（庄内式期）のなかでも新相に比定される庄内式甕等が集中して出土している。図化したものは4点（120~124）である。（120~122）は庄内式甕、（123）はV様式系甕、（124）は台石である。（120・121）は体部最大径を中位に持つ球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部がつく河内型庄内式甕である。体部外面は中位付近まで右上がりの細筋タタキ（5本/cm）の後、縦位のハケメ、体部内面は中位を境に下部が縦方向、上部が横方向のヘラケズリが施されている。ともに、灰褐色の色調で、胎土は角閃石を含む生駒西麓産である。

（122）を含めて筆者分類の甕B₃にあたるもので、庄内式土器分類の庄内式期新相にあたる庄内Ⅲ期に比定される。（123）は底部下半のみが残存する。底部はわずかに突出する小さい平底を呈するもので、いわゆるV様式系甕に分類されるものである。体部外面は右上がりのタタキ、内面はナデおよび左上がりのハケ調整が施されている。生駒西麓産である。台石（124）は第4層から出土した。縦29.4cm、横19.0cm、厚さ10.4cmを測る。石材は橄欖石安山岩である。

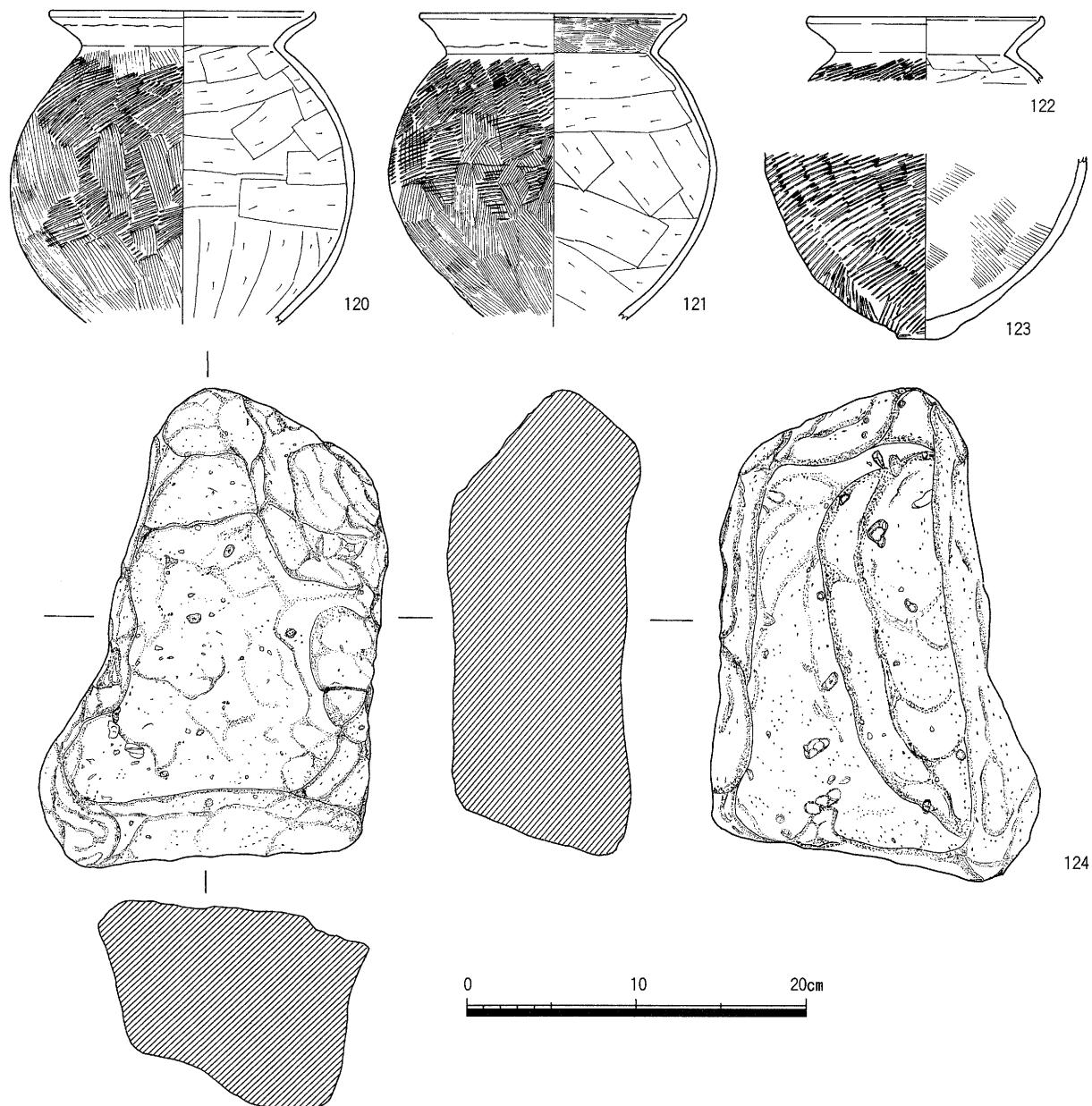
溝（SD）

SD-10

SK-1の東部で検出した。北西-南東方向に伸びるもので、中央部付近に流路方向に沿って小さく突出する部分が存在している。検出長3.1m、幅2.7m、深さ0.35mを測る。埋土は暗灰色砂質土の単一層である。遺物は弥生時代前期に比定される土器類が極少量出土している。図化し



第19図 第4トレンチ SK-1 平断面図

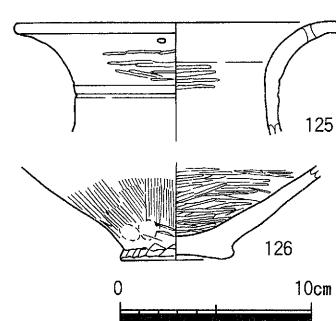


第20図 第4トレンチ SK-1出土遺物実測図

得た遺物は2点(125・126)である。(125)は広口壺で、頸部上半に2条の沈線と口縁部下半に紐穴がある。(126)は上げ底で「ハ」の字状に突出するもので鉢の底部と推定される。底径6.0cmを測る。2点ともに非生駒西麓産である。

SD-11

SK-1の西部で検出した。南北方向に伸びるもので、中央部から南では2段の掘形を有しており、北端部分で溝幅を減じている。検出長2.75m、幅0.9~2.15m、深さ0.25mを測る。埋土は暗灰色砂質土の单一層である。遺物は弥生時代中期と古墳時代初

第21図 第4トレンチ SD-10
出土遺物実測図



第22図 第4 レンチ断面図

頭（庄内式期）に比定される土器類が極少量出土しているが図化し得た図化し得たものはない。

水田

水田 8

13D地区で検出された畦畔10の西部一帯に広がるもので、西端は13B区で検出された段状を呈する部分までの9~14mがその範囲と考えられる。水田を構成する土層は第476層暗灰色粘土~極細粒砂で、東部から西部に向かって下がっており、その比高差は7cmを測る。第1トレーンチ南区で検出した水田1と同時期のものと推定される。時期的には古墳時代前期（布留式期）に比定される。

畦畔

畦畔10

13C区で検出した。検出部分では南壁部分を含めて1m程度が検出されたのみで不明な点が多い。水田耕土である第476層暗灰色粘土~極細粒砂を盛り上げて構築されているもので、上面幅0.3m、基底幅0.7m、畦畔高0.05mを測る。時期的には水田1と同様、古墳時代前期（布留式期）に比定される。

- ・第4トレーンチ遺物包含層出土遺物

- ・第407層出土遺物

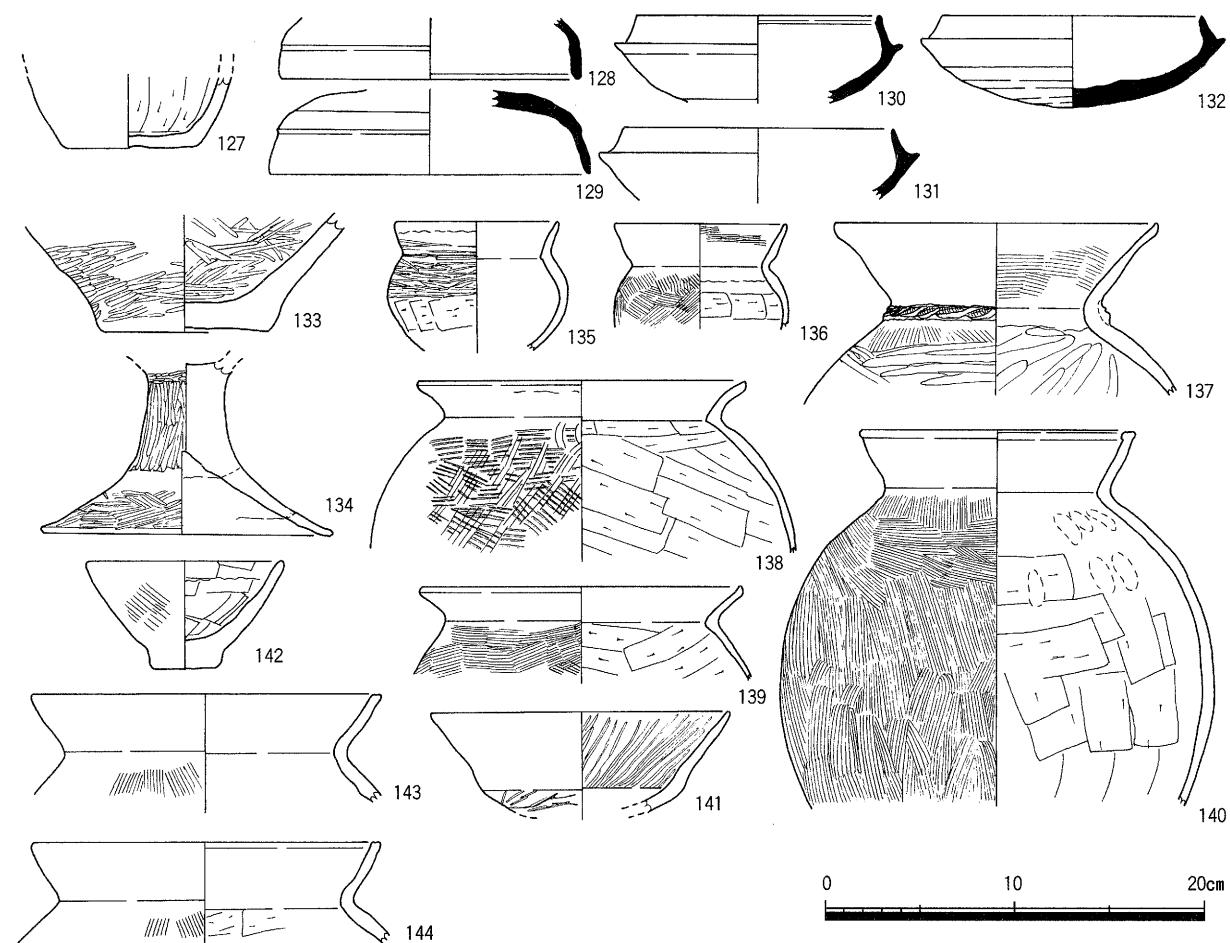
第407層は調査区東部の13J・K地区付近に分布している。色調は灰黄褐色でシルト~極粗粒砂の層相である。弥生土器・土師器・須恵器が少量出土しているが、大半が6世紀を中心とした遺物である。6点（127~131）を図化した。（127）は平底の底部を有する小型の土師器平底鉢である。底径7.1cmを測る。（128・129）は須恵器杯蓋である。形骸化した稜を持つ（129）と稜を持たない（128）に区別される。前者が6世紀中葉、後者が6世紀後葉の所産である。須恵器杯身は3点（130~132）図化した。形態的には（130・131）がTK10型式（6世紀中葉）、（132）がTK209型式（6世紀末~7世紀初頭）前後に比定されよう。

- ・第439層出土遺物

第439層は調査区東部の13H~J地区付近に分布している。黒色粘土~シルト層で細礫が少量含まれている。遺構検出面の一つである第474層の上面に堆積している。弥生時代前期・古墳時代前期（布留式期古相~布留式期新相）を中心とした遺物が少量出土している。9点（133~141）を図化した。（133・134）が弥生土器、（135~141）が土師器である。（133）は壺底部で底径9.0cmを測る。弥生時代前期の所産と考えられる。（134）は弥生時代後期（畿内第V様式）に比定される高杯の脚部である。（135・136）はともに半球形の体部から口縁部が斜上方に直線的に伸びる小型丸底壺である。（135）は体部中位を境として下半がケズリ、上半がヘラミガキである。（136）は体部外面に細かい単位のハケ調整が施されている。古墳時代前期（布留式期古相）に盛行する型式で、同時期においては精製品が一般的であるが、2点ともに0.5~1mm程度の小砂粒を含むやや粗い胎土が使用されている。色調は（135）が淡褐色、（136）が灰白色である。（137）は直口の広口壺である。屈曲部外面には幅0.6cmを測る貼り付け突帶の上面に刻み目文が施文さ



写真2 畦畔10断面(北から)

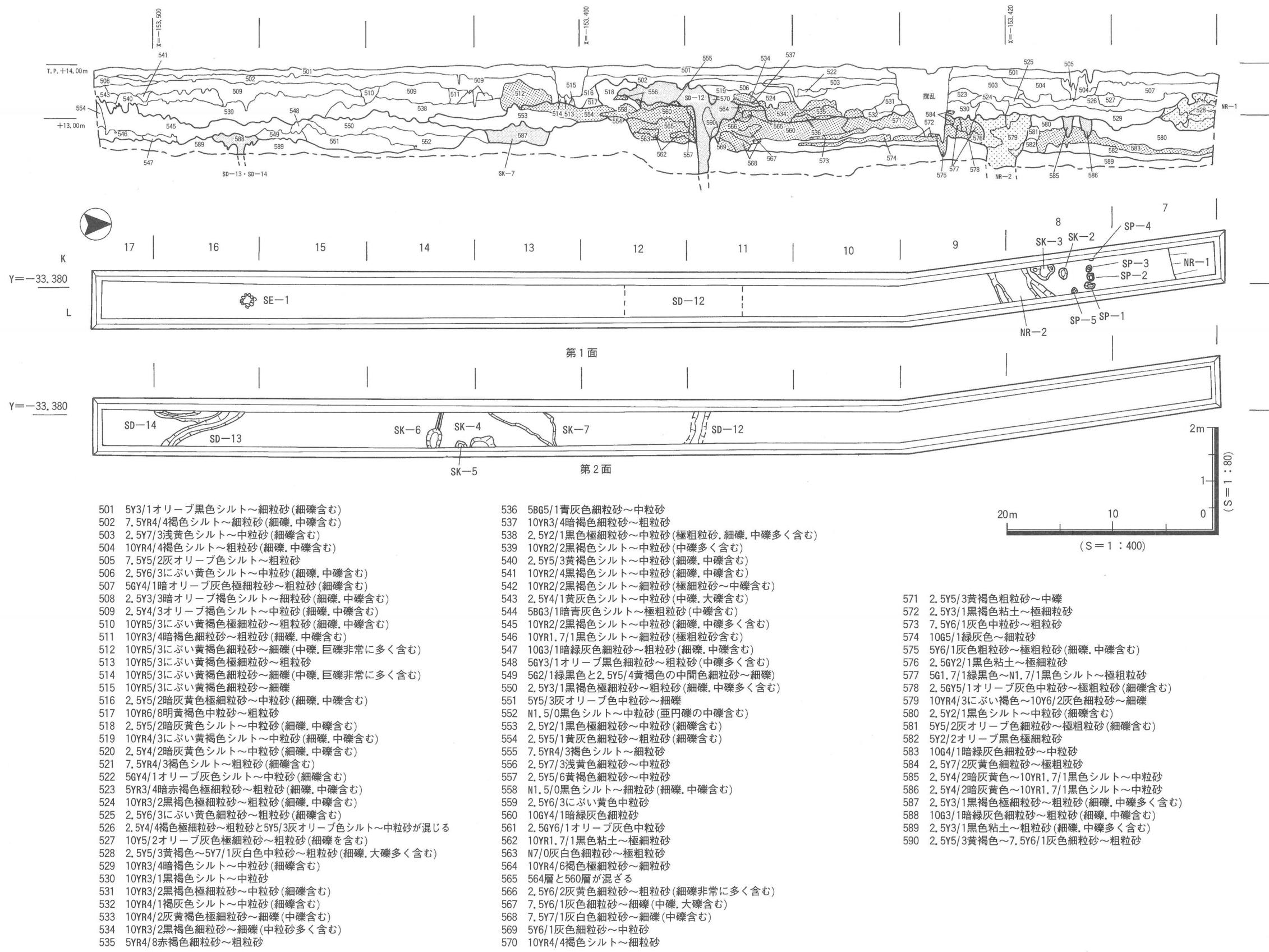


第23図 第4トレンチ 第407層(127~132)、第439層(133~141)、第460層(142~144)出土遺物実測図

れており、精美な文様構成を形成している。甕は3点(138~140)図化した。(138)は体部の上位に最大径を持ち、「く」の字に屈曲する口縁部が他例に比してやや短い庄内式甕である。体部外面は上位に水平方向のタタキの後ハケメ調整、体部内面は左上がりヘラケズリが施されている。形態や調整方法から、庄内式甕のなかでも古相に比定されるものである。生駒西麓産。(139)は体部上半に細筋タタキ(6本/cm)を施すもので、庄内式甕のなかでも新相に比定される。(140)は口縁端部が内外に肥厚する布留式甕で、口縁端部の形状や胴部の長胴傾向からみて布留式期新相に比定されよう。高杯(141)は杯部口縁部の1/6程度が残存している。杯部内面には、放射状にヘラミガキが施文されている。時期的には布留式期古相に比定されよう。

・第460層出土遺物

第460層は調査区西部の13C~E地区付近に分布している。にぶい黄橙色の色調で中粒砂~細礫が優勢な洪水に起因した土層である。遺物は弥生土器・土師器の小片が少量出土している。図化した遺物は3点(142~144)である。(142)は弥生土器の小型鉢である。口径10.0cm、器高5.6cm、底径3.6cmを測る。弥生時代後期に比定される。(143・144)は土師器甕である。2点ともに小片であるが、丸味のある屈曲部や口縁端部の形状、体部外面のハケ調整等の特徴から庄内式期新相~布留式期古相に盛行する布留式傾向甕と推定される。



第24図 第5トレンチ平断面図

5) 第5トレンチ

・第5トレンチ検出遺構

調査対象地区内の東部に設定した。南北方向のトレンチで東西幅5m、南北幅105mを測る。2面（第1面・第2面）にわたる調査を実施した。第1面は現地表下0.9m前後（T.P. +13.0m）に存在する、第580層黒色シルト～中粒砂層・第571層黄褐色粗粒砂～中礫層・第560層暗緑灰色細粒砂層上面を調査対象とした。その結果、古墳時代中期末～後期初頭に比定される土坑2基（SK-2・SK-3）、小穴5個（SP-1～SP-5）、自然河川2条（NR-1・NR-2）が調査区の北部で集中して検出されているほか、調査区の南部では第545層黒褐色シルト～中粒砂層上面で室町時代の石組み井戸1基（SE-1）を検出した。第2面は現地表下1.6m前後（T.P. +12.3m）に存在する第589層黒色粘土～粗粒砂上層を対象した。その結果、弥生時代前期に比定される土坑1基（SK-4）、弥生時代中期前半に比定される土坑1基（SK-5）、古墳時代前期の土坑1基（SK-7）・溝4条（SD-12～SD-14）、自然河川1条（NR-2）、時期不明の土坑1基（SK-6）を検出した。

1. 第1面

土坑（SK）

SK-2

8K地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅0.95m、南北幅0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は断面形状に沿って2層が堆積している。遺物は出土していない。

SK-3

SK-2の南で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。北部と南部にテラスが設けられている。検出部分で東西幅1.3m、南北幅2.0m、深さ0.4mを測る。埋土は東部から断面形状に沿って第2・3層が堆積した後、第1層である暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂が堆積している。遺物は弥生土器および須恵器甕等の小片等が4点出土した程度である。

小穴（SP）

SP-1

8K地区で検出した。南北方向に長い不整の楕円形を呈するもので、南北幅0.9m、東西幅0.55m、深さ0.44mを測る。底部南端に円形の小さな窪みがある。埋土は2層から成る。遺物は土師器および須恵器の小片が2点出土したのみである。

SP-2

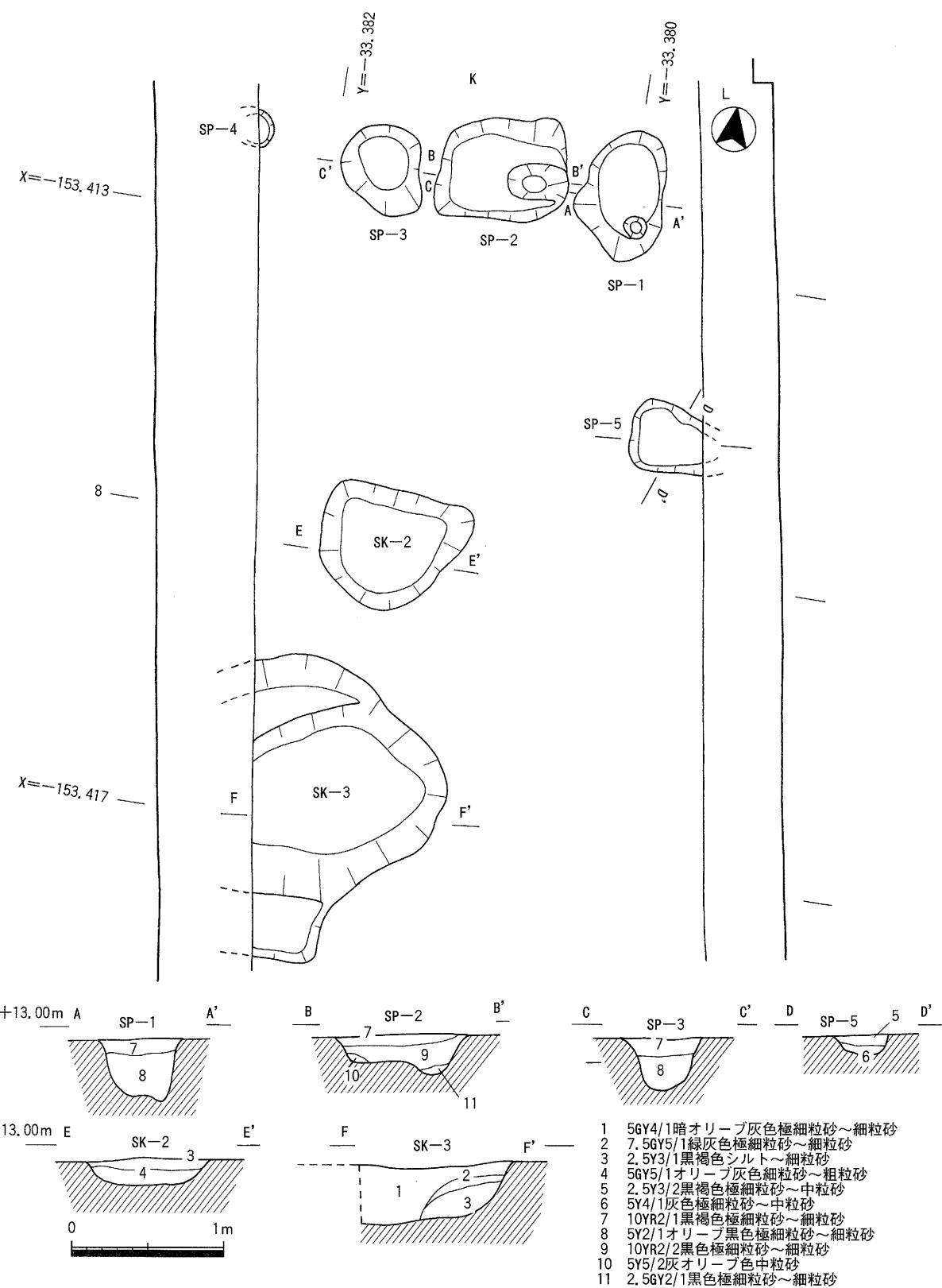
SP-1の西に隣接する。不整方形を呈し、東西幅0.85m、南北幅0.66m、深さ0.28mを測るもので、底部東端に東西幅0.4m、南北幅0.25mを測る楕円形の窪みが存在している。埋土は4層から成る。遺物は古墳時代中期末～後期初頭の土師器・須恵器の小片が出土している。

SP-3

SP-2の西に隣接している。不整円形を呈するもので、東西径0.52m、南北径0.6m、深さ0.34mを測る。埋土は2層から成る。遺物は土師器の小片が3点出土した程度である。

SP-4

SP-3の西に隣接している。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分からみて径0.25m程度の円形と推定され、深さは0.55mを測る。埋土は暗オリーブ灰色極細粒砂の单一



第25図 第5トレーンチ 第1面 8 K・L 地区検出遺構平面図

層である。遺物は出土していない。

SP-5

SP-1の南に隣接している。東部は調査区外に至る。検出部分で東西幅0.47m、南北幅0.47m、深さ0.14mを測る。埋土は2層から成る。遺物は出土していない。

井戸 (S E)

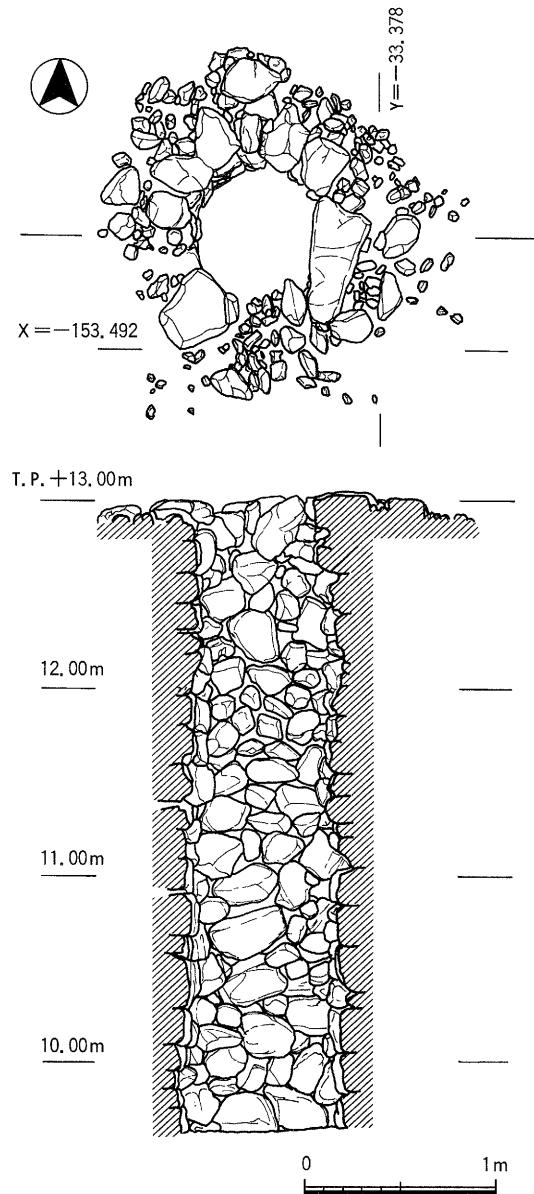
S E - 1

16 L 地区で検出した。上面の形状が円形を呈する石組みの井戸で、上面径0.65m、底部径0.86mを測る。断面の形状は底部から上部に向かってやや先細りになるものの、ほぼ円筒形を示すもので、深さについては検出部分で3.35mを測るが、井戸側内部に落ち込んだ大型の石材の存在からみて本来の構築面はさらに上層にあった可能性が高い。井戸の現状保存が決定されていたため、断ち割りは実施していないが、上面の井戸側を構成する石材の周辺で確認された5 cm大～拳大の裏込め石の広がりからみて上で1.9m前後の掘形が推定される。井戸側を構成する石材は0.1～0.6m大の未加工の花崗岩で、石積み法は野面積みを基本としている。埋土については、検出面から0.45m付近迄は褐色系の極細粒砂～細礫を含んでおり、さらに1 m迄は、井戸側に使用された石材が数個落ち込んでいた。以下、底部に至る部分については、細粒砂から中粒砂が優勢な土層が堆積していた。遺物は室町時代中期(15世紀後半)に比定される土師器小皿・土釜、屋瓦、金属器、砥石等が少量出土している。図化し得た遺物は4点(145～148)である。(145)は鉄製釜を模倣した土師器土釜である。口縁部が内彎し外面に沈線を3条めぐらすもので、菅原正明氏分類の河内型J型b'にあたる。通有のものは瓦質焼成であるが本例は土師質の焼成である。(146)は土師器小皿の口縁部の小片である。底部は欠損しているが、おそらく、あげ底ないしはへそ皿状を呈するものと推定される。(147)は包丁で木製の柄と刃部の一部が残存している。(148)は偏平な石材を使用した砥石で表裏2面に使用面が認められる。縦8.1cm、横4.1cm、厚さ0.9cmを測る。石材は泥岩ホルンフェルスである。

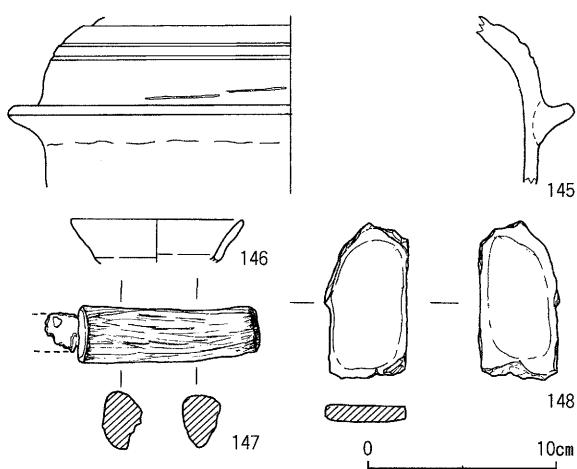
自然河川 (N R)

N R - 1

調査区北部の7 K・L地区で検出した第128層の広がりが、第2トレンチで検出したN R - 1に対応するものと推定される。第1トレンチで検出



第26図 第5トレンチ S E - 1 平断面図



第27図 第5トレンチ S E - 1 出土遺物実測図

したNR-1と同様、中粒砂～中礫が優勢な層相で、層中から弥生土器・土師器・須恵器等の土器類が出土している。

NR-2

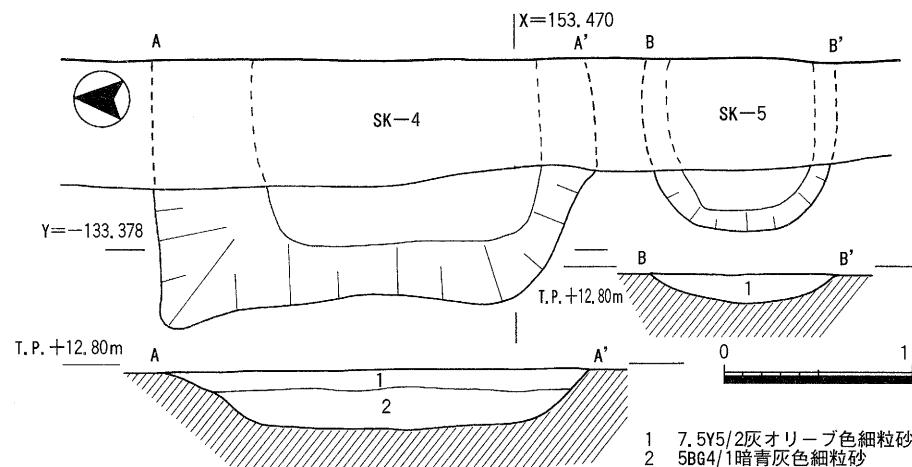
第3トレンチで検出したNR-2の東部の続きが、第5トレンチの8・9KL区で検出されている。現地表下約0.9m(T.P.+12.9m)付近より下部で検出されており、上面幅5m、深さ1m以上を測る。埋土は中粒砂～中礫を主体とする流出堆積土で充填されている。遺物は弥生土器から6世紀前半の遺物が出土している。

2. 第2面

土坑(SK)

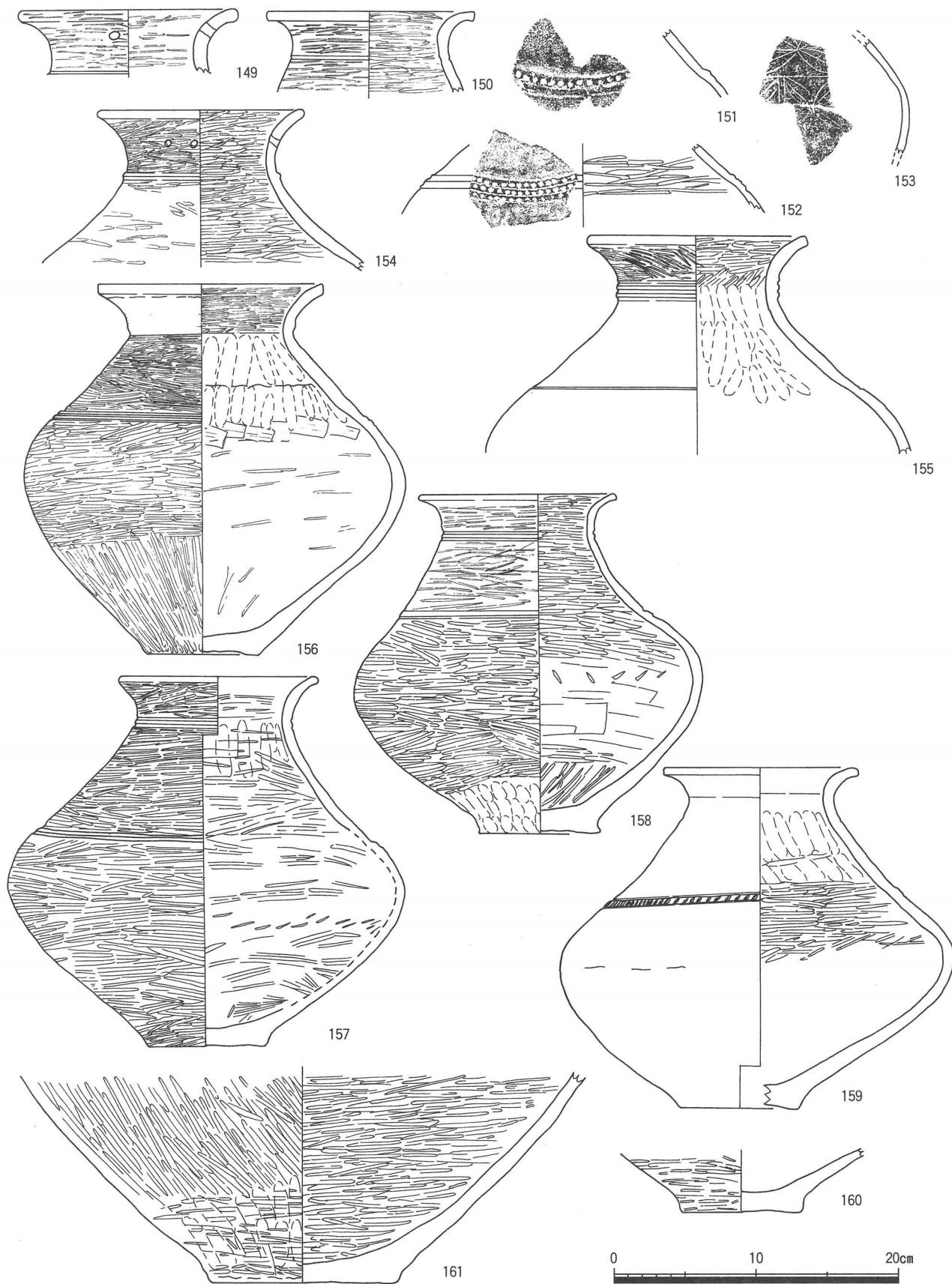
SK-4

13L地区で検出した。東部の大半が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分では南北幅2.3mを測るもので、東西方向については0.6m程度が検出されたに過ぎないが、東壁で検出した部分を含めれば、少なくとも東西幅が1.3m以上の規模が想定される。埋土は上層が灰オリーブ色細粒砂、下層が暗青灰色細粒砂の2層が水平堆積しており、そのうち遺物は主に上層から出土している。遺物は検出部分および調査区外の東壁部分で得られた土器類を含めてコンテナ箱2箱分が出土している。時期的には弥生時代前期中段階に比定されるもので、完形に復元でき得る土器類を含む比較的良好な資料と言えよう。図化したものは23点(149～171)である。その内訳は弥生土器一壺14点(149～162)、甕7点(163～169)、台付き鉢1点(170)、鉢1点(171)である。壺はすべて広口壺に分類されるもので、(161・162)の大型のものを除けば、口径14～16cm、器高24～26cm、底径8～9cm、体部最大径28cm前後を測る中型のものが大半を占めている。形態の特徴は、やや突出した平底に算盤玉状の体部が付くもので、短く伸びる頸部から外反して開きの小さい口縁部を形成している。頸部ないし体部の中位には、区画を意図した段・突帯(削出突帯・貼付突帯)・沈線文が施文されている。段および削出突帯については、ヘラ描き沈線文を1条施した後、ヘラミガキにより上部ないしは下部の粘土を薄く削り取ったものと考えられる。個々の施文法においては、頸部のみが確認された(149・150・154)の3点では、不明の(149)を除いて1本沈線文(150)、貼付突帯文(154)がある。体部の中位のみが確認された(151・152)の2点については、(151)が段上押捺文と2本沈線文、(152)が段上押捺文と2本沈線文である。頸部および体部の中位が確認された(155～159・162)の6点は(155)が段上2本沈線

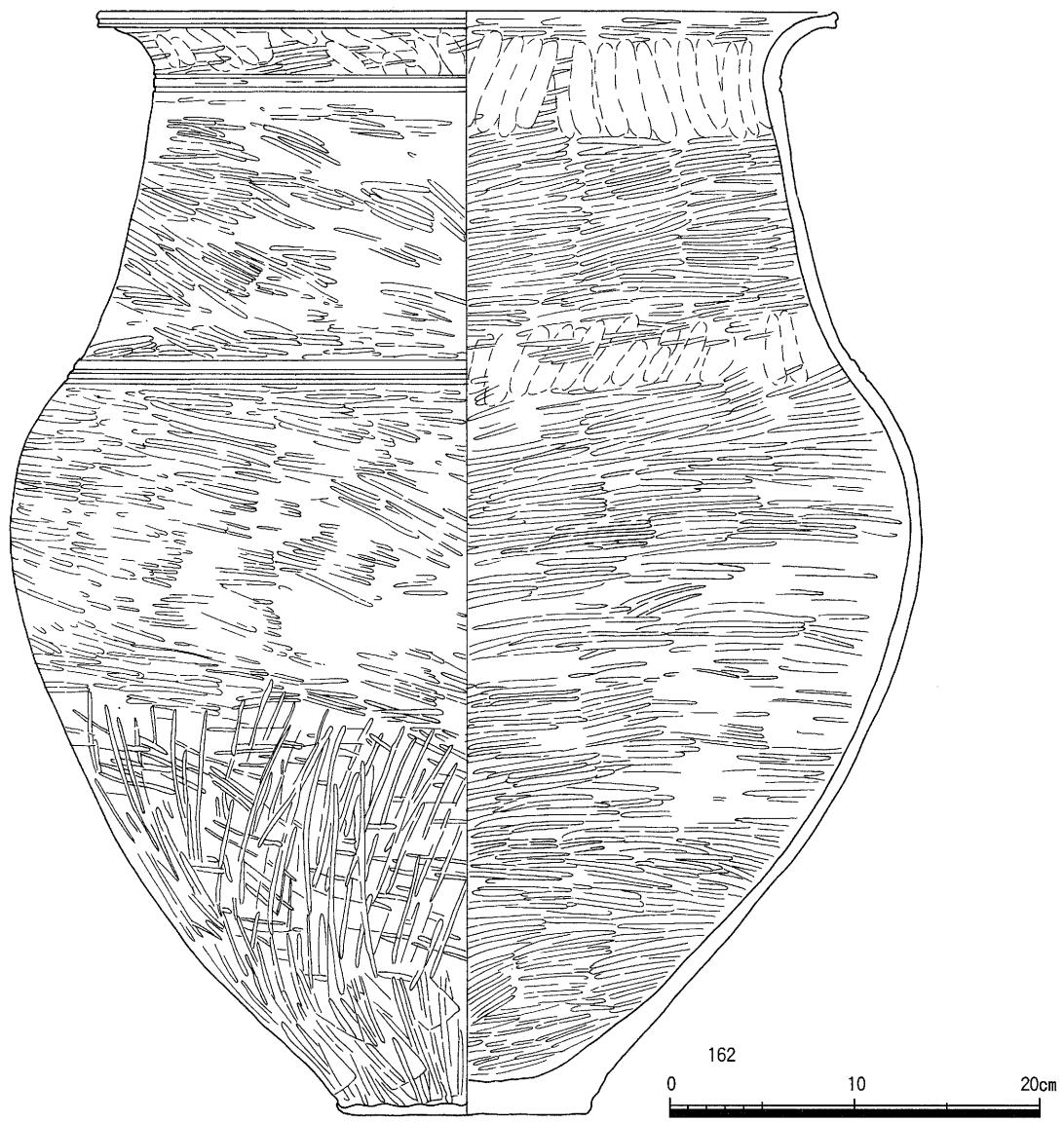


文+段、(156)が段+段上2本沈線文、(157・162)が2本沈線文+段上2本沈線文、(158)が2本沈線文+削出突帯文、(159)は段+削出突帯上刻目文が施文されている。区分文様を成す基本的な施文方法(段・削出突帯・沈線文)は限られているものの、個

第28図 第5トレンチSK-4・SK-5平面面図



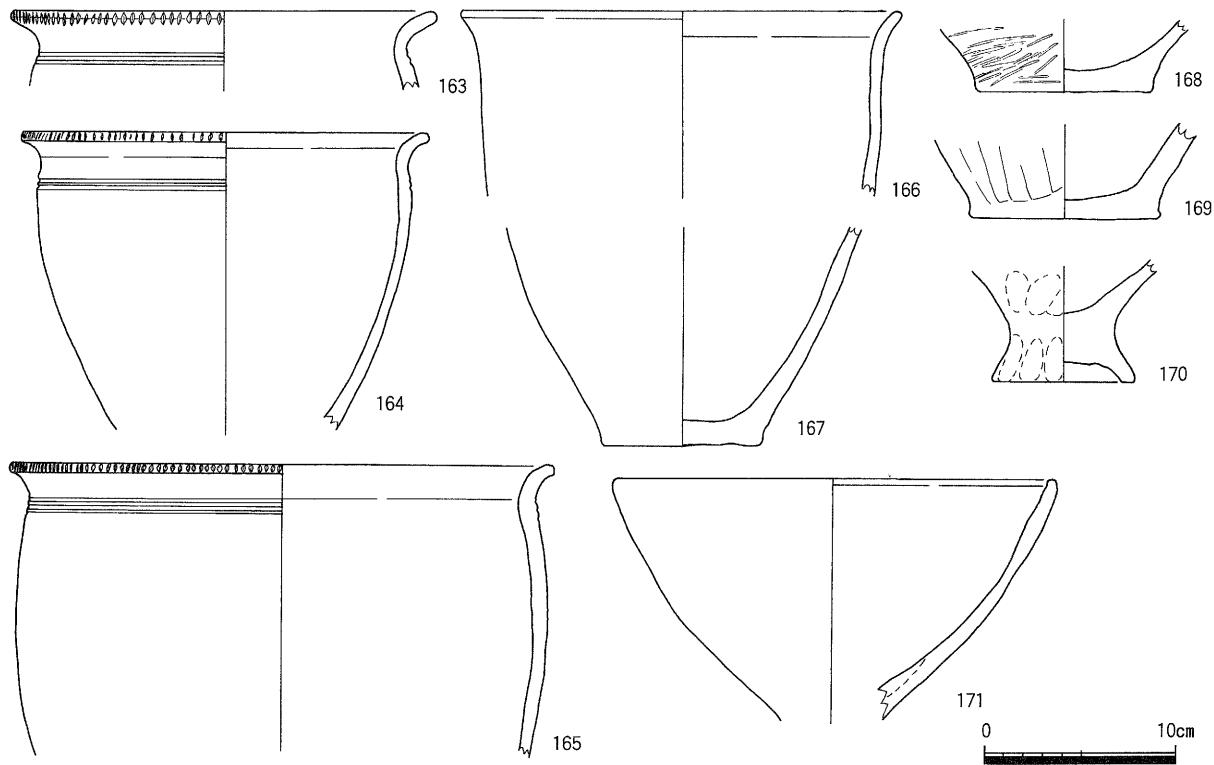
第29図 第5トレンチ SK-4出土遺物実測図1



第30図 第5トレンチ SK-4出土遺物実測図2

個においてはその組み合わせが多用化している。(153) はヘラ描きの木葉文が施文されている。器面調整は一部を除けば横位のヘラミガキを多用するものが大半を占めている。(149・154) は頸部上半に紐孔が認められる。色調は淡橙色系と褐灰色系のものに区別でき前者が非生駒西麓産、後者が生駒西麓産である。比率から見れば圧倒的に非生駒西麓産が多く、生駒西麓産は3点(155～157)のみであった。甕は倒鐘形の体部に短く外反する口縁部が付くもので、口縁端部に刻目文、体部上半に2～3条を1単位とするヘラ描き沈線文が施文されている(163～165)と無紋の(166)がある。(167～169)は底部である。全て非生駒西麓産である。(170)は台付き鉢である。台部底径7.3cm、台部高約3.0cmを測る。非生駒西麓産である。(171)は体部が内彎して伸びる鉢で、口縁端部は直口の形状を呈する。非生駒西麓産である。

畿内第I様式の細分については、佐原眞氏により広口壺の頸部と体部の区分文様の変遷から、今日のように古・中・新の3段階に定義づけられている。以後の研究は、佐原氏編年の3段階説を踏襲するなかで、編年案の検証と増大した資料を中心に再編する動きが活発化してきた。井藤暁子氏は前期を2期(前期I〔第I様式前半〕・前期II〔第I様式後半〕)に区別され、そのな



第31図 第5トレンチ SK-4出土遺物実測図3

かで前期 I を 3 段階 (I-a・I-b・I-c) に細分され、前期 I-a を古段階、前期 I-b 中段階前半と前期 I-c を中段階後半 (一部佐原氏の新段階を含む) に比定された。それによると、前期 I-a 段階は段を持つ段階のもので、削出突帯を持つ土器が存在しない。前期 I-b 段階は削出突帯幅が狭く上面にヘラ描き沈線文を加えないものと、削出突帯幅が広く上面に小条のヘラ描き沈線文を加えたものが存在するほか、(153) のような木葉文もこの段階を特徴づけるものとされている。前期 I-c 段階は前期 I-b 段階の突帯幅が広く上面に小条のヘラ描き沈線文を加えたものを主体とし、さらに多条化したヘラ描き沈線文が存在する段階が想定されている。そのほか、亀井遺跡の遺物に限定した廣瀬和雄氏の編年案では、前期を 4 期区分され、前期 1 (I 様式中段階前半)、前期 2 (I 様式中段階後半)、前期 3 (I 様式新段階前半)、前期 4 (I 様式新段階後半) とされている。寺沢薰・森井貞雄両氏による河内地域を中心とした編年案では、第 I 様式が 4 期 (I-1 ~ I-4) に細分されている。I-1 様式の他編年との比較では、佐原氏編年の古段階と中段階ならびに井藤編年の前期 I-a・前期 I-b を包括したもので、廣瀬氏編年では前期 1 に近いものとされた。ただ、佐原氏の古段階、井藤氏の前期 I-a 段階については概念的に先行したものであり、様式として確立しえないとする考えも示唆されている。I-2 については、佐原氏編年の中段階の後半、井藤氏編年の前期 I-c 段階、廣瀬氏編年の前期 2。I-3 については、佐原氏編年の新段階前半、井藤氏編年の前期 II-1 段階の古相、廣瀬氏編年の前期 2 から前期 3。I-4 については、佐原氏編年の新段階後半、井藤氏編年の前期 II-2 段階、廣瀬氏編年の前期 4 に近いとされている。以上の編年案からみて、本例は佐原氏編年の中段階、井藤氏編年の前期 I-b 段階、廣瀬氏編年の前期 1、寺沢・森井編年の河内 I-1 様式に対応するものと考えられる。

SK-5

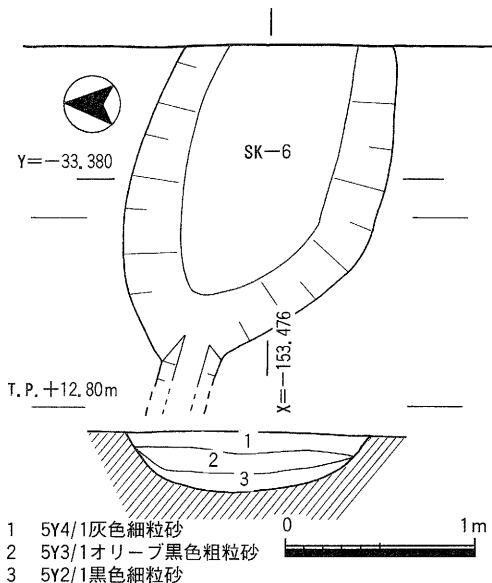
SK-4の南に隣接している。東部の大半が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で南北幅0.95m、東西幅0.3mを測るが東壁で検出した部分を含めて少なくとも東西幅が0.9m以上の規模が想定される。埋土は灰オリーブ色細粒砂の単一層である。遺物は弥生土器の小片が極小量出土しており、おそらくSK-4と同時期の弥生時代前期中段階に比定されるものと推定されるが小片のため形状を明らかにし得たものはない。

SK-6

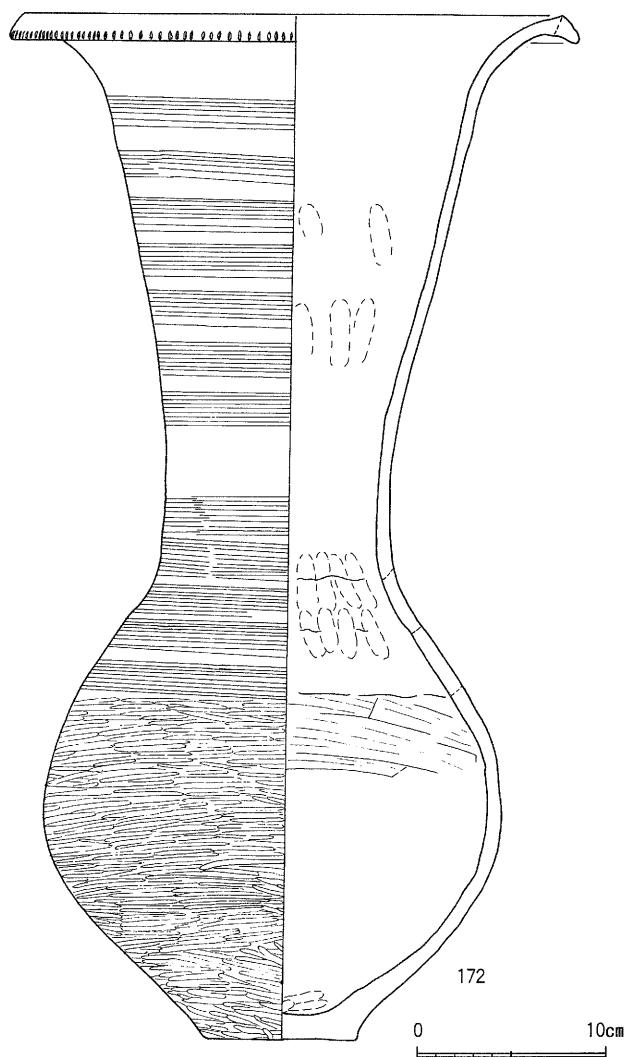
SK-5の南に近接している。東部が調査区外に至り全容は不明であるが、検出部分で楕円形を呈するもので、西部端から西に伸びる小溝が付く。検出部分で東西幅1.65m、南北幅1.3m、深さ0.31mを測る。埋土は浅い椀形を呈する断面形状に沿って3層が堆積している。遺物は出土していない。

SK-7

13K・L地区で検出した。東西端が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で北東-南西方向に溝状に伸びるもので、検出長約5.0m、幅2.15m、深さ0.15m前後を測る。断面形状は浅い皿状で底面はほぼ水平である。埋土は黒褐色極細粒砂～細粒砂である。遺物は弥生土器、土師器等の土器類の小片が少量出土している。弥生時代中期の広口長頸壺(172)が出土しているが、遺構の帰属時期としては古墳時代前期(布留式期)が想定される。(172)は弥生時代中期(畿内第Ⅲ様式)に比定される長頸の広口壺である。図上で完形近くに復元したもので、口径28.3cm、器高56.8cm、底径7.9cmを測る。口縁端面下間に刻目がある他、頸部付近の風化のため一部不明瞭な点があるが、頸部から体部上半にかけて多条の櫛描き直線文が施文されている。体部上半以下は横方向のヘラミガキ調整が行われている。生駒西麓産である。



第32図 第5トレンチ SK-6 平断面図



第33図 第5トレンチ SK-7 出土遺物実測図

溝 (SD)

SD-12

11・12KL地区で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長3.15m、幅1.25~1.8m、深さ0.37mを測ったが、検出部分は最も深くなった部分であり、本来の構築面は上層で、溝幅についても最大で11m程度が想定される。埋土は中粒砂~中礫を主体とする土層で充填されている。遺物は弥生時代中期・古墳時代初頭(庄内式期)~前期(布留式期)に比定される土器類が少量出土している。土器類を4点図化したが、いずれも小片である。内訳は土師器-甕3点(173~175)、高杯1点(176)である。(173・174)は口縁部端部が肥厚する布留式甕である。布留式期古相に比定される。(175)は屈曲部が丸く口縁端面に沈線が廻るもので、庄内式期新相から布留式期古相に盛行する布留式傾向甕と考えられる。(176)は高杯の杯部で、残存率は1/12の小片である。やや深めの杯部から口縁部が斜上方に直線的に伸びる。布留式期古相に比定される。(175)が褐灰色の色調を呈する生駒西麓産、他が淡橙色で非生駒西麓産である。

SD-13

16K・L地区で検出した。北西-南東方向に伸びるもので、西部でSD-14の一部を切っている。検出長7m、幅0.8~1.1m、深さ0.15m前後を測る。埋土は暗緑灰色細粒砂~粗粒砂である。遺物は出土していない。

SD-14

SD-13の西部で検出した。北部で東肩の一部がSD-13に切られている。検出長6m、幅0.3~0.9m、深さ0.1m前後である。埋土は暗緑灰色細粒砂~粗粒砂である。遺物は出土していない。

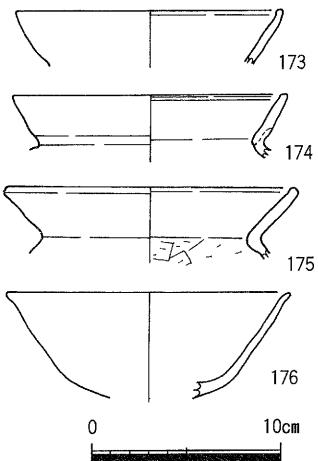
・第5トレンチ遺物包含層出土遺物

・第504層出土遺物

第504層は調査区北部の8K地区で検出された。褐色の色調でシルトから細礫~中礫を含む粗粒砂である。5世紀末~6世紀初頭を中心とした遺物が少量出土している。3点(177~179)を図化した。(177)は扁球形の体部に直口の口縁部が付く土師器直口壺で、口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径8.8cm、器高17.0cm、体部最大径18.6cm、頸部高4.4cmを測る。(178)は須恵器杯蓋。(179)は須恵器杯身である。(178)がTK23型式、(179)がMT15型式に比定される。

・第528層出土遺物

第528層は第5トレンチ北端の7K地区で検出された。黄褐色~灰白色の色調で細礫~大礫を含む中粒砂から粗粒砂が中心とする層相であることや、位置関係からみておそらくNR-1の西肩に対応するものと推定される。遺物は弥生土器・土師器・須恵器類を中心とした土器類がコンテナ1箱程度出土している。時期的には、5~6世紀代の遺物が大半を占めている。5点(180~184)を図化した。全て須恵器である。(180)は下方に肥厚する口縁部端面下部に1条の凹線



第34図 第5トレンチSD-12出土遺物実測図

が廻る甕である。(181) は杯蓋、(182) は杯身でともにTK43型式前後に比定される。(183) 有蓋高杯蓋でTK209型式に比定されよう。(184) は器台脚部の小片である。凸線により区画された間に波状文が施文されている。

・第545層出土遺物

第545層は第5トレンチ南端の15K～17K地区で検出された。上面が第1面である。黒褐色の色調で細礫～中礫を多く含むシルト～中粒砂の層相である。弥生土器・土師器・須恵器類・瓦器・中国産白磁碗等の土器類が少量出土している。図化し得たものは弥生土器2点(185・186)である。共に広口壺である。(185) が口縁端面に波状文、頸部に直線文が施文されている。(186) が口縁端部に簾状文、頸部には上部から直線文2条、簾状文1条、刺突文1条の順で施文されている。寺沢・森井氏編年による河内IV-1様式に比定されよう。

・第550層出土遺物

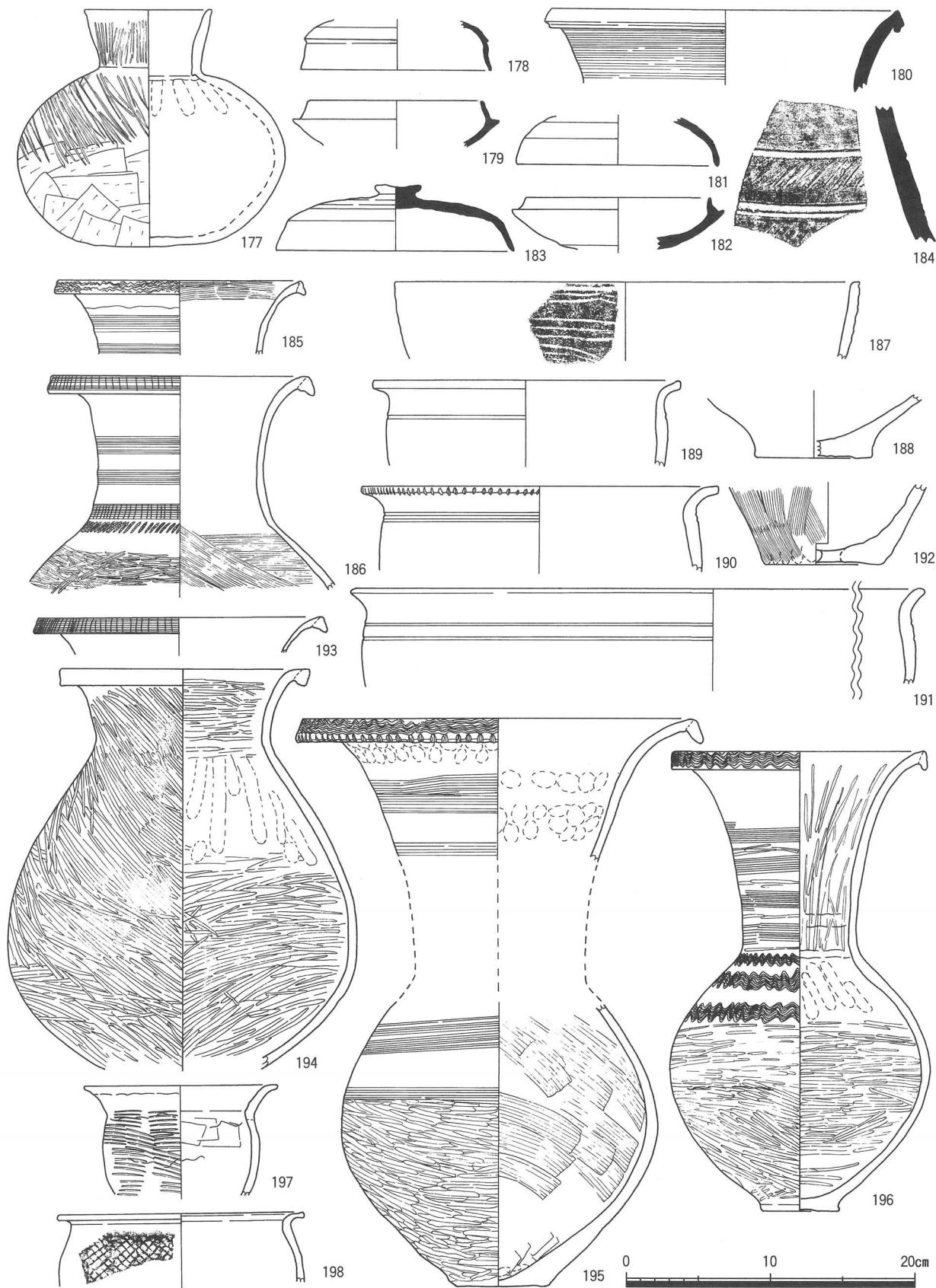
第550層は第5トレンチ南部の14K～15K地区で検出された。第545層と同様上面が第1面である。黒褐色の色調で細礫・中礫を多く含む極細粒砂～粗粒砂である。縄文土器・弥生土器・須恵器等の土器類が少量出土している。6点(187～192)を図化した。(187) は縄文土器、そのほかは弥生時代前期(畿内第I様式)に比定される弥生土器である。(187) は口縁部外面に多条の沈線文が施文されている縄文土器で、器種は浅鉢と推定される。色調は褐灰色で、角閃石を多く含む生駒西麓産の胎土が使用されている。縄文時代晩期前半のものと推定される。(188) は壺の底部で、底部中央部が周辺より僅かに高い形状を呈している。復元底径7.3cmを測る。非生駒西麓産である。(189～191) はいわゆる如意形口縁を呈する甕で(189・190) が口径21.0～24.8cmを測る中型品、(191) が口径49.2cmを測る大型品である。体部上半のヘラ描き沈線文は(189) が1条、(190・191) が2条で、(190) には口縁端部に刻目が施文されている。3点ともに非生駒西麓産である。(192) は底部有孔土器である。

・第551層出土遺物

第551層は第5トレンチ南部の14K～15K地区で検出された。灰オリーブ色中粒砂～細礫で第2面の上部に堆積する土層である。弥生時代中期後半(畿内第IV様式)を中心とする弥生土器が少量出土している。広口壺2点(193・194)を図化した。(193) は下方に拡張された口縁端面に簾状文が施文されている。(194) は下膨れの体部に太目の口頸部が付く無文の広口壺である。ともに生駒西麓産である。

・第553層出土遺物

第553層は第5トレンチ南部の13・14L地区で検出された。黒色の色調で細礫を含む極細粒砂～中粒砂の層相である。上面が第1面である。弥生土器・土師器・須恵器類が極少量出土している。図化した遺物は弥生時代中期(畿内第III様式)に比定される長頸の広口壺2点(195・196)である。(196) が(195) に比してやや小型で口径17.6cm、器高32.9cm、底径5.4cmを測る。2点ともに球形の体部から頸部が長くラッパ状に伸びるもので、口縁端面が下方に垂下し幅広の端面を持つ。(195) が口縁端面に波状文と刻目文、頸部から体部上半にかけて櫛描き直線文が施文されている。(196) が口縁端面に波状文、頸部に櫛描き直線文4条と体部上半に波状文が施文されている。2点ともに生駒西麓産である。



第35図 第5トレンチ 第504層(177~179)、第528層(180~184)、第545層(185・186)、第550層(187~192)、
第551層(193・194)、第553層(195・196)、第561層(197・198)出土遺物実測図

・第561層出土遺物

第561層は第5トレーナー中央部の12K地区で検出された。オリーブ灰色中粒砂でSD-12の氾濫に関連した洪水砂層である。弥生土器・土師器類が出土している。弥生時代後期の甕(197)と韓式系土器(198)を図化した。(197)は弥生時代後期(畿内第V様式)に比定される小型の甕である。生駒西麓産である。(198)は韓式系土器の平底鉢と推定される。全体に器壁が薄く丁寧な造りで、体部外面に格子状タタキが施されている。褐灰色の色調で、胎土に細粒の角閃石が多く含まれている。5世紀中葉～後葉のものと推定される。

参考文献

・弥生土器

佐原 真 1968 「近畿地方」『弥生式土器集成』本編2 東京堂出版

井藤暁子 1983 「近畿」『弥生土器』ニューサイエンス社

広瀬和雄 1986 「弥生土器の編年と二・三の問題」『亀井(その2)』(財)大阪文化財センター

寺沢 薫・森井貞雄 1986 「1河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編I』木耳社

・古式土師器

原田昌則 1993 「II久宝寺遺跡(第1次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告37』(財)八尾市文化財調査研究会

・須恵器

田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ

・中世遺物

菅原正明 1983 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集

第4節 出土遺物観察表*

・凡例 粒径—L 1mm以上 M 0.5~1mm未満 S 0.5mm未満 量—○多量 ○—多い △—少ない ▲—希少 ※赤—赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口徑 器高 底径 ()復元値	調整・手法	色調	胎土						焼成保存	残存率	地区備考			
						外面 内面	外面 内面	素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他			
1		弥生土器 長頸壺	— — 頸部径11.6	外面: 頸部および体部ヨコナデ。 内面: 頸部および体部ヨコナデ。	褐色	やや粗	◎S-L S-M	▲S-L S-M	○S-L S-M	○S-L S-M	○S-L S-M	○S-L S-M			良好	頸部 1/4	第1TR北区 2A区 SD-1
2		弥生土器 小型壺	— — 4.0	外面: 体底部ナデ。 内面: 体底部ナデ。	褐色	良好	◎S-L S-L	○S-L S-L	△S-M S-M	○S-L S-M	○S-L S-M	○S-L S-M			“	底部 完存	“
3		弥生土器 甕	(16.4) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	赤褐色	良好	○S-L S-L	△S-M S-M	○S-M S-M	○S-L S-L	○S-L S-M	○S-L S-M			“	口縁部 1/6	“
4		弥生土器 甕	(17.8) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。	にぶい橙色 橙褐色～にぶい黄褐色	やや粗	△S-M S-M	△S-L S-L	○S-L S-L	○S-L S-L	○S-L S-L	○S-L S-L	赤△S-L S-L	“ 全体に磨滅	口縁部 1/4	第1TR北区 5・6A区 SD-5	
5		弥生土器 庄内式甕	(17.6) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	灰褐色	良	◎S-L S-L	○S-L S-L	▲S S	○S-L S-L	○S-L S-L	○S-L S-L			“	口縁部 1/8	“
6		土師器 布留式横向甕	(17.7) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	黒褐色 灰黄褐色	良好	△S-L S-L	△S-L S-L	○S-L S-L	△S S				“	口縁部 1/10	“	
7		弥生土器 壺	— — 5.4	外面: 体底部ナデ。底部指頭圧痕遺存。 内面: 体底部ヘラミガキ。	褐色	良好	◎S-L S-L	○S-L S-L	○S-M S-M	○S-M S-M	○S-M S-M	○S-M S-M			“	底部 完存	“
8		弥生土器 壺	— — 5.1	外面: 体底部ナデ。底部指頭圧痕遺存。 内面: 体底部ナデ。	褐色	やや粗	◎S-L S-L	△S-L S-L	△S S	○S-M S-M	○S-M S-M	○S-M S-M			“	底部 完存	“
9		弥生土器 壺	— — 5.1	外面: 体底部ナデ。 内面: 体底部横方向のハケメ。	褐色	やや粗	○S-L S-L	○S-L S-L	△S-M S-M	△S-M S-M	○S-M S-M	○S-M S-M		“ 外面磨滅	底部 完存	“	
10		弥生土器 台付き甕	— — —	外面: 体部タタキ。台部ナデ。 内面: 体部横方向のハケメ。台部指頭圧成形後ナデ。	灰褐色	やや粗	○S-L S-L	○S-L S-L	△S S	○S-L S-L	○S-L S-L	○S-L S-L		“ 外面磨滅	体部～ 台部一部 残存	“	
11		弥生土器 有孔鉢	— — 4.8	外面: 体底部ナデ。指頭圧痕。 内面: 体底部ナデ。	赤褐色	良好	○S-L S-L	△S-L S-L	△S S	○S S	○S S	○S S		“ 内面磨滅	底部 完存	円孔7個	
12		弥生土器 高杯	(31.2) — —	外面: 口縁部および杯部調整不明瞭。 内面: 口縁部および杯部調整不明瞭。	赤褐色～ 黒褐色 “	やや粗	◎S-L S-L	○S S	▲S S					“ 全体に磨滅	口縁部 1/12	“	
13		弥生土器 高杯	— — 裾部径10.1	外面: 脚部ヘラミガキ。 内面: 柱状部シボリ目。据部ナデ。	灰褐色	やや粗	○S-L S-L	△S-M S-M	△S S	△S S	△S S	△S S			“	脚部 1/2	透孔3個
14		弥生土器 複合口縁壺	(16.5) — —	外面: 口縁部刺突文。口縁部下半櫛描直線文。口頸部ナデ。 内面: 口頸部ナデ。	褐色	やや粗	○S-L S-L	○S-L S-L	△S S	△S S	△S S	△S S			“	口縁部 1/6	第1TR北区 6A区 SD-6
15		弥生土器 甕	(18.5) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。	淡黄色	やや粗	○S-M S-M	○S-M S-M		△S S				“	口縁部 1/6	“	
16		土師器 布留式甕	(15.7) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡褐色	精良	▲S-M S-M		▲S S		▲S S			“ 全体に磨滅	口縁部 1/8	“	
17		弥生土器 有孔鉢	— — 4.1	外面: 体底部ナデ。指頭圧痕。 内面: 体底部ナデ。	褐色	良好	○S-L S-L	○S-L S-L	○S-M S-M	○S-M S-M	○S-M S-M	○S-M S-M			“	口縁部 1/8	円孔1個

*遺物観察においては裸眼観察およびナショナルライトスコープFF-393(×30)を使用。

・凡例 粒径—L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量—○多量 ○—多い △—少ない ▲—希少 ※赤—赤色酸化土

遺物番号	団版番号	器種	法量(cm) 口徑 器底 ()復元値	調整・手法		色調						胎土				焼成保存	残存率	地区備考
				外面	内面	外面	素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他					
18		弥生土器 高杯	(16.0) — —	外面：口縁部および杯部ナデ。 内面：口縁部および杯部ナデ。	褐灰色 〃	やや粗 ○S-L	○S-L	○S-M	▲S						良好	口縁部 1/8	第1TR北区 6A区 SD-6	
19		土師器 小型器台	杯部径9.1 杯部高2.5 —	外面：杯部ヨコナデ。杯部下半指頭圧痕遺存。 内面：杯部ナデ。	褐灰色 〃	良好 ○S-L	△S	△S	○S-M	△S-L				〃 全体に磨滅	杯部 1/2	〃		
20		土師器 布留式 甕	(14.3) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半縱方向、以下横方向のハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡灰褐色 〃	精良 ○S-M	△S-M	△S	○S					〃	口縁部 1/4	第1TR北区 6A区第112層 煤付着		
21		土師器 庄内式 甕	(15.7) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部縱方向ハケメ後ヨコナデ。 内面：口縁部斜方向のハケメ。体部ヘラケズリ。	淡灰褐色 〃	良好 ○S-L	○S-L	△S	△S	▲M-L				〃	口縁部 1/4	〃		
22		弥生土器 高杯	(23.5) — —	外面：口縁端面波状文。体部上半に刻目。以下ナデ。 内面：口縁部上半波状文。以下ナデ。	にぶい褐色 〃	良好 ○S-L	○S-L	△S	○S					〃	口縁部 1/6	〃		
23		弥生土器 高杯	(17.6) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	にぶい黄褐色 〃	良好 ○S-L	○S-L	○S	○S-M					〃	口縁部 1/12	第1TR北区 6・7A区 第113層		
24		弥生土器 鉢	(14.8) 7.3 5.2	外面：杯部ナデ。底部ナデ。指頭圧痕。 内面：杯部ナデ。	淡黄色 〃	良好 ○M-L	○M-L	△S-M	△S					〃	1/4	〃		
25		土師器 布留式 甕	(14.8) — —	外面：口縁部ヨコナデ。杯部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	乳黃橙色 〃	精良 △S-M	△S-L	△S	▲S					〃	口縁部 1/12	〃		
26		土師器 布留式 甕	(15.4) — —	外面：口縁部および体部上半ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部上半ナデ。	灰白色 〃	精良 △S	△S-L	△S	▲S					〃	口縁部 1/3	〃		
27		土師器 小型丸底 壺	(10.1) — —	外面：口縁部および体部ヘラミガキ。 内面：口縁部および体部ヨコナデ。	淡橙褐色 〃	良好 △S-L	○S-L							〃 外面風化	口縁部 1/6	〃		
28	一四	土師器 広口壺	13.1 — —	外面：口縁部端面波状文。頸部ヘラミガキ。体部上半刻み目文と波状文。 内面：口縁部波状文。頸部ヘラミガキ。体部ナデ。	にぶい黄橙色 ～淡橙色 淡褐色	良好 ○S-L	○S-L	○S	○S					〃	口頸部 完存	第1TR北区 第119層		
29		弥生土器 広口壺	(23.1) — —	外面：口縁部および頸部簾状文。 内面：口縁部ヨコナデ。頸部ヘラミガキ。	褐灰色 〃	良好 ○M-L	○S-L	△S	○S-L	▲M-L	赤▲M-L			〃	口頸部 1/6	第1TR北区 第135層		
30		弥生土器 壺	— — (7.2)	外面：体部ヘラミガキ。底部ナデ。 内面：体底部ヘラミガキ。	淡褐灰色 〃	良好 ○S-L	△S-L	▲S	○S					〃	底部 完存	〃		
31		弥生土器 甕	(25.4) — —	外面：口縁部ヨコナデ。端面凹線。頸部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色 〃	良好 △S-L	△S-L	○S-L	○S-M					〃	口縁部 1/6	〃		
32		弥生土器 鉢	(19.8) — —	外面：口縁端部および体部簾状文。 内面：口縁部ヨコナデ。体部横方向のミガキ。	灰褐色 〃	良好 ○S-L	△S-L	△S	○S					〃	口縁部 1/12	〃		
33		弥生土器 甕	(15.0) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半ハケメ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	褐灰色 〃	やや粗 ○S-L	○S-L	▲S	○S	△M-L				〃	口縁部 1/4	〃		
34		弥生土器 甕	(15.3) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	にぶい黄橙色 〃	良好 ○S-L	○S-L	▲S	▲S					〃	口縁部 1/4	〃		

・凡例 粒径—L 1mm以上 M 0.5~1mm未満 S 0.5mm未満 量—○多量 ○—多い △—少ない ▲—希少 ※赤一赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口徑 器底 ()復元値	調整・手法		色調	胎土						焼成保存	残存率	地区備考	
				外面	内面		外面	素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャコット	その他		
35		弥生土器 甕	— — 4.1	外面：体部タタキ。底部ナデ。 内面：体部ナデ。	茶褐色 〃	良好	○ S L	△ S L	△ S L	○ S L				良好	底部完存	第1TR北区 第135層
36		弥生土器 甕	— — 3.9	外面：体部タタキ。底部ナデ。 内面：体部ヘラナデ。	赤褐色 褐灰色	良好	○ S L	△ S	△ S	○ S L				〃	底部完存	〃
37		弥生土器 有孔鉢	— — —	外面：体底部ナデ。 内面：体底部ナデ。	黒灰色～ 灰黄色 黄褐色	やや粗	○ S L	▲ S L	△ S	○ S				〃	底部完存	〃 円孔1個
38		弥生土器 鉢	— — 4.4	外面：体底部タタキ。底部側面指頭圧痕。 内面：体底部ナデ。	淡褐色 〃	精良	△ S			△ S				〃	底部ほぼ完存	〃
39		弥生土器 鉢	(18.2) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。	褐灰色 〃	やや粗	○ S L	○ S L	△ S L	○ S M				〃	口縁部 1/6	〃
40		弥生土器 高杯	(12.3) — —	外面：杯部ヘラミガキ。 内面：杯部ヘラミガキ。	褐灰色 〃	良	○ S L	△ S L	▲ S	○ S				〃	口縁部 1/6	〃
41		弥生土器 高杯	— — —	外面：柱状部ヘラミガキ。 内面：柱状部シボリ目。裾部ナデ。	にぶい黄褐色 〃	良好	○ S L	△ S L	△ S	○ S				〃	脚部 1/2	〃 透孔4個
42		弥生土器 高杯	— — 裾部径9.9	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：柱状部シボリ目。裾部ナデ。	にぶい黄褐色 〃	良好	△ S M	△ S	○ S	○ S				〃	脚部 1/2	〃 透孔3個
43		土師器 小型丸底壺	(13.0) — —	外面：口縁部ヘラミガキ。体部ナデ。 内面：口縁部および体部ヘラミガキ。	赤褐色～ にぶい黄橙色 〃	精良	▲ M	△ S		○ S				〃	口縁部 1/6	〃 煤付着
46		土師器 複合口縁壺	(28.0) — —	外面：口頸部ヨコナデ。 内面：口頸部ヨコナデ。	にぶい黄橙色 〃	やや粗	○ S M	○ S L	○ S L	△ S				〃	口頸部 1/4	第1TR北区 2A～3A区 第137層
47		土師器 鉢	(27.0) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	灰黄色 〃	やや粗	○ S L	○ S L	△ S	○ S				〃	口縁部 1/8	第2TR北区 SD-7 5H区
48		土師器 鼓形器台	— — —	外面：体部ヨコナデ。脚部ヘラミガキ。 内面：体部ナデ。脚部ヘラケズリ。	淡橙色 〃	良好	○ S L	○ S L	△ S M		▲ S	赤△ S M		〃	1/3	〃
49		須恵器 杯身	(12.4) — —	外面：立ち上がりおよび体部回転ナデ。 内面：立ち上がりおよび体部回転ナデ。	明青灰色 〃	精良	△ S L	△ S L						堅敏	口縁部 1/8	〃
50		土師器 高杯	(18.6) — —	外面：磨滅の為調整不明瞭。 内面：磨滅の為調整不明瞭。一部ヘラミガキが残る。	橙色 にぶい橙色	やや粗	○ S L	○ S L	△ S		▲ M L			良好 全体に磨滅	杯部 2/3	第2TR 5D区 SD-8
51		土師器 長頸壺	(10.0) — —	外面：頸部放射状ヘラミガキ。体部上半ヘラミガキ。下半ヘラケズリ。 内面：頸部および体部ナデ。指頭圧痕。	橙色 〃	精良	△ S M	▲ S L		▲ S				良好	1/2	第2TR NR-1 第228層
52	一四	土師器 高杯	17.9 13.8 — 裾部径10.6	外面：体部下半指頭圧成形後ナデ。柱状部ヘラナデ。裾部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。柱状部シボリ目。裾部指頭圧成形後ナデ。	橙色 淡橙色	精良	△ M L	▲ M L		△ S				〃	ほぼ完形	〃 第231層 黒斑
53		土師器 鉢	(10.5) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	橙色 〃	精良	△ S	△ S						〃	口縁部 1/4	〃 第228層

・凡例 粒径—L 1 mm以上 M 0.5~1 mm未満 S 0.5 mm未満 量—○多量 ○—多い △—少ない ▲—希少 ※赤—赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ()復元値	調整・手法		色調	胎土						焼成保存	残存率	地区備考	
				外面	内面		素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他			
54		土師器 土釜	- - - 銚徑28.9	外面：銚部ヨコナデ。体部ナデ一部縦方向のハケメ。 内面：体部ナデ。一部、指頭圧痕遺存。	褐色 〃	良好	○S-L	△S-M	○S-M	○S				良好	銚1/8	第2TR NR-1 第228層
55	一五	須恵器 杯蓋	(13.4) - -	外面：口縁部回転ナデ。天井部回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	灰赤色 〃	精良	△S-L			○S				堅緻	口縁部 1/4	〃 第228層 内外面赤色顔料
56		須恵器 杯身	(9.3) - -	外面：立ち上がりおよび体底部上半回転ナデ。以下回転ケズリ。 内面：回転ナデ。	灰色～暗灰色 灰色	良好	△S-L	△S-L		△S				〃	口縁部 1/6	〃 第231層
57		須恵器 杯身	(11.6) - -	外面：立ち上がりおよび体底部回転ナデ。体部外面灰かぶり。 内面：回転ナデ。	淡灰青色 〃	精良	△S-L			△S				〃	口縁部 1/6	〃 第228層
58		須恵器 杯身	(12.2) - -	外面：立ち上がりおよび体底部上半回転ナデ。以下回転ケズリ。体部灰かぶり。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	精良	○S-L	△S-L						〃	口縁部 1/5	〃 第228層
59		須恵器 甕	(16.9) - -	外面：口頸部回転ナデ。 内面：口頸部回転ナデ。	青灰色 灰白色	精良	△S-L	○S-M		▲S				〃 全体に磨滅	口縁部 1/4	〃 第231層
60	一四	須恵器 匙	体部最大径8.7 残存高5.8	外面：体底部回転ナデ。体部中位列点文。体部上半自然釉。 内面：体部回転ナデ。	青灰色～暗青灰色 暗青灰色	精良	△S-L	△S-L						〃	体部完存	〃 第231層
61	一四	須恵器 大型器台	- - -	外面：杯部下半沈線2条以下タタキ。 角状突起2個。 内面：杯部青海波タタキ。	暗灰色 淡灰色	精良	○S-L	○S-L						〃	杯部小片	〃 第228層
62	一四	須恵器 装飾器台	- - - 残存高9.1	外面：匙部回転ナデ。杯部ナデ。全体に杯かぶり。 内面：杯部回転ナデ。	灰色～暗灰色 青灰色	良好	○S-L	○S-L		△S				〃	装飾部 匙完存	〃 第228層
63		土師器 甕	(14.4) - -	外面：口縁部ヨコナデ。体部縦方向のハケメ。 内面：口縁部および体部横方向のハケメ。	灰黄色 〃	良好	○S-M	○S		○S				良好	口縁部 1/6	第2TR 第247層
64	一五	土師器 高杯	(16.8) 14.2 裾部径10.5	外面：杯部指頭圧成形後ナデ。柱状部ヘラナデ。裾部ナデ。 内面：杯部ヨコナデ。柱状部シボリ目 裾部指頭圧成形後ナデ。	橙色～淡黃橙色 〃	精良	△M-L	▲S-M		△S				〃	ほぼ 完形	〃
65	一五	韓式系 土器	- - -	外面：縄文席タタキ。螺旋状沈線文。 内面：ナデ。	橙色 〃	良好	△S-M	△M-L						〃	体部 小片	〃
66		須恵器 杯身	(10.5)	外面：立ち上がり回転ナデ。以下回転ケズリ。 内面：回転ナデ。	青灰色 〃	良好	△M-L	▲S						〃	口縁部 1/12	〃
67		須恵器 杯身	(10.6) - -	外面：立ち上がりおよび体底部上半回転ナデ。以下回転ケズリ。体部灰かぶり。 内面：回転ナデ。	青灰色 〃	良好	○S-L	△S-M						〃	口縁部 1/6	〃
68	一四	須恵器 高杯	- - -	外面：杯部および柱状部回転ナデ。杯部および柱状部灰かぶり。 内面：杯部回転ナデ。柱状部回転ケズリ。	暗灰色 〃	精良	△S-L	△S						〃	脚部 1/2	2段透し窓
69	一四	須恵器 高杯	- - - 裾部径(10.4)	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。	暗灰色 灰色	精良	○S-L	△S-L		△S				〃	脚部 1/2	透した窓を意識した沈線
70		弥生土器 広口壺	(13.6) - -	外面：磨減の為調整不明瞭。頸部下半縦方向のハケメ、体部上半にヘラミガキ。 内面：調整不明瞭。一部ヘラミガキ。	暗茶褐色 やや粗	○S-L	○S-L	○S	○S-L				〃 全体に磨滅	口縁部 1/3	第2TR 第283層	

・凡例 粒径—L 1mm以上 M 0.5~1mm未満 S 0.5mm未満 量—◎多量 ○一多い △一少ない ▲一希少 ※赤—赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口徑 器底 ()復元値	調整・手法	色調	胎土						焼成保存	残存率	地区備考	
						外面 内面	素質	長石	石英	雲母	角閃石	チヤート			
71		弥生土器壺	— 3.9	外面: 体部ヘラミガキ。底部ナデ。 内面: 体底部ヘラナデおよびヘラミガキ。	暗灰黄色 〃	やや粗	◎S — L	▲S	△S	◎S			良好	底部完存	第2TR 第283層
72		土師器布留式壺	(15.2) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部縦方向のハケメ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	良好	○S — L	△S	○S — L	○S — M			〃	口縁部 1/6	〃
73		須恵器杯身	(11.9) — —	外面: 立ち上がりおよび体部回転ナデ。 内面: 回転ナデ。	灰白色 〃	良好	△S — L	▲S		○S			堅緻	口縁部 1/8	〃
74		須恵器有蓋高杯	— — —	外面: 脚部回転ナデ。灰かぶり。 内面: 脚部回転ナデ。	暗青灰色 〃	精良	△S — L	△S — M		○S			〃	脚部 1/6	透かし窓
75		須恵器杯蓋	(11.4) — —	外面: 口縁部回転ナデ。天井部2/3回転ヘラケズリ。 内面: 回転ナデ。	淡灰色 〃	良好	△S — M	○M — L		○S			〃	口縁部 1/6	第2TR 第283層
76		須恵器杯蓋	(14.2) — —	外面: 口縁部回転ナデ。天井部2/3回転ヘラケズリ。 内面: 回転ナデ。	淡灰色 〃	良好	△S — L	○S		○S			〃	口縁部 1/4	〃
77		須恵器杯身	(11.7) — —	外面: 立ち上がりおよび体部上半回転ナデ以下回転ケズリ。 内面: 回転ナデ。	青灰色 〃	精良	△S — L			▲S			〃	口縁部 1/6	〃
78	五	縄文土器深鉢	— — —	外面: 沈線文。 内面: ナデ。指頭圧痕。	褐色 〃	粗	○M — L	○M — L	△S	○S — L			良好	口縁部小片	第3TR NR-2
79	五	弥生土器細頸壺	— — —	外面: 頸部流水文、直線文、波状文。 内面: ヘラミガキ。	褐灰色 〃	良好	○S — L	○S — L	△S	△M — L			〃	口頸部 1/4	〃
80	五	弥生土器細頸壺 頸部高11.2	7.8 — —	外面: 口縁部ヨコナデ。頸部縦方向のヘラミガキ。 内面: 口頸部ヨコナデ。頸部一部ヘラミガキ。	褐灰色 〃	良好	○S — L	○S — L	○S — L	○S — M			〃	口頸部完存	〃
81	五	弥生土器蓋	(10.2) 3.5 —	外面: 天井部ナデ。 内面: 天井部ナデ。	灰黄褐色～ 黒褐色 褐色～ 黒褐色	粗	○S — L	○S — L	○S — M	△S			〃	1/2	天井部円孔
82		弥生土器高杯	(25.2) — —	外面: 口縁部および杯部ヨコナデ。 内面: 口縁部および杯部ヨコナデ。	褐灰色 〃	粗	○S — L	○S — L	○S — L	○M — L			〃	口縁部 1/6	〃
83	六	土師器小型丸底壺	(10.0) — —	外面: 口頸部および杯部ヘラミガキ。 内面: 口縁部ヘラミガキ。体部ナデ。	灰褐色～ 暗灰黄色 〃	精良	△S — L		△S	△S			〃	口縁部 1/6	〃
84	六	土師器小型丸底壺	(9.4) — —	外面: 口縁部ヘラミガキ。体部上半ヘラミガキ。下半ヘラケズリ。 内面: 口縁部ヘラミガキ。体部指ナデ。	にぶい黄橙色 〃	精良	△M — L	△M — L	▲S — M	△S			〃	1/2	〃
85	六	土師器小型丸底壺	(9.0) — —	外面: 風化の為調整不明瞭一部右上がりのハケメ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	浅黄橙色 〃	やや粗	○S — L	△M — L	○S — M	△S	赤△M — L	やや不良 風化	1/4	〃	
86	六	土師器小型丸底壺 体部最大径11.0	10.1 9.9 — —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部上半縦方向のハケメ。下半指頭圧成形後ナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。底部指頭圧痕。	淡黄橙色～ 灰白色 〃	やや粗	○M — L	○S — L	○S — M	△S	赤○S — M	良好	完形	〃 外面黒斑	
87		土師器布留式壺	(14.6) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡橙色 〃	精良	▲S		△S		赤△S — M	〃	口縁部 1/8	〃 外面煤付着	

・凡例 粒径-L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量-○多量 □-多い △-少ない ▲-希少 ※赤-赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口徑 器底 ()復元値	調整・手法		色調	胎土						焼成保存	残存率	地区備考		
				外面	内面		外面	素質	長石	石英	雲母	角閃石	チヤート				
88		土師器 布留式甕	(14.4)	外面:口縁部ヨコナデ。体部横方向のハケメ後ナデ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズり。		淡橙色 △	精良 △S M	△S M	△S L	▲ S				良好	口縁部 1/6	第3TR NR-2 外面煤付着	
89	一六	土師器 布留式甕	(13.1)	外面:口縁部ヨコナデ。体部上半縦方向のハケメ後ヨコナデ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズり。		淡褐色 △	良好 ○S L	○S L		△ S		赤○ S M		△	口縁部 1/2	△ 外面煤付着	
90	一六	土師器 布留式甕	(17.2)	外面:口縁部ヨコナデ。体部上半身縦方向横方向のハケメ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズり。		黒灰色 明黄褐色	良好 ○S L	○S L							△	口縁部 1/2	△ 外面煤付着
91		土師器 高杯	(15.6)	外面:口縁部ナデ。体部ヘラケズり。 内面:口縁部ハケナデ。体部ナデ。		淡黄色 にぶい黄橙色	良好 △S L	△S M	△S	△ S				△	杯部 ほぼ完存	△	
92	一六	土師器 高杯	16.2 12.7 裾部径12.0	外面:杯部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。柱状部上半ナデ。下半ヘラミガキ。裾部ヨコナア。一部ハケメ。 内面:杯部ヨコナデ。柱状部ヘラケズリ。脚部ナデ。		淡赤橙色～ にぶい褐色 △	良好 ○S L	○M L	▲ S M	▲ S M	赤○ S L			△	ほぼ完形	△	
93		土師器 高杯	(17.4)	外面:磨滅の為調整不明瞭、一部斜方向のハケメ。 内面:磨滅の為調整不明瞭。		淡黄色 △	やや粗 ○S L	○S L	△S		○M L			△	杯部 1/4	△	
94	一六	土師器 高杯	(17.1)	外面:磨滅の為調整不明瞭。 内面:磨滅の為調整不明瞭。		淡橙色 △	良好 ○S L	○M L	△S			赤○ S L		△	杯部 1/4	△	
95	一六	土師器 高杯	18.0	外面:口縁部ヨコナデ。体部斜方向のハケメ。 内面:杯部調整不明瞭一部ハケメ。		にぶい褐色 にぶい橙色	良好 ○S L	○S L	○S	△S	赤△ M L			△	杯部 2/3	△	
96	一六	土師器 高杯	— 裾部径(11.4)	外面:柱状部ヘラケズリ後ナデ。裾部ナデ。 内面:柱状部シボリ目。ヘラケズリ。裾部ナデ。		にぶい褐色 △	良好 ○S L	△S L	○S L	▲ S M				△	脚部 1/2	△	
97		弥生土器 広口壺	(15.9)	外面:口縁部ヨコナデ。頸部突帯1条。 内面:口縁部ヨコナデ。		灰白色 △	粗 ○S L	○S L						△	口頸部 1/6	第3TR 第346層	
98		弥生土器 広口壺	(13.2)	外面:口頸部ヨコナデ。頸部沈線1条。 内面:口頸部ヨコナデ。		淡褐色 △	やや粗 ○S L	○S L	○S M	○S L	△ L			△	口頸部 1/4	△	
99	一七	弥生土器 広口壺	(32.2)	外面:口縁部ヘラミガキ。体部ナデ。口縁端1条、体部上半2条沈線。 内面:口縁部および体部ヘラミガキ。		明赤褐色～ 灰黃褐色 △	良好 ○S L	○S L	○S L	△S	○S L			△	口縁部 1/4	△	
100	一七	弥生土器 広口壺	(13.4)	外面:口頸部ヨコナデ。端面竹管押圧文。ヘラミガキ。 内面:口頸部ナデ。体部指頭圧成形後ナデ。		褐色 △	粗 ○S L	○S L	○S L	○M L	▲ M			△	口頸部 2/3	△	
101		弥生土器 広口壺	(14.8)	外面:口縁部ヨコナデ。頸部上半ヨコナデ、頸部下半縦方向のハケメ。 内面:口縁部ヨコナデ。		にぶい黄褐色 △	やや粗 ○S L	○M L	○S L	○M L				△	口縁部 1/4	△	
102	一七	弥生土器 長頸壺	(9.8)	外面:口縁部ヨコナデ。頸部下半縦方向のハケメ。体部ナデ。 内面:口頸部横方向のハケメ。体部ナデ。指頭圧痕。		灰黄色 △	良好 △S L	▲ M	○S L	○S L				△	口頸部 1/2	△ 口縁部注ぎ口	
103		弥生土器 甕	(17.2)	外面:口縁部ヨコナデ。体部タキ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部ナデ。		にぶい褐色 にぶい橙色	やや粗 ○S L	○S L	○S L	△S M				△	口縁部 1/6	△	
104		弥生土器 甕	— 5.4	外面:体部タキ。底部ナデ。 内面:体底部ナデ。一部ハケメ。		明赤褐色～ 灰褐色 暗灰褐色 △	良好 ○S L	○S L	○S L	△S M				△	底部 完存	△	

III 郡川遺跡第2次調査 (K R 90-2)

・凡例 粒径—L 1mm以上 M 0.5~1mm未満 S 0.5mm未満 量—○多量 △多い △少ない ▲希少 ※赤—赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口徑 器底 ()復元値	調整・手法	色調	胎土						焼成保存	残存率	地区備考		
						外面	素質	長石	石英	雲母	角閃石	チヤート				
105		弥生土器 甕	— 4.6	外面：体底部指頭圧成形後ナデ。 内面：体底部ナデ。工具痕遺存。	にぶい黄褐色 △	良好	○ S — L	○ S — L	○ S — L	○ S — L	○ S — L			良好	底部完存 第3TR 第346層	
106		弥生土器 有孔鉢	— 4.2	外面：体底部指頭圧成形後ナデ。 内面：体底部ナデ。工具痕遺存。	にぶい褐色 △	良好	○ S — L	△ S — L	○ S — M	▲ S — M				△	底部完存 △	
107	二七	土師器 庄内式 甕	(16.0) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ後ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	灰褐色 △	良好	○ S — L	△ S — L	○ S — L	△ S — L				△	口縁部 1/4 △	
108	二七	土師器 布留式 甕	(15.3) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半縦方向、以下横方向ハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	橙色 △	やや粗	○ S — L	○ S — L	△ S — L				△	口縁部 1/6 △ 外面煤付着		
109		土師器 小型丸底 壺	(10.0) — —	外面：口縁部および体部ヘラミガキ。 内面：口縁部ヘラミガキ。体部ナデ。	にぶい橙色 △	精良	▲ S — L	▲ S — L	△ S — L	○ S — L				△	口縁部 1/4 △	
110		土師器 小型丸底 壺	(9.2) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部一部斜方向のハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。指頭圧痕。	灰白色 △	やや粗	▲ S — L	▲ M — L			▲ L — L			△	口縁部 1/6 △	
111	一六	土師器 高杯	(16.1) — —	外面：口縁部ヘラミガキ。体部ヘラケズリ後ヘラミガキ。 内面：杯部ヨコナデ、一部ヘラミガキ。	淡褐色 △	良好	○ S — L	○ S — L	○ S — L	○ S — L				△	杯部完存 △	
112	二六	土師器 高杯	(16.0) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡橙色 にぶい橙色	やや粗	○ S — L	○ S — L	○ S — L	▲ S — L				△	杯部 1/2 △	
113		弥生土器 高杯	— — —	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：柱状部シボリ目。裾部ナデ。	褐色 △	良好	○ S — L	○ S — L	○ S — L	○ S — M				△	脚部 1/2 △ 外面煤付着 透孔4個	
114	一七	弥生土器 高杯	— — — 裾部径(14.2)	外面：柱状部ヘラミガキ。裾部ナデ。 内面：脚部ナデ。	灰褐色 △	良好	△ S — L	▲ M — L	○ S — L	○ S — M				△	脚部 1/2 △ 透孔 柱状部2個 裾部3個	
115	二七	土師器 小型丸底 壺	7.9 8.4 —	外面：口縁部および体部上半ヨコナデ。体部上半以下ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部指頭圧成形後ナデ。	橙色 △	良好	○ S — L	○ S — L	○ S — L	△ S — L	赤 ○ S — L			△	完形 第3TR 第348層	
116	二七	土師器 布留式 甕	(17.0) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部斜方向のハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	にぶい褐色 △	良好	○ S — L	○ S — L	○ S — L	△ S — L				△	口縁部 1/3 △ 外面煤付着	
117	二七	土師器 布留式 甕	14.7 — — 体部最大径22.2	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半横方向のハケメ。体部上半以下乱方向のハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	にぶい橙色 △	やや粗	△ S — L	○ S — L	△ S — L	○ S — L	△ S — L	赤 ○ S — L			△	口縁部完存 体部 1/2 △ 外面煤付着
118	二七	土師器 布留式 甕	14.4 — — 体部最大径22.0	外面：口縁部ヨコナデ。体部縦方向の後、横方向のハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。指頭圧痕。	淡灰褐色 △	良好	△ S — L	△ S — L		△ S — L	赤 ○ S — L			△	口縁部完存 体部 1/2 △ 外面煤付着	
119		土師器 甕	14.2 24.5 — 体部最大径22.3	外面：口縁部ヨコナデ。体部乱方向のハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良好	○ S — L	○ S — L	○ S — L		▲ S — L			△	口縁部 1/3 体部 2/3 △ 外面煤付着	
120	二八	土師器 庄内式 甕	15.6 — — 体部最大径20.3	外面：口縁部ヨコナデ。体部中位迄タタキ。体部中位以下縦方向のハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 △	良好	○ S — L	○ S — L	△ S — L	○ S — L				△	口縁部完存 体部 1/2 第4TR 13TR SK-1 外面煤付着	
121	二八	土師器 庄内式 甕	15.7 — — 体部最大径19.4	外面：口縁部ヨコナデ。体部中位迄タタキ後縦方向のハケメ。 内面：口縁部横方向のハケメ。体部ヘラケズリ。	にぶい褐色 △	良好	○ S — L	△ S — L	○ S — L	○ S — L				△	ほぼ 完形 △ 外面煤付着	

・凡例 粒径-L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量-○多量 ○-多い △-少ない ▲-希少 ※赤-赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口徑 器底 ()復元値	調整・手法	色調	胎土						焼成保存	残存率	地区備考		
						外面		素質	長石	石英	雲母	角閃石	チヤート			
						内面	内面									
122	一八	土師器 庄内式 甕	(13.6)	外面:口縁部ヨコナデ。体部タタキ 内面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズ り。	褐灰色 〃	良好	○S-L S-M	▲S-L S-M	○S S	△S S				良好	口縁部 1/4	第4TR SK-1 13I区
123	一八	土師器 V様式系 甕	- - 3.3	外面:体部タタキ。 内面:体部斜方向のハケメ。	褐灰色 〃	粗	○S-L S-L	○S-L S-L	▲S S	△S S				〃磨滅	底部～ 体部 1/2	外面煤付着
125	一八	弥生土器 広口壺	(16.6)	外面:口縁部ヨコナデ一部ヘラミガ キ。縁部2条沈線。 内面:口縁部ヨコナデ一部ヘラミガ キ。	にぶい黄橙色 〃	良好	○S-L S-L	△S-L S-L	○S-L S-L		△S S-M			〃	口縁部 1/6	第4TR SD-10 紐孔
126	一八	弥生土器 鉢	- - 6.0	外面:体部指頭圧成形後縦方向のハケ メ。底部ナデ。 内面:ヘラミガキ。	にぶい橙色 〃	粗	○S-L S-L	○S-L S-L	○S S					〃	底部 完存	〃 黒斑
127	一八	土師器 平底鉢	- - 7.1	外面:体部ナデ。底部葉脈痕。 内面:体部ヘラケズリ。	にぶい橙色 〃	良好	▲S S	▲S S	△S S	▲S S				〃	底部 完存	第4TR 第407層
128		須恵器 杯蓋	(15.6)	外面:回転ナデ。 内面:回転ナデ。	青灰色 〃	精良	▲S-L S-L		△S S					堅緻	口縁部 1/5	〃
129		須恵器 杯蓋	(16.8)	外面:口縁部回転ナデ。天井部2/3 回転ケズリ。 内面:回転ナデ。	灰青色 〃	精良	○S-L S-L	△S-L S-L	△S S					〃	口縁部 1/4	〃
130		須恵器 杯身	(12.8)	外面:立ち上がりおよび底部上半回転 ナデ。底体部回転ケズリ。 内面:回転ナデ。	灰青色 〃	精良	○M-L M-L		△S S					〃	口縁部 1/4	杯・体部 灰かぶり
131		須恵器 杯身	(14.2)	外面:立ち上がりおよび底体部回転ナ デ。 内面:回転ナデ。	灰青色 〃	精良	△S-M S-M	△S S	△S S					〃	口縁部 1/6	灰かぶり
132	一八	須恵器 杯身	(13.7) 4.8	外面:立ち上がりおよび底体部1/4 回転ナデ。以下回転ケズリ。 内面:回転ナデ。	灰青色 〃	精良	○S-L S-L	△S S						〃	1/2	〃
133		弥生土器 壺	(9.0)	外面:体部ヘラケズリ。底部ナデ。 内面:体底部ヘラミガキ。	灰黃褐色 暗灰色	やや粗	○S-L S-L	○S-L S-L	△S S	△M M				良好	底部 1/2	第4TR 第439層
134		弥生土器 高杯	- - -	外面:脚部ヘラミガキ。 内面:脚部ナデ。	灰白色 〃	良好	○S-L S-L	○S-L S-L	○S S	△S S	△S-L S-L			〃	脚部 1/2	〃
135	一九	土師器 小型丸底 壺	8.6 - - - 体部最大径9.6	外面:口縁部および体部上半ヘラミガ キ、下半ヘラケズリ。 内面:口縁部および体部ヨコナデ。	淡褐色 〃	やや粗	○S-L S-L	▲M M			▲S S			〃	1/2	〃 黒斑
136	一九	土師器 小型丸底 壺	(9.0) - - - 体部最大径9.3	外面:口縁部ヨコナデ。体部斜方向の ハケメ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズ り。	灰白色 〃	やや粗	○S-L S-L	△M-L M-L				赤 ▲M M		〃	口縁部 1/2 体部 1/4	〃
137	一九	土師器 広口壺	(17.0) - - -	外面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデー部ハ ケメ。体部と縁部の境に凸帯。凸帯上面刻み目文。 内面:口縁部ヨコナデ後横方向のハケメ。 体部指ナデ。	にぶい黄褐色 黒灰色	良好	○S-L S-L	○S-L S-L	○S S	△S S				〃	口縁部 1/6	〃
138	一九	土師器 庄内式 甕	(17.2) - - -	外面:口縁部ヨコナデ。体部タタキの 後右上がりのハケメ。 内面:口縁部ハケメ。体部ヘラケズリ。	暗褐色 〃	良好	○S-L S-L	△S-L S-L	○S S	△S S				〃	口縁部 1/4	外面煤付着
139		土師器 庄内式 甕	(17.0) - - -	外面:口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズ り。	灰白色 〃	良好	△M-L M-L		△S-M S-M	○M M				〃	口縁部 1/8	〃

・凡例 粒径-L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量-◎多量 ○-多い △-少ない ▲-希少 ※赤-赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口徑 器高 底径 ()復元値	調整・手法		色調	胎土						焼成保存	残存率	地区備考	
				外面	内面		素質	長石	石英	雲母	角閃石	チヤート	その他			
140	一九	土師器 庄内式 甕	(14.3) — — 体部最大径23.0	外面: 口縁部ヨコナデ。体部縦方向上半の一部横方向のハケメ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。体部上半指頭圧痕遺存。	にぶい黄橙色 〃	良好	○ S — L	○ S — L		△ S — L	△ M — L			良好	口縁部 1/2 体部 1/3	第4TR 第439層
141		土師器 高杯	(15.8) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。 内面: 口縁部放射状ヘラミガキ。	にぶい橙色 〃	良好	△ S — L	△ S — M	○ S	△ S				〃	杯部 1/4	〃
142	一九	弥生土器 小型鉢	(10.0) 5.6 3.6	外面: 体部および底部ナデ。一部斜方向のハケメ。 内面: 体底部ヘラナデ。	にぶい赤褐色 〃	良好	○ S — M	△ S — L	○ S	○ S — L				〃	1/2	第4TR 第460層
143		弥生土器 布留式傾向 甕	(18.5) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部縦方向のハケメ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。指頭圧痕。	にぶい黄褐色 〃	良好	○ S — L	△ M — L	○ S — M	○ M — L				〃	口縁部 1/8	〃 黒斑
144		弥生土器 布留式傾向 甕	(18.2) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部縦方向のハケメ。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	にぶい黄橙色 〃	良好	○ S — L	△ M — L	○ S — M	▲ S — L				〃	口縁部 1/8	〃
145	一九	土師器 土釜	— — —	外面: 頸部および体部ナデ。 内面: 頸部および体部ナデ。	淡黄橙色 にぶい橙色	良好	○ S — L	△ M — L	○ S	○ S				〃	鋸部 1片	第5TR 16L区 SE-1
146		土師器 小皿	(7.9) — —	外面: 口縁部および体底部指頭圧成形後ヨコナデ。 内面: 口縁部ヨコナデ。	乳白色 〃	精良	▲ S							〃	口縁部 1/8	〃
149		弥生土器 広口壺	(15.0) — —	外面: 口頸部ヘラミガキ。頸部1条の沈線。 内面: 氷化の為調整不明瞭。一部ヘラミガキ。	にぶい橙色～ 橙色 〃	やや粗	○ S — L	○ S — L	○ S — L	△ S			〃	内面風化	口頸部 1/4	第5TR 13L区 SK-1 紐孔
150		弥生土器 広口壺	(14.6) — —	外面: 口頸部ヘラミガキ。頸部1条沈線。 内面: 口頸部ヘラミガキ。	淡褐色 〃	やや粗	○ S — L	○ S — L	▲ S — M	△ S				〃	口頸部 1/4	〃
151	一九	弥生土器 広口壺	— — —	外面: 体部上端押捺文。2条の沈線文。 内面: 頸部から体部ナデ。	にぶい橙色 淡黄色	粗	○ S — L	○ S — L	▲ S	▲ S				〃	体部 小片	〃
152	一九	弥生土器 広口壺	— — —	外面: 頸部および体部ヘラミガキ。体部上端3条の押捺文・沈線文。 内面: 頸部および体部ヘラミガキ。	にぶい橙色 淡橙色	良好	△ M — L	○ M — L		○ S				〃	体部 小片	〃
153	一九	弥生土器 広口壺	— — —	外面: 体部ナデ。体部に2段に木葉状文。 内面: 体部ナデ。	浅黄色 〃	良好	○ S — L	△ M — L	△ S	○ S				〃	体部 小片	〃
154		弥生土器 広口壺	14.2 — —	外面: 口縁部および体部ヘラミガキ。体部上半貼付突帯文。 内面: 口縁部および体部ヘラミガキ。	黄橙色 〃	良好	○ S — L	○ S — L	▲ S	△ S — M				〃	口縁部 1/2	〃 紐孔
155	二〇	弥生土器 広口壺	15.6 — —	外面: 口頸部ヘラミガキ。体部ナデ。体部上端2条の沈線、頸部と体部の境に段。 内面: 調整不明瞭。指ナデ。	褐灰色 〃	やや粗	○ S — L	○ M — L	○ S — L	△ S — L			〃	風化	口頸部 完存 体部 1/3	〃
156	二〇	弥生土器 広口壺	15.7 26.1 7.9 体部最大径26.8	外面: 口縁部ヨコナデ。頸部から体部中位ヨコヘラミガキ。底部タテヘラミガキ。 内面: 口縁部ヘラミガキ。体部指ナデ。ヘラミガキ。	褐灰色 〃	良好	○ S — L	○ M — L	○ S — L	○ S — L				〃	ほぼ 完形	〃
157	二〇	弥生土器 広口壺	13.6 26.1 8.2 体部最大径28.1	外面: 口縁部および体底部ヘラミガキ。頸部2条の沈線。体部上端削出突帯文。 内面: 口縁部および体底部ヘラミガキ。体部指ナデ。ヘラミガキ。	褐色～ 暗褐色 灰黃褐色 〃	良好	○ S — L	△ S — M	▲ S	○ M — L		赤 ○ L		〃	ほぼ 完形	〃 黒斑
158	二〇	弥生土器 広口壺	13.3 23.9 8.5 体部最大径24.6	外面: 口縁部および体底部ヘラミガキ。頸部2条の沈線。体部上端削出突帯文。 内面: 口縁部ヘラミガキ。体底部中位ヘラナデ。下半ヘラミガキ。	黄橙色～ 赤褐色 〃	良好	○ S — L	○ M — L	○ M — L	○ S — L				〃	1/2	〃

・凡例 粒径—L 1mm以上 M0.5~1mm未満 S0.5mm未満 量—○多量 ○—多い △—少ない ▲—希少 ※赤—赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口徑 器底 ()復元値	調整・手法		色調						胎土					焼成保存	残存率	地区備考
				外面	内面	外面	素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他						
159	二〇	弥生土器 広口壺	13.3 24.1 8.2 体部最大径27.6	外面：風化の為調整不明瞭。削出突帯上刻目文。 内面：体部上半ヘラミガキ、指ナデ、下半ナデ。		橙色～ 浅黃橙色 褐灰色	良好	◎S-L	◎S-L		○S-L	○M-L				良好 風化	1/2	第5TR 13L区 SK-4	
160		弥生土器 広口壺	— (8.4)	外面：体部ヘラミガキ。底部ナデ。 内面：体底部ナデ。裏面ナデ。		浅黄色 灰色	良好	◎S-L	○M-L	○S-L	○S					〃	底部 1/2	〃	
161	二〇	弥生土器 広口壺	— 13.2	外面：体部ヘラミガキ。底部ナデ。 内面：体底部ヘラミガキ。		黄橙色～にぶい 橙色 灰白色	良好	◎S-L	○S-L	○S-L	○S-L					〃	底部 完存	黒斑	
162	二〇	弥生土器 広口壺	40.3 59.9 13.7 体部最大径49.4	外面：口頸部指ナデ成形後ヘラミガキ。 体部ヘラケズリ後ヘラケズリ。 底部ナデ。 内面：体底部ヘラミガキ。指ナデ痕。		黄褐色 〃	良好	◎S-L	○S-L	○S-L	○S-L	△M-L				〃	1/2	〃	
163	二	弥生土器 甕	(22.0) —	外面：口縁部および体部ナデ。口縁端面刻目文。体部上半2条の沈線文。 内面：口縁部および体部ナデ。		にぶい黄橙色 〃	良好	◎S-L	○M-L	○S-M	○S		赤▲M-L		〃	口縁部 1/8	〃		
164	二	弥生土器 甕	(21.1) —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。口縁端部刻目文。体部上半2条の沈線文。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。		淡橙色 淡橙色～ にぶい褐色	良好	○S-L	○S-L	○S-L	△S				〃	口縁部 1/4	〃 外面煤付着		
165	二	弥生土器 甕	(28.3) —	外面：口縁部および体部ナデ。 内面：口縁部および体部ナデ。		淡褐色 明褐色	やや粗	◎S-L	○S-L	△S	△M-L	▲M				〃	口縁部 1/4	〃 内面煤付着	
166		弥生土器 甕	(22.8) —	外面：口縁部および体部ナデ。 内面：口縁部および体部ナデ。		明褐色 にぶい褐色	やや粗	◎S-L	○M-L	○S	▲S	△M-L			〃 内面剥離	口縁部 1/12	〃		
167	二〇	弥生土器 甕	— 8.5	外面：体部ナデ。底部未調整。 内面：体底部ナデ。		褐灰色～ にぶい赤褐色 黄橙色	やや粗	◎S-L	○S-L	○S-L	○S-M				〃 内面剥離	底部 完存	〃 内・外面煤付着		
168		弥生土器 甕	— (9.1)	外面：体部ヘラミガキ。底部ナデ。 内面：剥離の為調整不明瞭。		褐灰色 〃	やや粗	◎S-L	○S-L	△S	△S				〃 内面剥離	底部 1/2	〃		
169		弥生土器 甕	— (9.9)	外面：体部ヘラミガキの後ナデ。底部ナデ。 内面：底部剥離の為調整不明瞭。一部ナデ。		褐灰色 〃	良好	○S-L	○M-L	△S	○S				〃 内面剥離	底部 完存	〃		
170	二	弥生土器 台付き鉢	— (7.3) 脚部高3.0	外面：体部ナデ。脚部指頭圧成形後ナデ。 内面：体部および脚部裏面ナデ。		にぶい橙色 〃	良好	◎S-L	○S-L	△S	○S				〃	脚部 完存	〃		
171	二	弥生土器 甕	(23.3) —	外面：口縁部および体部ナデ。 内面：口縁部および体部ナデ。		にぶい黄橙色 〃	良好	◎S-L	○S-L	○S					〃	1/2	〃 外面煤付着		
172	二	弥生土器 広口長頸壺	(28.3) (56.8) 7.9	外面：口頸部風化の為調整不明瞭。体部下半ヘラミガキ。 口縁端部刻目文。頸部から体部上半12条の直刺文。 内面：口頸部から体部上半指ナデ後ナデ。 体部一部ハケナデ。		灰黄褐色～ 明赤褐色 〃	やや粗	◎S-L	△S-L		△S				〃 外表面風化	1/2	第5TR 13KL区 SK-7		
173		土師器 布留式甕	(13.9) —	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。		淡橙色 〃	良好	○S-M	○S-L		○S				〃	口縁部 1/8	第5TR 11・12KL区 SD-12		
174		土師器 布留式甕	(14.3) —	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。		淡橙色 〃	良好	△S-L	△S-L						〃	口縁部 1/8	〃		
175		土師器 布留式甕向甕	(15.4) —	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。		褐灰色 〃	良好	○S-L	△S-L	○S	▲S				〃	口縁部 1/4	〃 外面煤付着		

・凡例 粒径-L 1mm以上 M 0.5~1mm未満 S 0.5mm未満 量-○多量 ○-多い △-少ない ▲-希少 ※赤-赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口徑 器高 底径 ()復元値	調整・手法	色調	胎土						焼成保存	残存率	地区備考			
						外面	内面	素質	長石	石英	雲母	角閃石	チヤート	その他			
176		土師器 高杯	(14.9) — —	外面: 口縁部および体部ナデ。 内面: 口縁部および体部ナデ。	淡橙色 〃	良好	○ S L	○ S L	▲ L	△ S			赤△ S M	良好	杯部 1/12	第5TR 11, 12KL区 SD-12	
177	三	土師器 直口壺	8.8 17.0 — 体部最大径18.6	外面: 頸部および体部上半ヘラミガキ。体部下半ヘラケズリ。 内面: 指ナデ後ナデ。	橙色 〃	良好	○ M L	△ M	○ S	△ S				〃	ほぼ 完形	第5TR 第504層	
178		須恵器 杯蓋	(13.2) — —	外面: 口縁部回転ナデ。天井部回転ケズリ。 内面: 回転ナデ。	灰青色 〃	精良	○ S L	△ S						堅緻	口縁部 1/6	〃	
179		須恵器 杯身	(11.8) — —	外面: 立ち上がりから体部上半回転ナデ。 内面: 回転ナデ。	灰白色～ 灰色 〃	精良	○ S L	▲ M						〃	口縁部 1/6	〃	
180	二	須恵器 壺	(24.9) — —	外面: 口縁端部回転ナデ。頸部カキメ。 口縁端部下半凹線。 内面: 回転ナデ。	青灰色 〃	精良	○ S L	▲ S						〃	口縁部 1/6	第5TR 第528層	
181		須恵器 杯身	(13.8) — —	外面: 口縁部回転ナデ。天井部回転ケズリ。 内面: 回転ナデ。	灰白色 〃	精良	○ S M							〃	口縁部 1/4	〃	
182		須恵器 杯身	(12.8) — —	外面: 立ち上がりおよび体部回転ナデ。 内面: 回転ナデ。	灰白色 〃	精良	○ S L				▲ L			〃	口縁部 1/4	〃	
183		須恵器 有蓋高杯 蓋 つまみ径3.2	(16.5) (4.7) — つまみ径3.2	外面: 口縁部および天井部1/3回転ナデ、2/3回転ケズリ。 内面: 回転ナデ。	青黒色 暗灰色 〃	精良	○ S L							〃	口縁部 1/4	灰かぶり	
184	二	須恵器 器台	— — —	外面: 回転ナデ。凸帯に区割された間に波状文施文。 内面: 回転ナデ。	灰色 灰白色 〃	精良	△ M							〃	裾部 小片	灰かぶり	
185	三	弥生土器 広口壺	(16.8) — —	外面: 口縁端面波状文。頸部ナデ。頸部直線文。 内面: 口縁部横方向のハケメ以下ナデ。	にぶい黄橙色 〃	良好	○ S L	△ S L	○ S	○ S M				良好	口頸部 1/4	第5TR 第545層	
186		弥生土器 広口壺	17.7 — —	外面: 口頸部ナデ。口縁端面簾状文。頸部直線文2条、簾状文2条。 内面: 口頸部ナデ。体部上半以下ハケメ。	にぶい褐色 〃	良好	○ S L	○ S L	○ S L	○ S L				〃	口頸部 1/2 以上	〃	
187	三	縄文土器 浅鉢	(32.2) — —	外面: 口縁部ナデ。口縁部多条沈線。 内面: 口縁部ナデ。	褐色 〃	粗	○ S L	○ S L	○ S L	○ S L				〃	口縁部 1/20	第5TR 第550層	
188		弥生土器 壺	— — (7.8)	外面: 体底部ナデ。 内面: 体底部ナデ。	にぶい黄橙色 〃	やや粗	○ S L	○ S L	○ S L				〃	内面剥離	底部 1/2	〃	
189		弥生土器 甕	(21.0) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。体部上半1条の沈線文。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部剥離の為不明。	にぶい橙色 橙色 〃	良好	○ S L	○ S L						〃	内面剥離	口縁部 1/12	〃
190	三	弥生土器 甕	(24.8) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。口縁端部刻目文。体部上半2条の沈線文。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	にぶい黄橙色 褐灰色 〃	良好	○ S L	○ S L	○ S L					〃	口縁部 1/8	〃	
191	三	弥生土器 甕	(49.2) — —	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。体部上半2条の沈線文。 内面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	橙色 灰褐色 〃	良好	○ S L	○ S L	△ S L	▲ S				〃	口縁部 1/12	〃	
192		弥生土器 有孔土器	— — (8.0)	外面: 体部縱方向のハケメ。底部ナデ。 内面: 体底部ナデ。	橙色 〃	やや粗	○ S L	○ S L	○ S					内面剥離	底部 完存	円孔	

・凡例 粒径—L 1mm以上 M 0.5~1mm未満 S 0.5mm未満 量—○多量 □多い △少ない ▲希少 ※赤—赤色酸化土

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口徑 器底 ()復元値	調整・手法		色調	胎土					焼成保存	残存率	地区備考	
				外面	内面		素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート			
193		弥生土器 広口壺	(19.6) — —	外面：口縁端部簾状文。頸部ナデ。 内面：口頸部ナデ。	暗褐色 △ S L	精良	△ S L	▲ S	○ S	△ S			良好	口縁部 1/6	第5TR 第551層
194	二三	弥生土器 広口壺	(17.0) — —	外面：口縁部ヨコナデ。頸部から体部 ヘラミガキ。 内面：口頸部ヘラミガキ。体部上半指 ナデ後ナデ。下半ヘラミガキ。	淡褐色 △ S L	良好	○ S L	○ S L	△ S M	○ S L			△	1/2	△
195		弥生土器 広口長頸壺	(17.0) — 6.7	外面：口縁部および体部上半ナデ。下半ヘラミガキ。 口縁端面波状文。端面下半刻目。頸部から体部織籠直線文。 内面：口頸部指頭圧成形後ナデ。体部 ハケナデ。	灰褐色 △ S L	良好	○ S L	○ S L	○ S L	○ S L			△	1/2	第5TR 第553層
196	二三	弥生土器 広口長頸壺	17.6 32.9 5.4 体部最大径18.0	外面：口縁部および体部上半ナデ。下半ヘラミガキ。 口縁端面、体部上半波状文。頸部織籠直線文。 内面：口頸部および体部ヘラミガキ。	明橙色 △ S L	良好	○ S L	○ S L	○ S L	○ S L	△ M L	赤 ○ S L	△	1/2	△
197	二三	弥生土器 甕	(13.4) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	橙色 △ S L	良好	△ M L	△ M L	○ S L	▲ S			△	口縁部 1/4	第5TR 第561層
198	二三	韓式土器 平底鉢	(16.9) — —	外面：口縁部ヨコナデ。体部斜格子状 タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	赤褐色 △ L	良好	▲ L	△ M L	○ S	○ S L			△	口縁部 1/8	△

第4章 まとめ

八尾市域では、平野部を中心に位置する遺跡群については、近年、数多くの発掘調査が実施されており、各時期における遺跡の動態が判明しつつある。それに比して、生駒西麓部に展開した遺跡群については、地域の約半分が市街化調整区域に指定されているためか開発のテンポも比較的緩やかで、一部高安古墳群についての所見はあるものの、発掘調査による考古学的な資料の蓄積が少ない地域であった。同条件下にある郡川遺跡についても、本調査を実施する以前においては、八尾市教育委員会および当調査研究会を含めても数次におよぶ小規模な調査が行われたに過ぎず、遺跡の実態についても不明な点が多くかった。そのような状況下に行われた本調査では、縄文時代晚期～室町時代の遺構・遺物が検出されたほか、扇状地性低地（扇状地中位面）の地形形成過程を推定し得る資料が得られている。今回の調査で得られた調査成果は、単に郡川遺跡のみならず、生駒西麓部の扇状地末端部分（扇状地中位面）における遺跡動態を考えるうえで示唆に富む資料を提供する結果となった。以下、本調査で遺構の検出をみた時期ごとに、生駒西麓部を中心とした周辺遺跡との関係を概観する。

弥生時代前期

弥生時代前期（畿内第I様式中段階）のものとしては、第5トレンチの南東部でSK-4・SK-5、第4トレンチ東部でSD-10が検出されており、生駒西麓部における稻作受容の初期段階に成立した集落例を加える結果となった。検出した遺構のなかで、SK-4・SK-5については、東部が調査区外に至るため遺跡の全容や性格については不明な点が多い。ただ、SK-4については、検出した部分が狭小にも拘わらず完形品を含む比較的良好な資料が出土していることから、居住域の中核に位置した遺構であると推定される。これらから、当該期の居住域の範囲を推定すれば、第4トレンチの東部から東方一帯に拡がりを持つものと推定されるが、続く前期新段階の土器が確認されていないことから、存続時期は比較的短期間であったようである。東大阪市および八尾市域の生駒西麓部では、本調査例を含めて、これまでに東大阪市の鬼塚遺跡註1（古段階）・植附遺跡（古段階）、八尾市の水越遺跡（新段階）・恩智遺跡（新段階）で前期に成立した集落が確認されている。いずれも、断片的な資料で実態が明瞭なものがないが、古段階に成立を見た東大阪市の両遺跡においては、縄文時代晚期終末に比定される長原式土器が共伴することが確認されている。本例については、遺構を全掘したものではないため不確定な要素が含まれているが、出土遺物のなかには縄文土器は認められなかった。したがって、本遺跡資料が両遺跡よりは後出するものであるのか、それとも河内平野の中央部で当該期に成立した山賀遺跡のように縄文社会と接点が少ない集落であったのかを検討する必要があろう。

弥生時代中期

弥生時代中期中葉～後葉（畿内第III様式～第IV様式）に比定される遺構・遺物は、弥生時代前期の遺構を検出した第5トレンチの南部を中心に検出されている。遺構としては、中期中葉（畿内第III様式）に比定されるSK-7を検出したのみであるが、第5トレンチ南部の遺物包含層からは中期後葉（畿内第IV様式）の遺物が出土しており、前期と同様第5トレンチの南東部を中心に集落が展開したことが推定される。同時期の集落は、本調査地の南約1kmに恩智遺跡、北約

1.4kmに水越遺跡が存在しており、水越遺跡第2次調査（MK89-2）では、集落を囲繞する大溝が検出されている。^{註6}

古墳時代初頭～前期（庄内式期～布留式期）

古墳時代初頭（庄内式期）の遺構としては、第4トレンチの東部で検出したSK-1・SD-11があり、調査地区内の比較的高所に居住域が設けられている。古墳時代前期（布留式期）の遺構は、第1トレンチ北区で検出したSD-2～SD-6と、第1トレンチ南区から第4トレンチの西部で検出した水田1・水田8、畦畔1・畦畔10、第5トレンチ中央部で検出したSD-12がある。第1トレンチ北部で検出した溝群（SD-2～SD-6）については、おそらくNR-2の一時的な出水による自然流路的な性格を持つものと考えられるため、これらを除外すれば、西部の第1トレンチ南区から第4トレンチ中央部以西に生産遺構、東部の第5トレンチ中央部より東部に居住域が想定される。生駒西麓部に成立したこの時期の遺構は、本遺跡と同様、扇状地性低地を中心に展開したものが大半である。周辺の遺跡に限定すれば、古墳時代初頭～前期（庄内式期新相～布留式期古相）の集落が郡川遺跡第3次調査（KR94-3）、水越遺跡第5次調査（MK95-5）^{註7}で検出されている他、布留式期古相～新相に比定される集落が恩智遺跡内で昭和50～53年に行われた恩智川改修に伴う調査や当調査研究会が行った第1次調査（OJ85-1）^{註8}で検出されている。

古墳時代中期～後期初頭

当該期の遺構としては、第2トレンチで検出した水田2～水田7・畦畔2～畦畔9と水田遺構に付随したSD-7・SD-8から成る生産域と第5トレンチの第1面で検出した居住域に関連したSK-2・SK-3、SP-1～SP-5がある。第2トレンチで検出した水田は、東部で検出したNR-1から引水し、東西で0.45mの高低差を利用して灌漑を行ったもので、土壌の特徴から半乾田であったことが推定される。一方、NR-1の洪水砂層を中心とした堆積層準が示すように、生駒西麓部を流下する小河川は流路長が短く、平生の水流は少ないが一旦大雨があれば土石を伴う多量の水を一時に下方に押し流し、網目状に流路を形成していたものと推定される。したがって、NR-1の流路管理および恒常的な水量確保の為の堰が設けられていたものと推定され、第2トレンチ東部の洪水砂層内から出土遺物量が比較的多いことを勘案すれば、第2トレンチの東北部に近接する位置にこれらの施設が存在した可能性がある。これらの生産域に伴う居住域が第5トレンチの北部で検出されており、東部に居住域、西部に生産域を配する点においては前代と共通した特徴を示している。周辺で検出された当該期の集落としては、本調査地の北東約450mで実施された第1次調査（KR89-1）^{註11}および市教委調査(63-193)^{註12}で古墳時代中期後半～後期に比定される集落が検出されている。これらの調査では、日常雑器類と共に鉄滓・轍の羽口・韓式系土器等が出土しており、氏族の出自や職掌を推定するうえで示唆的である。本遺跡および郡川遺跡第1次調査（KR89-1）で検出された集落と有機的な関わりを持つ古墳としては、調査地南約140mに存在する塚本塚古墳（5世紀後半）および東部生駒西麓部に点在する高安古墳群のなかの郡川支群・黒谷支群が考えられる。今回の調査成果や周辺で行われた既往調査を総合すれば、当該期の生活基盤が生駒西麓部の扇状地性低地（新期扇状地下位面）一帯に想定でき、従来考えられてきた平野部に生活基盤を持ち、生駒西麓部に墓域を持つ集落構成の有り方を根本的に再考する必要が生じてきた。

室町時代中期（15世紀後半）

第5トレンチ南部の第1面で、石組みの井戸1基（SE-1）を検出した。当該期の遺構としては、本遺構のみで遺物包含層からも同時期の遺物の出土は少なくやや不明な点があるが、遺構の性格としては、居住域内の小区画単位で使用されたものと考えられよう。この井戸を検出した第5トレンチの南端は、現在の八尾市のはば中央部を横断し、信貴山を経て大和の竜田に抜ける信貴越道に面している他、さらに東約50m地点には、京都から河内の山際を経て高野山に至る東高野街道^{註14}が通じていることから、街道に沿って展開した集落であったことが想定される。

註記

- 註1 久貝 建他 1979「鬼塚遺跡」『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高校地歴部
- 註2 福永信雄 1997「河内潟東辺の弥生時代開始期における集落形態について」『宗教と考古学』金関恕先生の古希をお祝いする会
- 註3 高萩千秋 1989「I 水越遺跡（第1次調査）」『(財)八尾市文化財調査研究会報告23』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註4 田代克己他 1980『恩智遺跡I（本文編）』瓜生堂遺跡調査会
- 註5 西口陽一・宮野淳一他1984『山賀遺跡（その3）』(財)大阪文化財センター
- 註6 西村公助 1997「V水越遺跡第2次調査（MK89-2）」『(財)八尾市文化財調査研究会報告57』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註7 坪田真一 1995「10. 郡川遺跡第3次調査（KR94-3）」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註8 坪田真一 1996「27. 水越遺跡第5次調査（MK95-5）」『平成7年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註9 曾我恭子他 1981『恩智遺跡III（資料編）』瓜生堂遺跡調査会
- 註10 高萩千秋 1989「III恩智遺跡（第1次調査）」『(財)八尾市文化財調査研究会報告23』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註11 原田昌則 1997「II郡川遺跡第1次調査（KR89-1）」『(財)八尾市文化財調査研究会報告57』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註12 近江俊秀 1989「15. 郡川遺跡（63-193）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書』八尾市文化財報告19 八尾市教育委員会
- 註13 青木勘時 1990「7郡川遺跡（89-224）の調査」『八尾市内遺跡平成元年発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- 註14 棚橋利光 1989「三、街道の現状（八）信貴越道」『奈良街道』歴史の道調査報告書 第四集 大阪府教育委員会

図 版



第1 トレンチ北区全景(北から)



第1 トレンチ南区全景(北から)

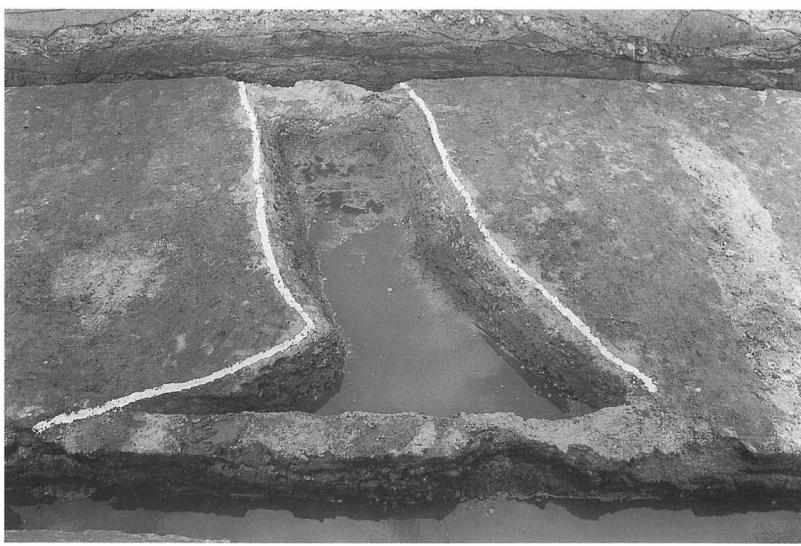
図版



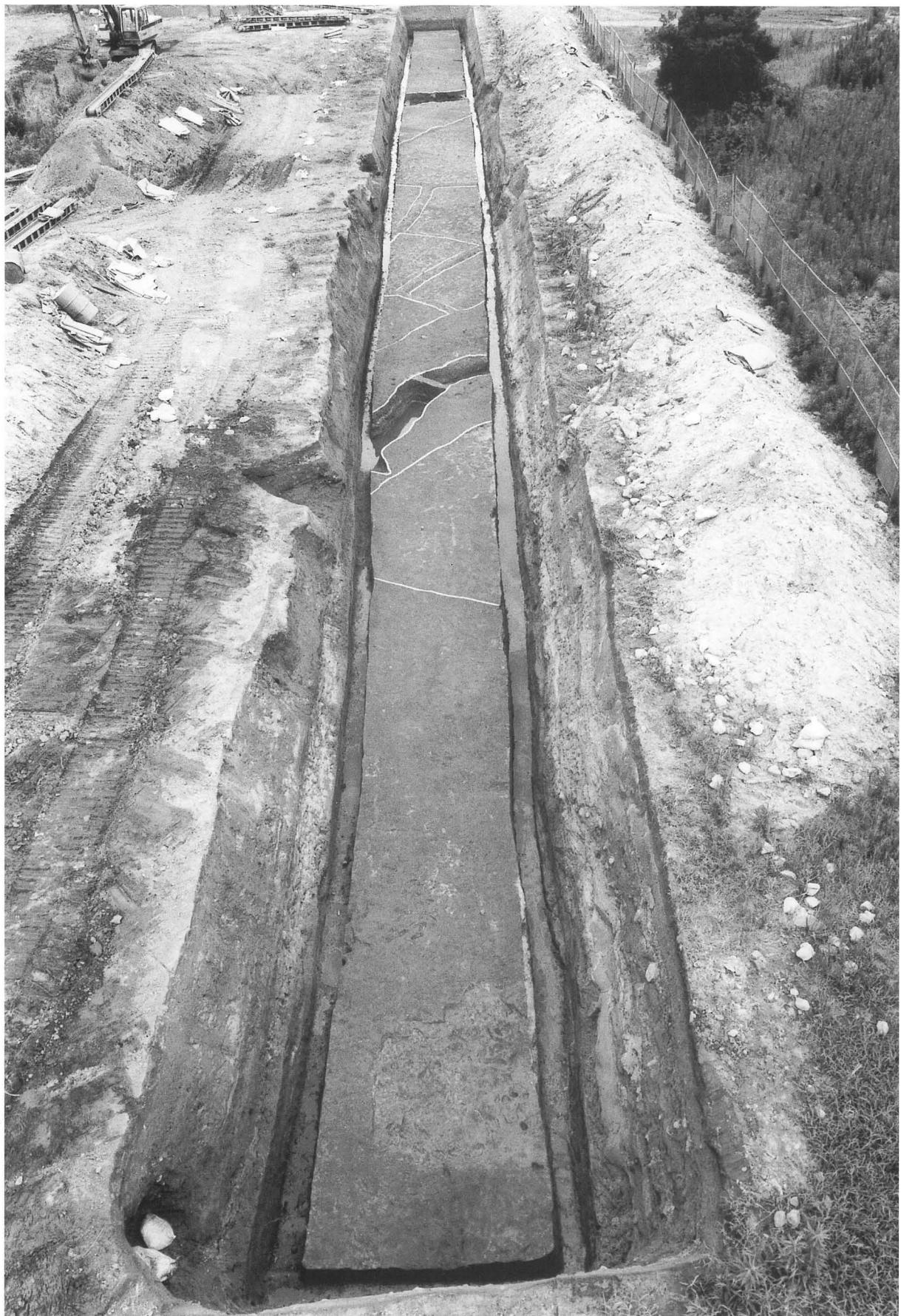
第1 トレンチ北区SD-1(西から)



第1 トレンチ北区SD-4(西から)



第1 トレンチ北区SD-6(西から)



第2トレンチ全景(東から)

図版四



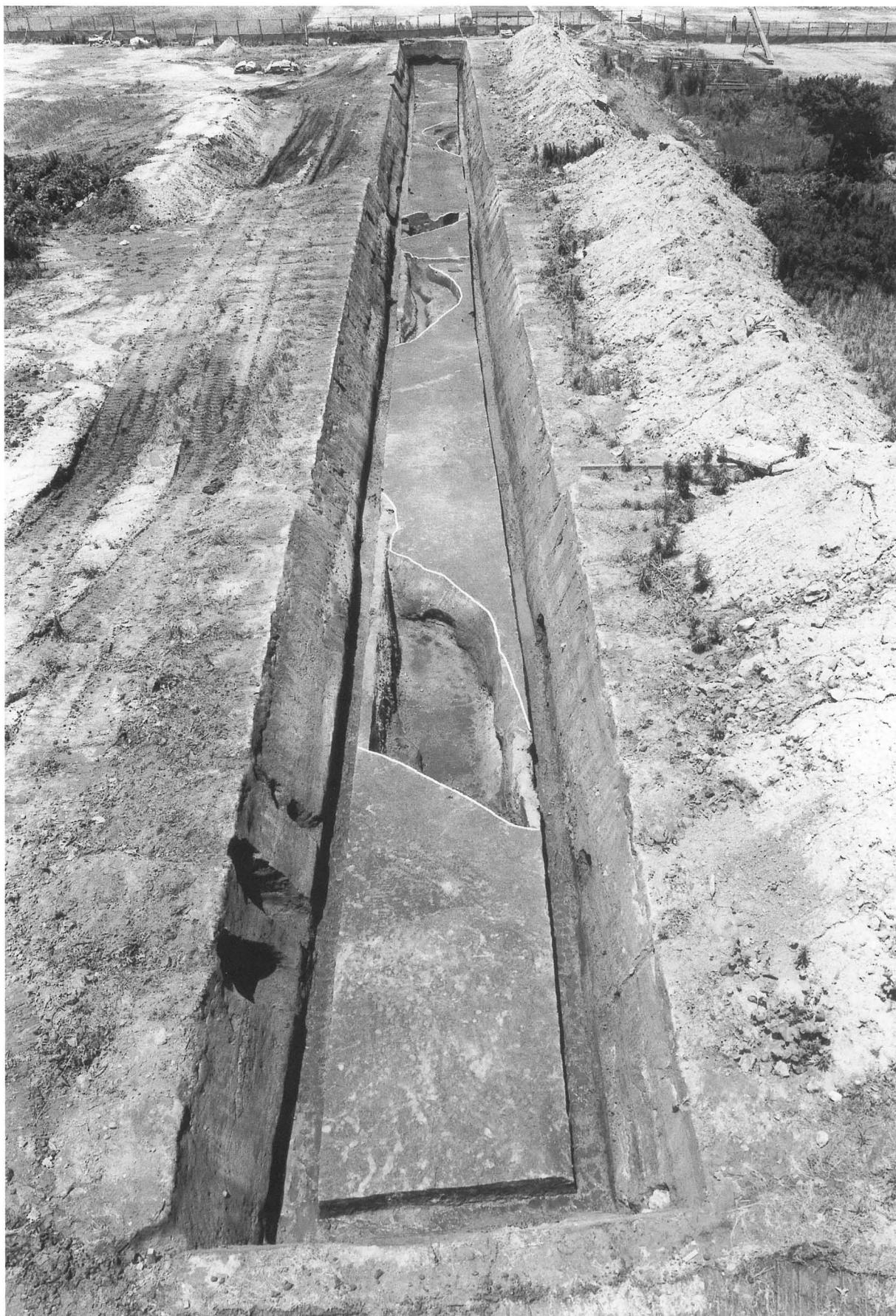
第2 トレンチ水田 2～水田 5 (南から)



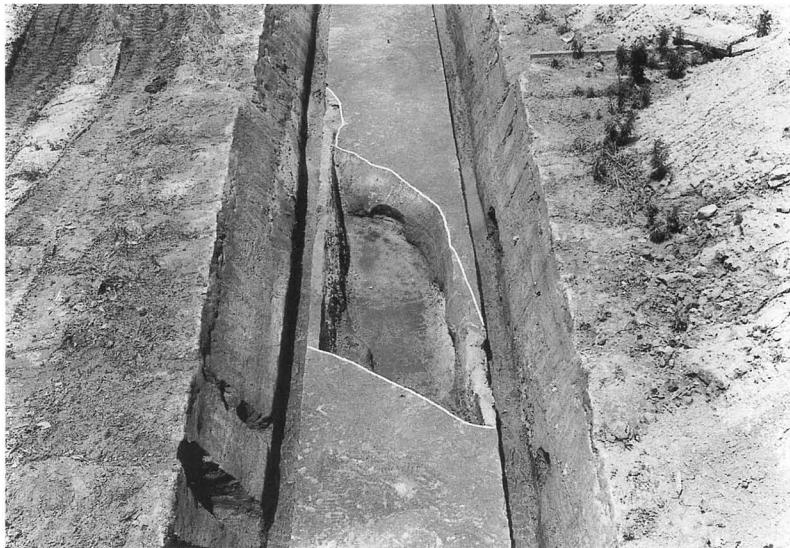
第2 トレンチ水田 4～水田 7 (南から)



第2 トレンチ水田 5～水田 7 (南から)



第3 トレンチ全景(東から)



第3 トレンチNR-2 〈9J・K地区〉(東から)



同上 断面(北から)

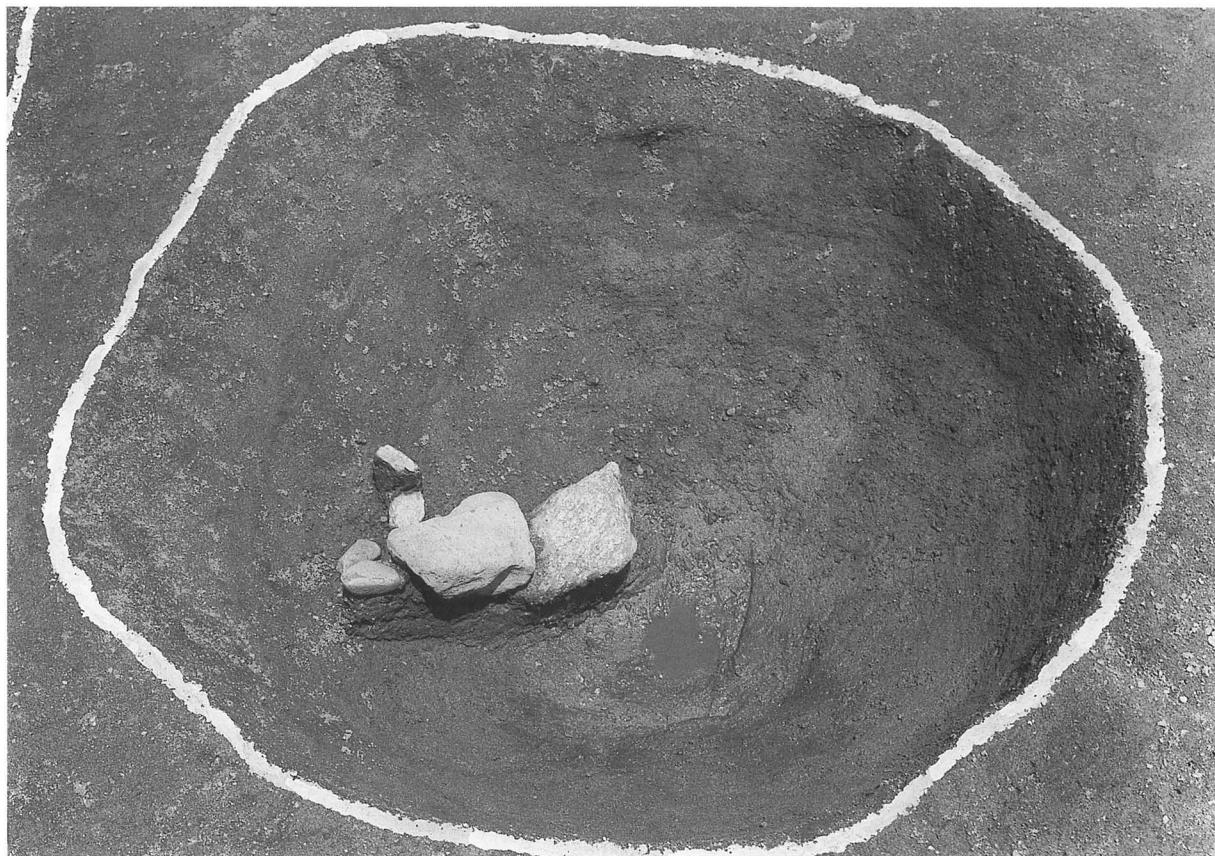


第3 トレンチSD-9(北から)



第4 トレンチ全景(東から)

図版八



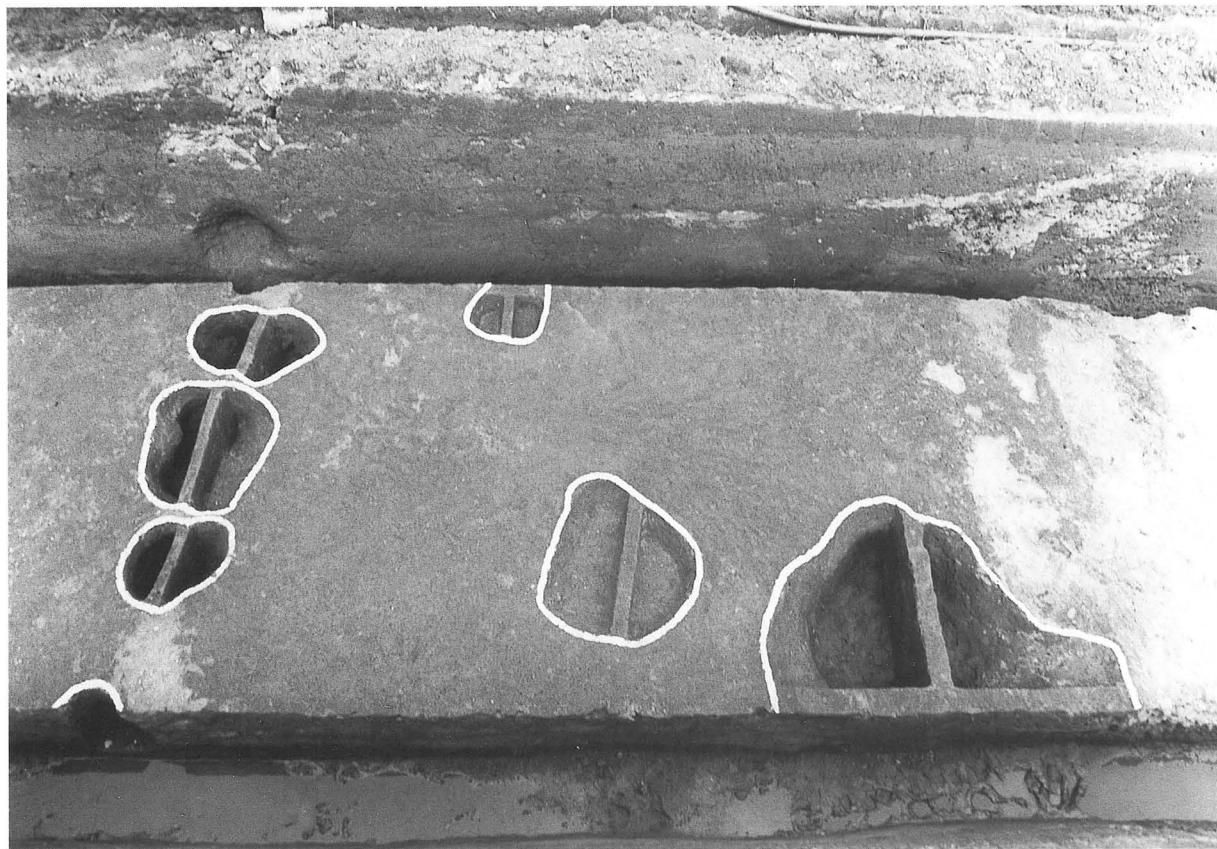
第4 トレンチSK-1(南から)



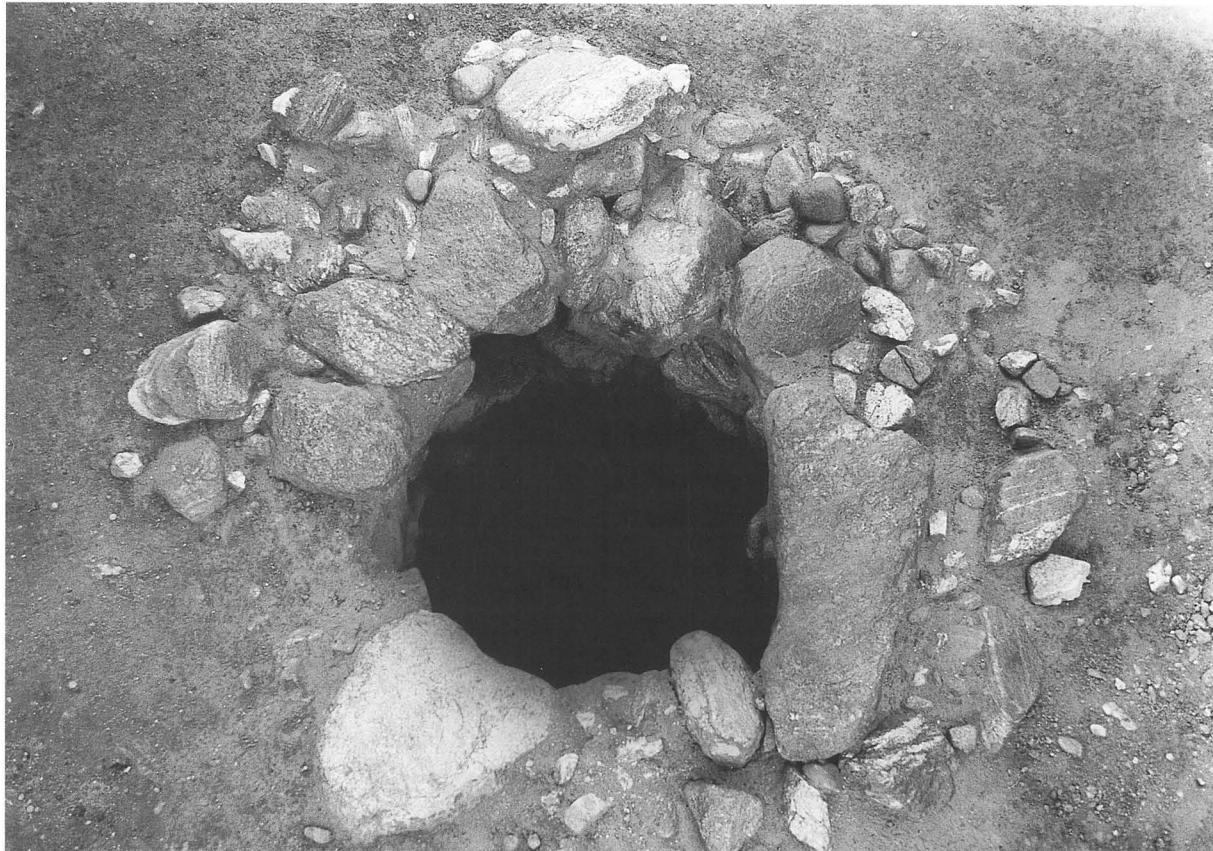
第4 トレンチSD-10(北から)



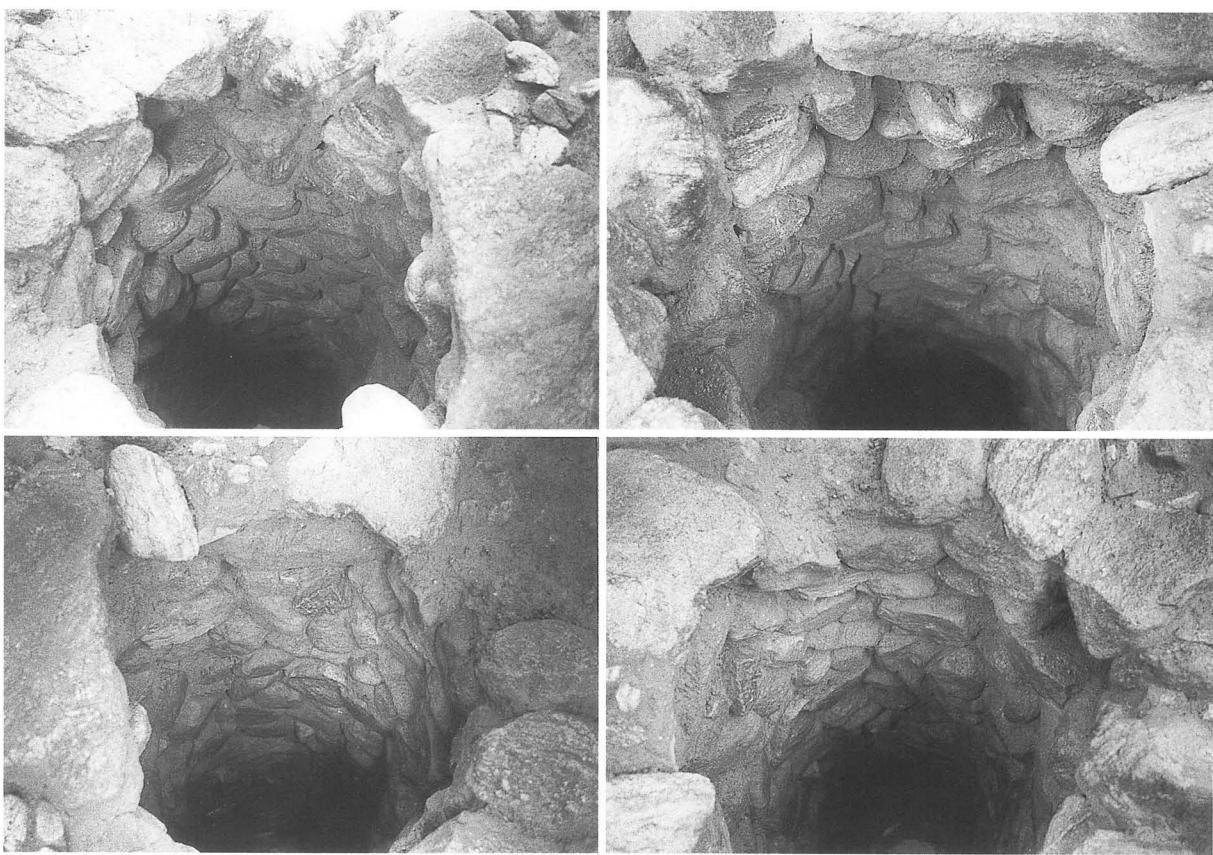
第5 トレンチ第1面北部(北から)



第5 トレンチ第1面検出遺構(西から)



第5 トレンチ第1面SE-1(南から)



同上 細部 左上(南から)、右上(西から)、左下(北から)、右下(東から)



第5トレンチ第2面全景(北から)



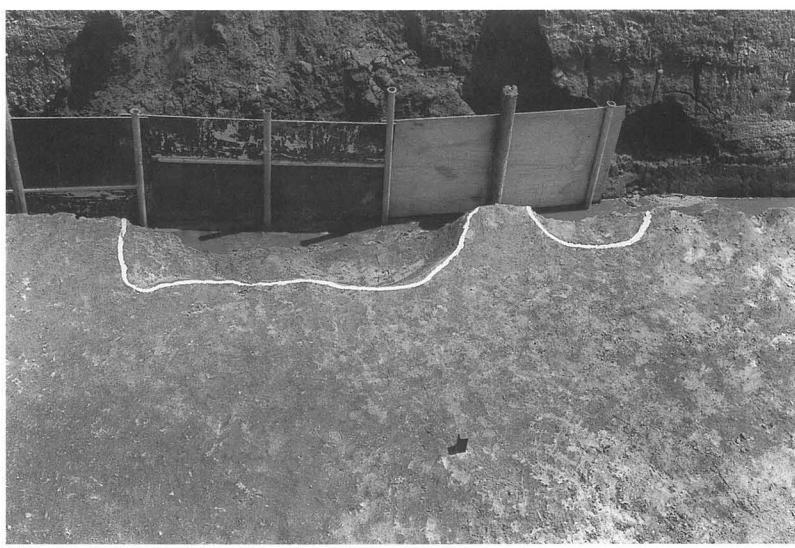
第5トレンチ第2面全景(南から)



第5 トレンチ第2面N R-2(西から)



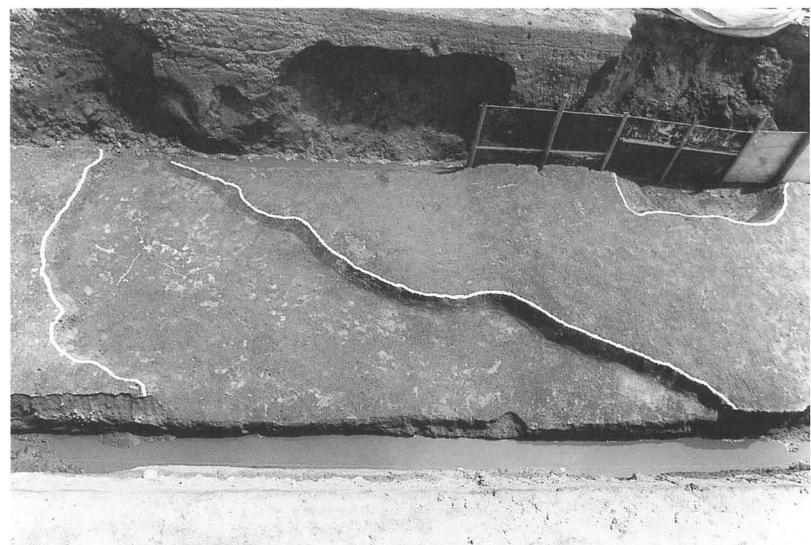
第5 トレンチ第2面S D-12(西から)



第5 トレンチ第2面S K-4・S K-5(西から)



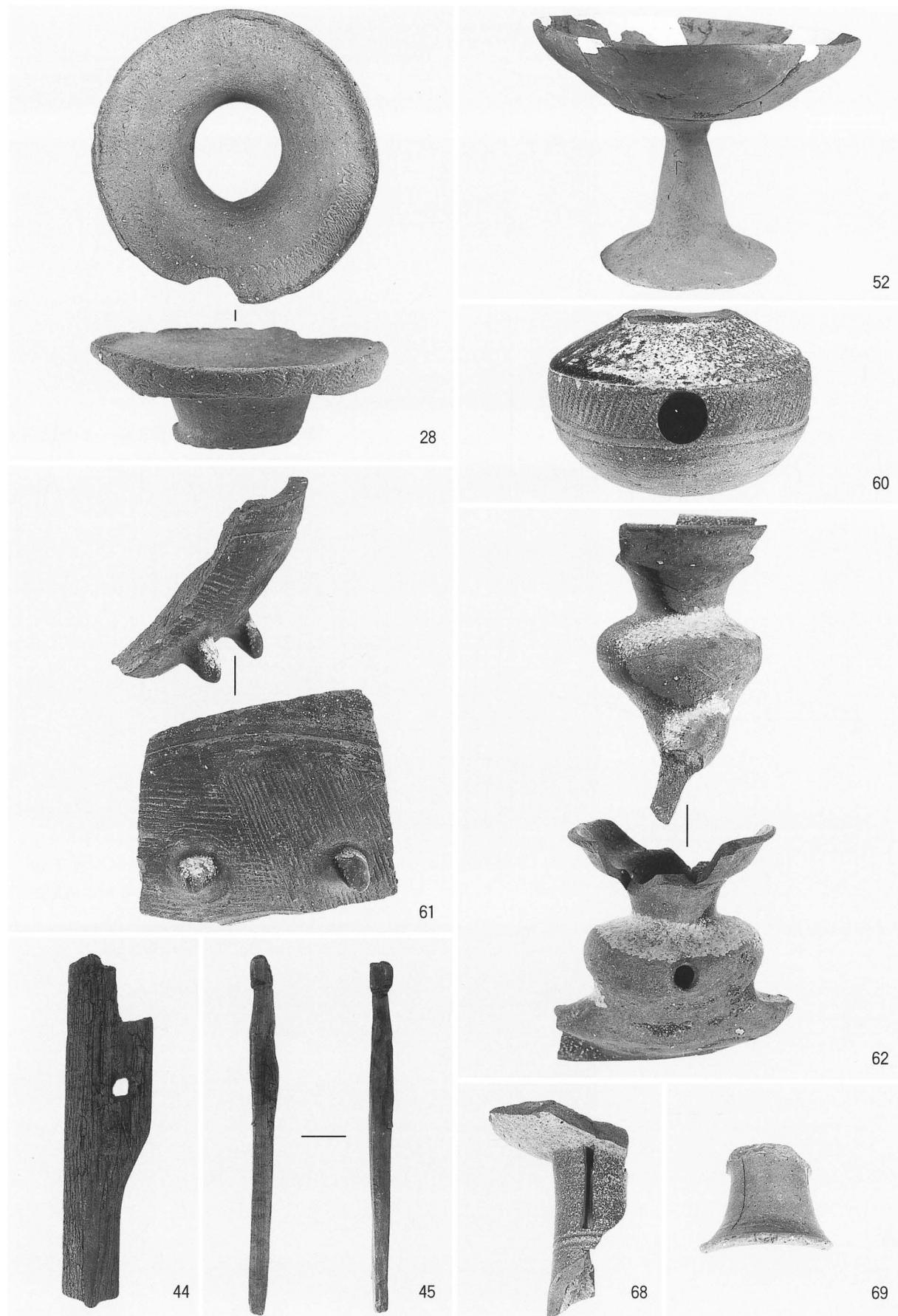
第5トレンチ第2面SK-6(西から)



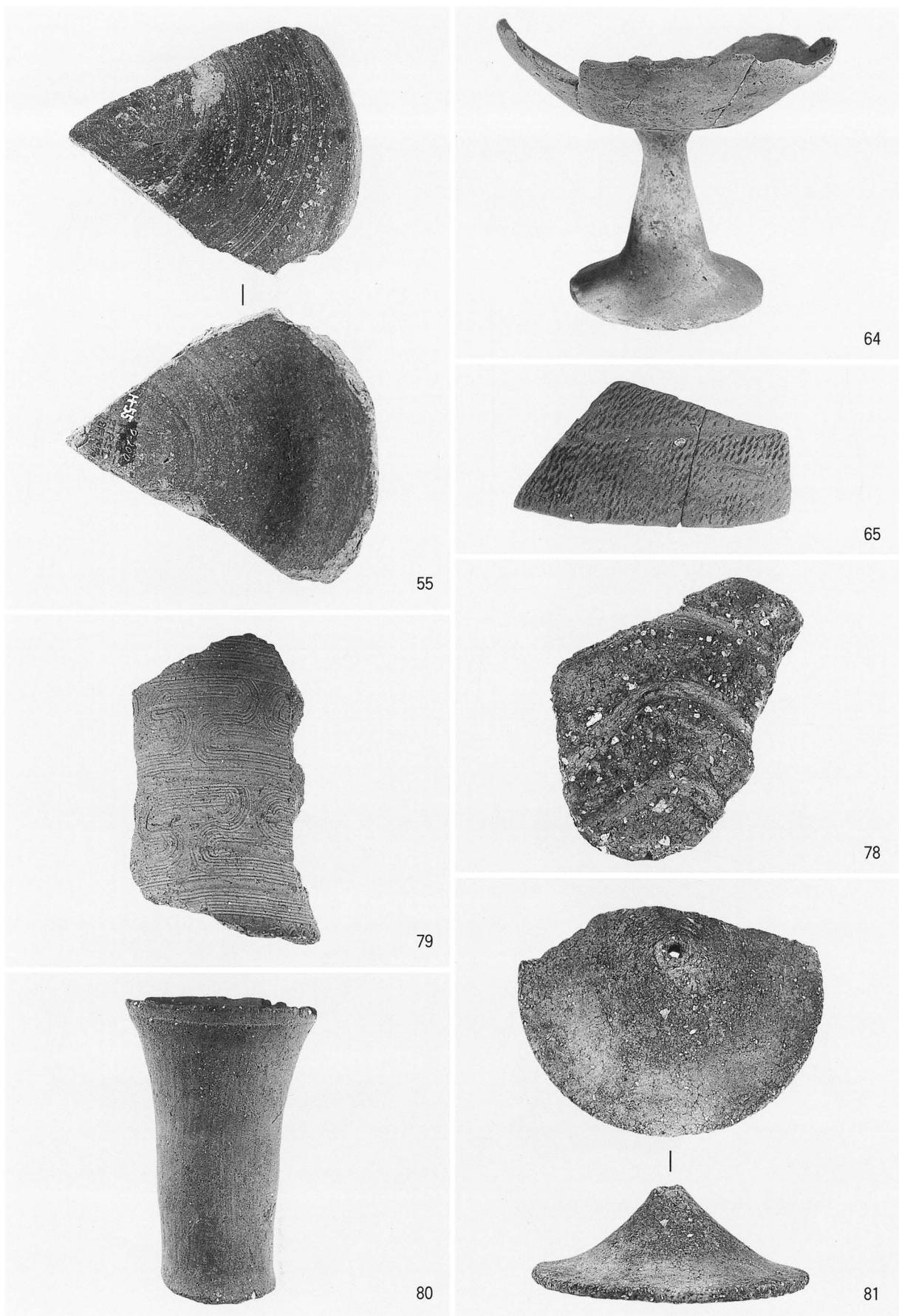
第5トレンチ第2面SK-7(西から)



第5トレンチ第2面SD-13・SD-14(西から)

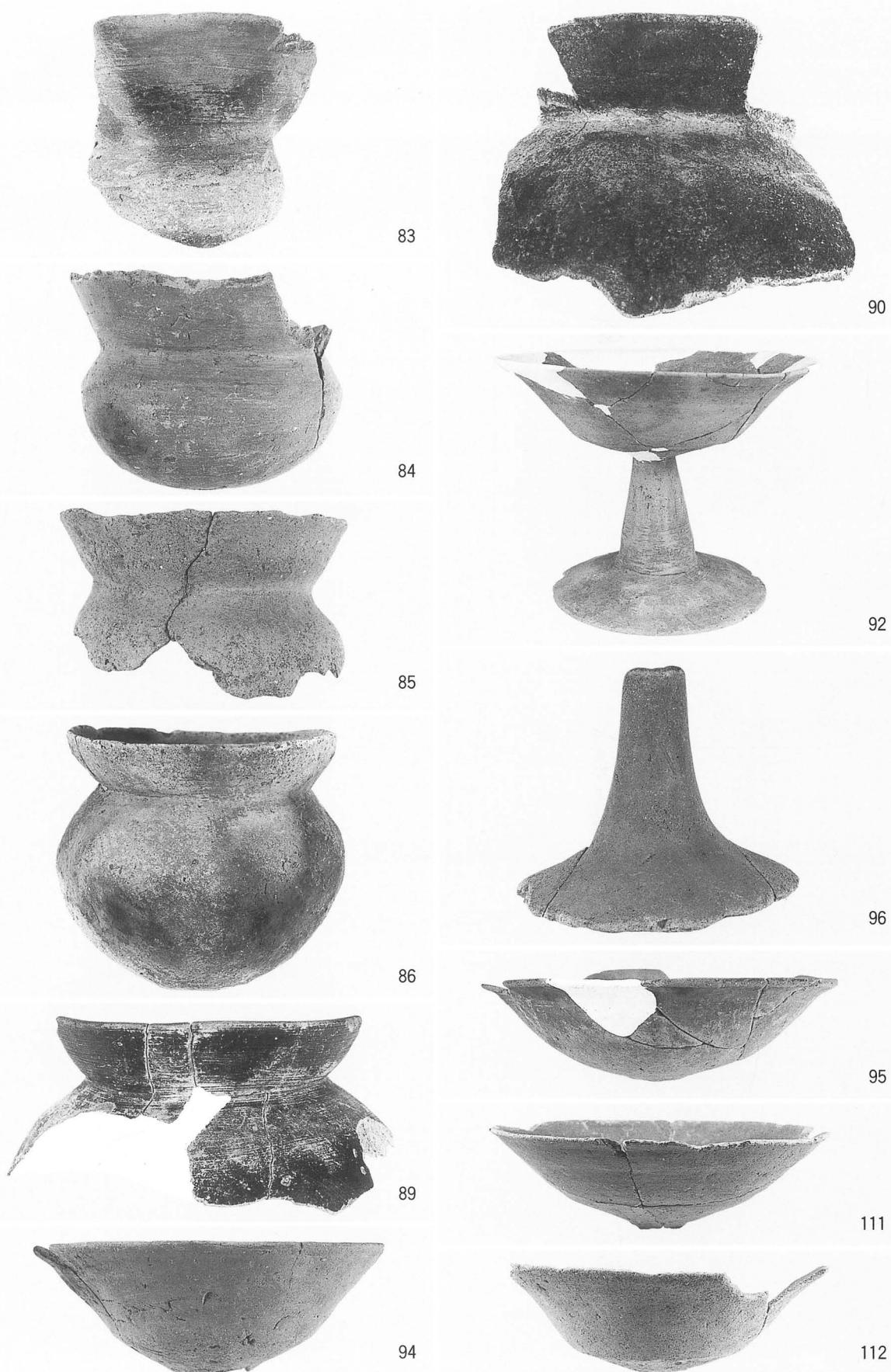


第1トレンチ(28・44・45)、第2トレンチ(52・60~62・68・69)出土遺物

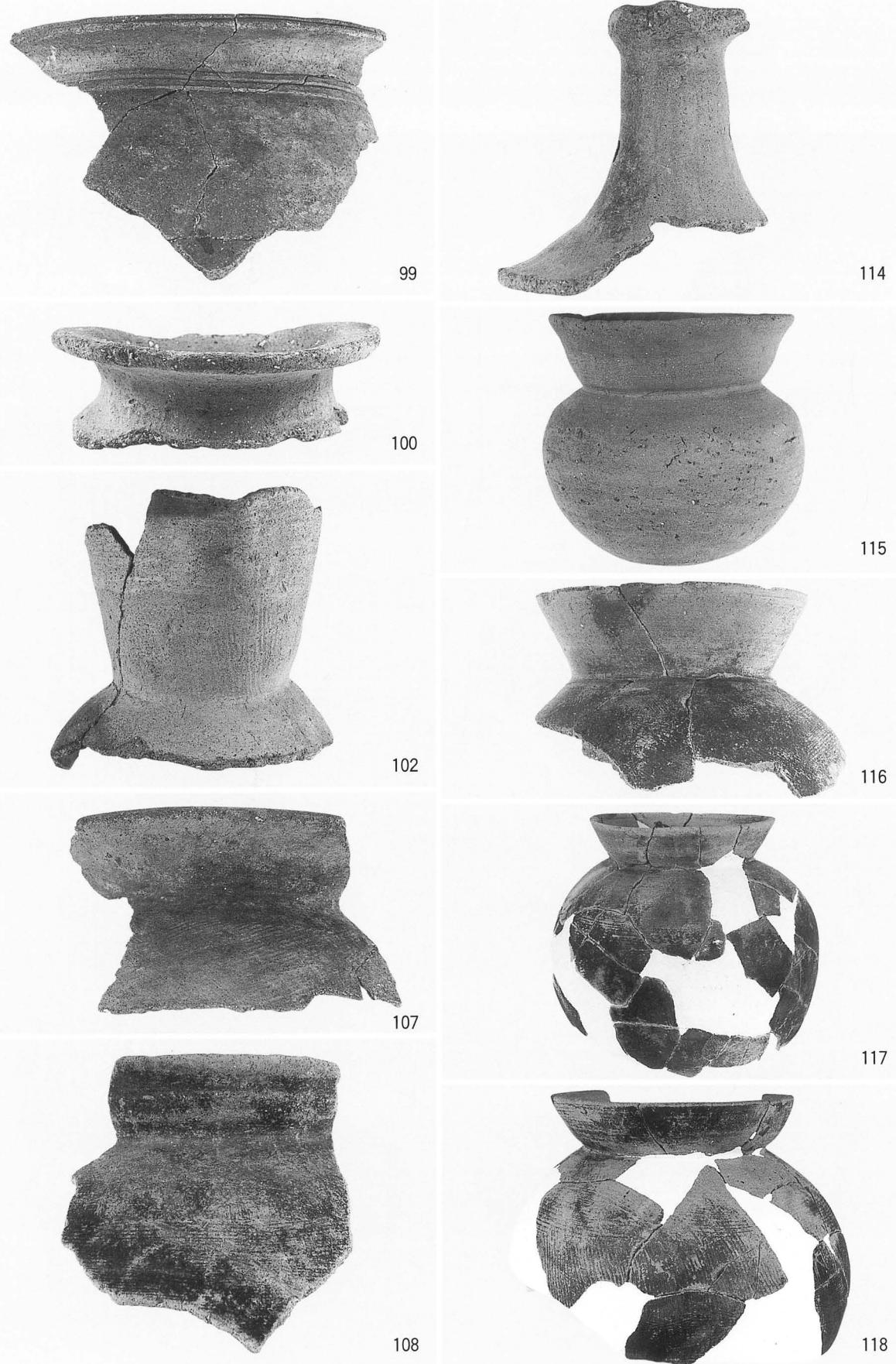


第2トレンチ(55・64・65)、第3トレンチ(78~81)出土遺物

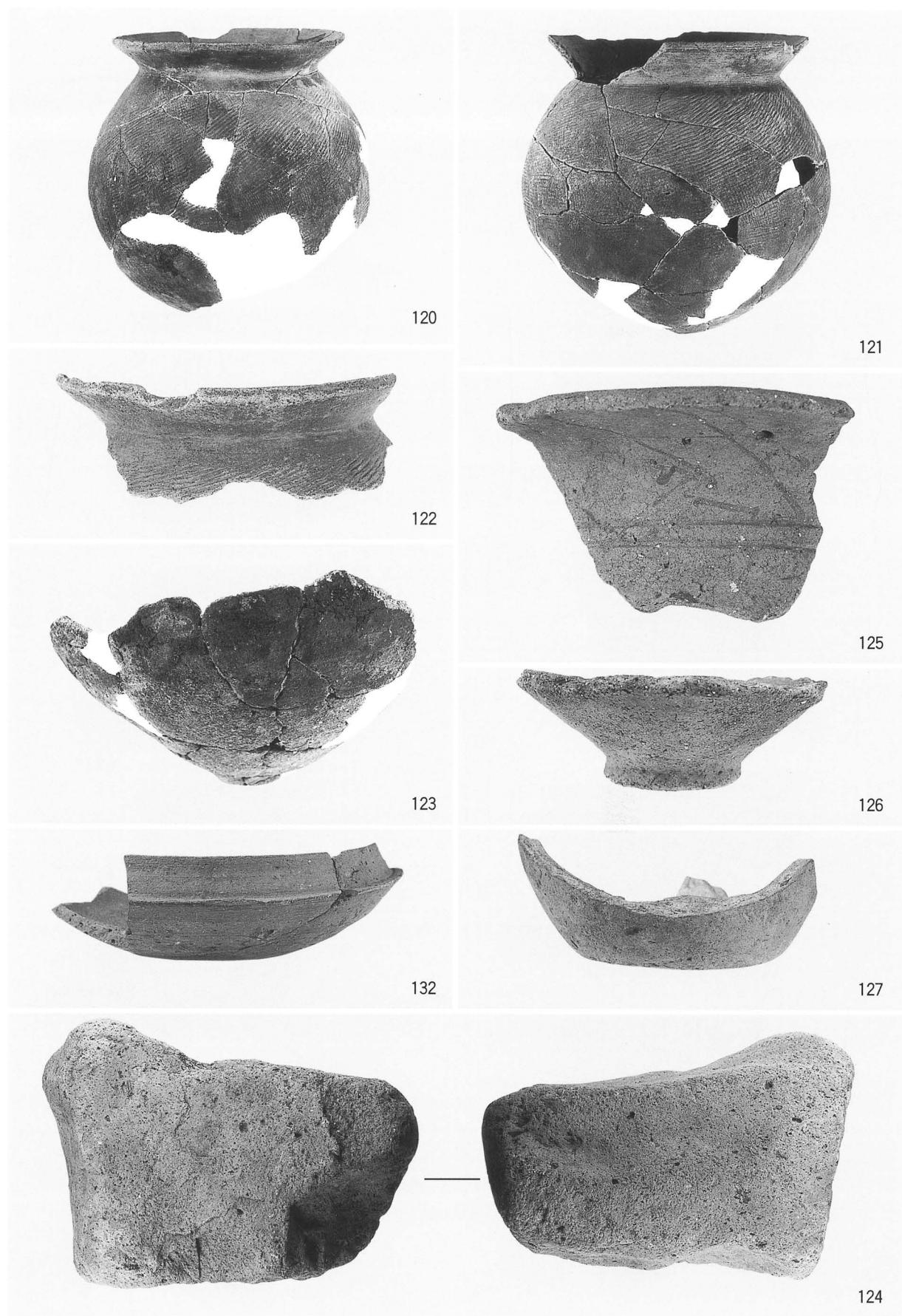
図版一六



第3 トレンチ出土遺物

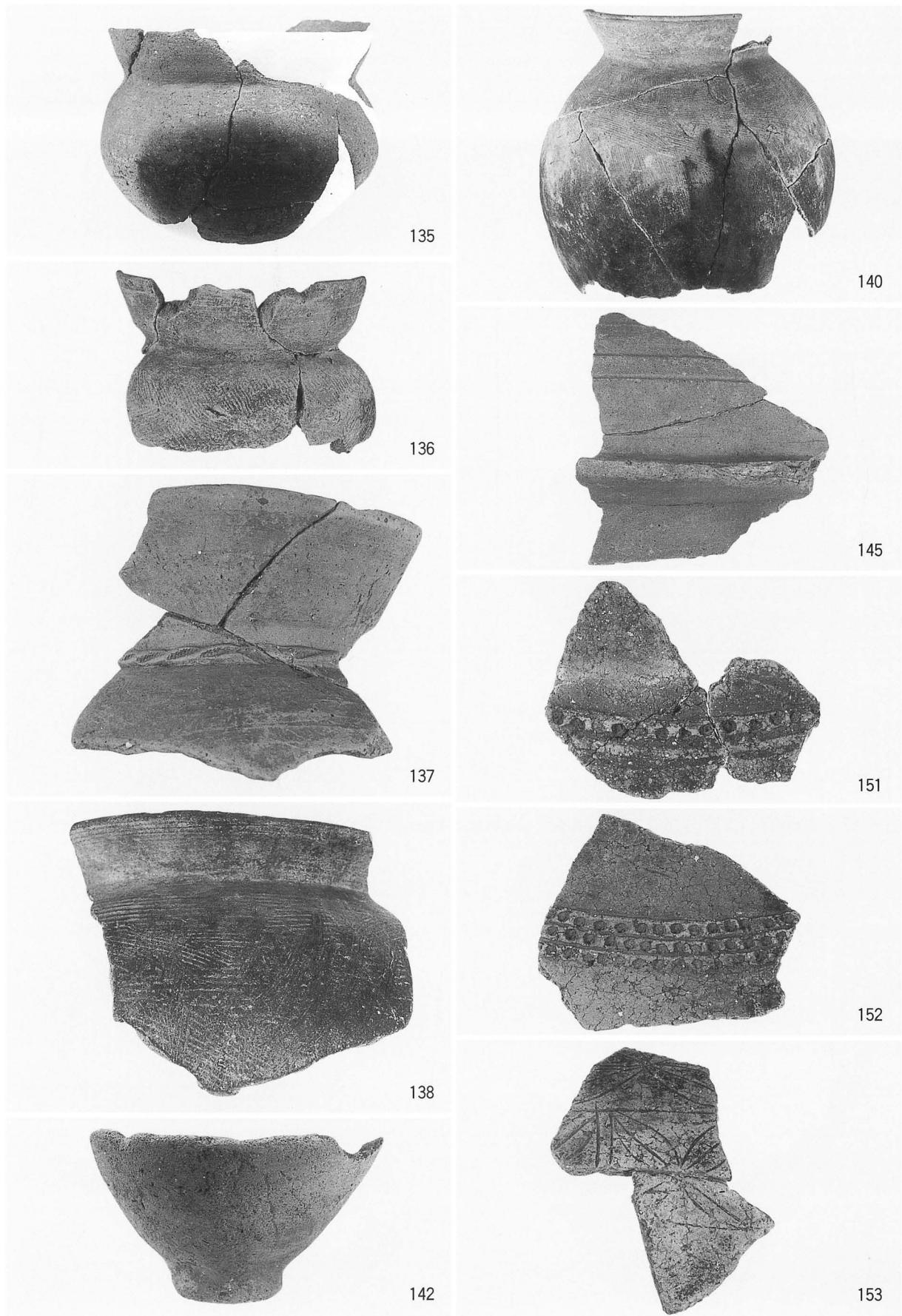


第3トレント出土遺物



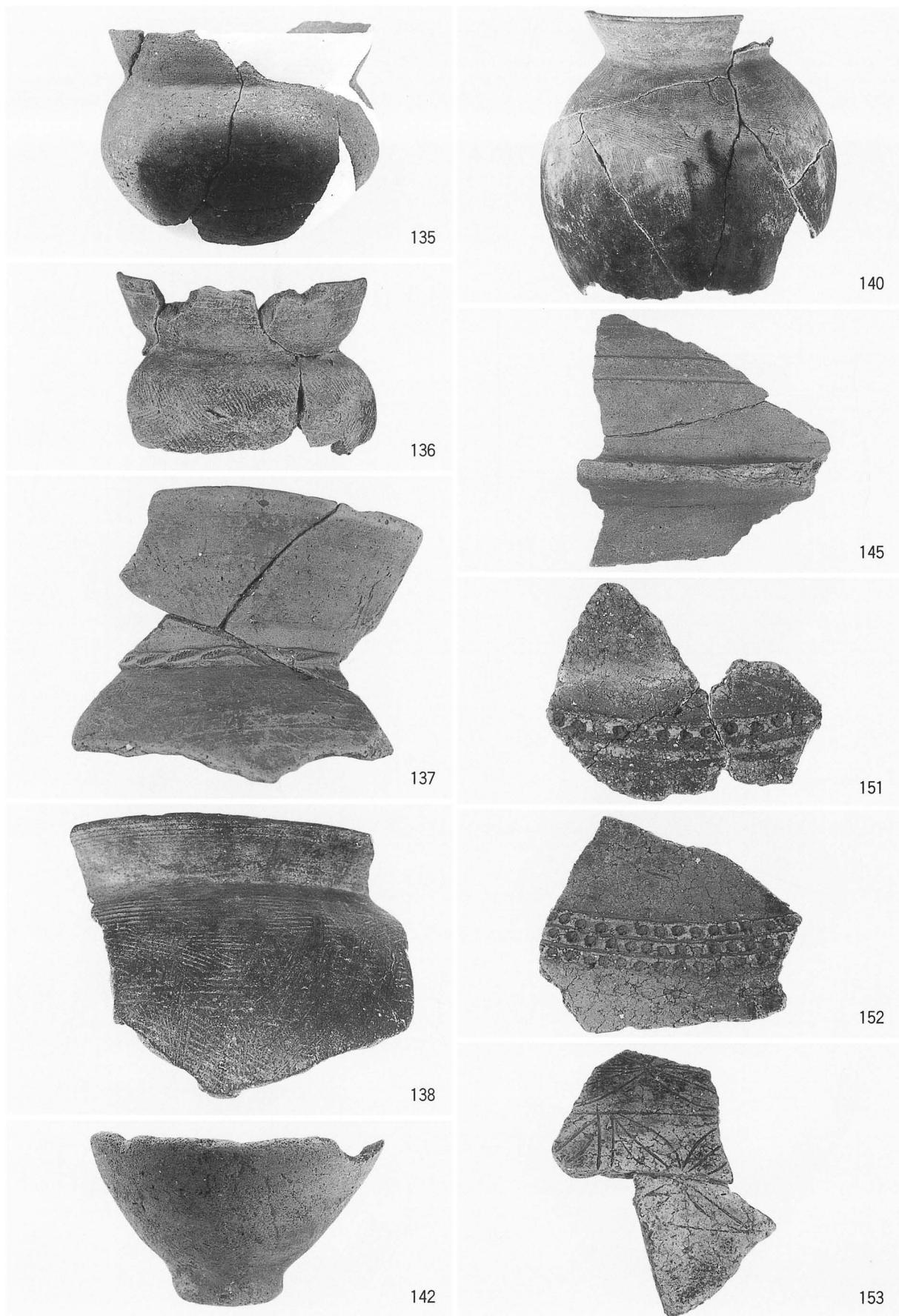
第4 トレンチ出土遺物

図版一九

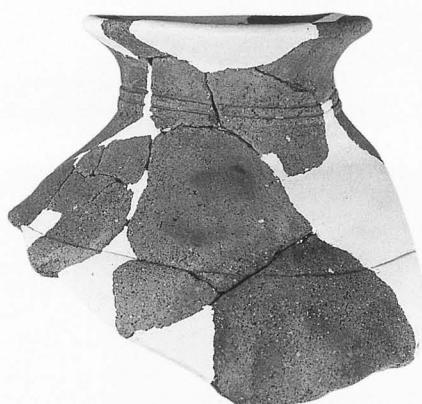


第4トレンチ(135・136~138・140・142)、第5トレンチ(145・151~153)出土遺物

図版一九



第4トレンチ(135・136~138・140・142)、第5トレンチ(145・151~153)出土遺物



155



156



157



158



159



160



161



第5 トレンチ出土遺物



170



163



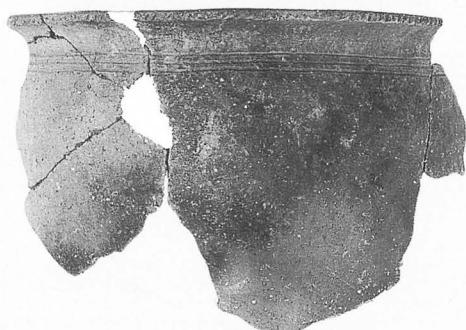
171



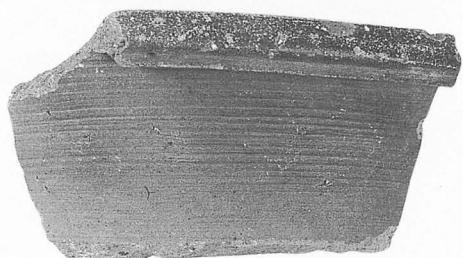
164



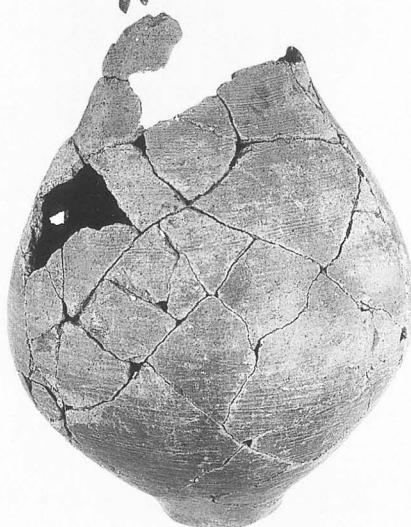
171



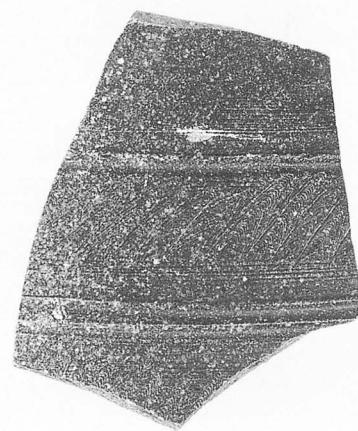
165



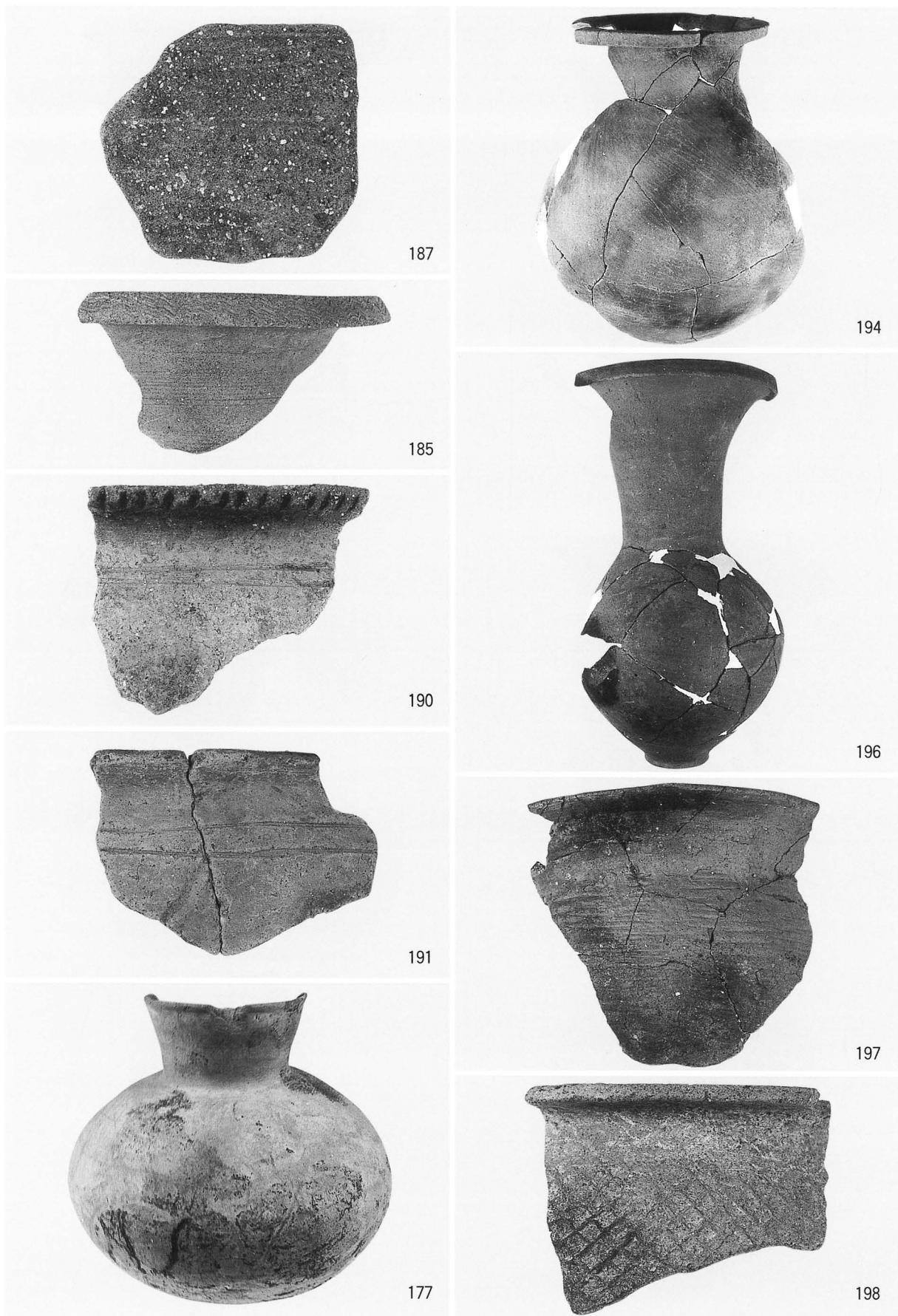
180



172



184



第5 トレンチ出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく64
書名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告 64
副書名	I 東郷遺跡（第34次調査） II 東郷遺跡（第37次調査） III 郡川遺跡（第2次調査）
卷次	
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	64
編著者名	I・II・III 原田昌則
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700
発行年月日	西暦1999年9月

所取遺跡名	所 在 地	コ 一 ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
東郷遺跡 (第34次調査)	大阪府八尾市本町 7丁目89-2他8筆	27212		34度 37分 39秒	135度 36分 10秒	19910108 ～ 19910123	240	共同住宅建設
東郷遺跡 (第37次調査)	大阪府八尾市本町 1丁目91他	27212		34度 37分 24秒	135度 36分 15秒	19910603 ～ 19910930	3177	市庁舎建設
郡川遺跡 (第2次調査)	大阪府八尾市大字教興 寺および大字黒谷	27212		34度 36分 58秒	135度 38分 09秒	19900507 ～ 19900831	2260	区画整理

所取遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
東郷遺跡 (第34次調査)	集落遺構	平安時代後期	溝	土師器・瓦器	平安時代後期・鎌倉時代前～中期の集落を確認。
		鎌倉時代前～中	掘立柱建物・井戸・溝・小穴	土師器・瓦器・須恵器	
		近世	井戸		
東郷遺跡 (第37次調査)	集落遺構	古墳時代前期（布留式期新相）	溝	布留式土器	古墳時代前期の集落。古墳時代後期・飛鳥時代～奈良時代の水田。 西区では、八尾寺内町に関連する遺構の確認。
		古墳時代後期	水田	土師器・須恵器	
		飛鳥時代～奈良時代	水田・溝・河川	土師器・須恵器	
		平安時代	井戸	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・屋瓦・中国産磁器	
		近世	土坑・水路	国産陶磁器・屋瓦	
郡川遺跡 (第2次調査)	集落遺構	弥生時代前期	土坑	弥生土器	生駒西麓部における稻作受容の初期段階の集落を新たに確認。 古墳時代初頭～前期・古墳時代中期の水田を検出。
		弥生時代中期	土坑・溝	弥生土器	
		古墳時代初頭（庄内式期）～前期（布留式期）	土坑・溝・水田	庄内式土器・布留式土器・石材	
		古墳時代中期～後期初頭	土坑・溝・小穴 水田	土師器・須恵器	
		室町時代	井戸	土師器・包丁・砥石	

財団法人八尾市文化財調査研究会報告64

I 東郷遺跡（第34次調査）

II 東郷遺跡（第37次調査）

III 郡川遺跡（第2次調査）

発行 平成11年9月
編集 財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX(0729)94-4700
印刷 (株)近畿印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 書籍用紙 <70Kg>
図版 マットアート <135Kg>

